地（知）の拠点大学による地方創生事業

とくしま元気印イノベーション人材育成プログラム

平成 28 年度事業報告書

次世代技術

地域医療・福祉

６次産業化

地域づくり・観光・ICT

－ 目　　次 －

１．　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

２．　事業概要
「とくしま元気印イノベーション人材育成プログラム」の
概要について・・・・・　2

３．　事業協働機関について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　4

４．　平成 28 年度実施会議一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　6

５．　参加校実施事業
とくしま元気印イノベーター教育プログラムの編成状況について・・・　9
実践力養成型インターンシップの実施について・・・・・・・・・・・・　１７
インターンシップフェア・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２３
インターンシップ中間報告会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　３３
インターンシップ最終報告会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　３６
インターンシップ修了生振り返り会・・・・・・・・・・・・・・・・・　５７
インターンシップ受入団体振り返り会・・・・・・・・・・・・・・・・　６１
四国大学・四国大学短期大学部の取り組みについて・・・・・・・・・・　７０
徳島文理大学の取り組みについて・・・・・・・・・・・・・・・・・・　７７
阿南工業高等専門学校の取り組みについて・・・・・・・・・・・・・・　８１
徳島工業短期大学の取り組みについて・・・・・・・・・・・・・・・・　８３

６．　協働事業
COC プラス特別セミナー「徳島の魅力、徳島で働く」の実施報告・・・　８５
保護者向け企業ガイダンスの実施報告・・・・・・・・・・・・・・・・　８８
平成 28 年度 FD 地域人材育成フェスタの実施報告・・・・・・・・・・　９４

７．　参考資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１００

は じ め に

日本が直面する最重要課題は地方の人口減少問題の克服であり、そのためには地方に雇用を創出して地方への人の流れを作り、「東京一極集中」の是正に取り組む必要があります。地方国立大学は、地域における知の拠点（COC＝Center of Community）として，産官学の力を結集した地域の産業振興や雇用創出、地域の高等教育機関との連携による地域人材育成の中核としての使命を果たさなければなりません。

平成 27 年度、県内の６つの高等教育機関（徳島大学，四国大学、四国大学短期大学部、徳島文理大学、徳島工業短期大学、阿南工業高等専門学校）と徳島県の主要企業、NPO、関連団体による事業協働体を組織し，文部科学省補助事業「地（知）の拠点大学による地域創生推進事業（COC+）」の申請を行い，県内の雇用創出・若者定着を目指す「とくしま元気印イノベーション人材育成プログラム」（平成 27～31 年度）が採択されました。

この事業は、事業協働体による「とくしま元気印イノベーション人材育成協議会」を組織し、徳島県において雇用創出と学生の就職率向上が期待できる４つの分野（①「次世代技術関連分野」、②「地域医療・福祉関連分野」、③「６次産業化関連分野」、④「地域づくり・観光・ICT 関連分野」）を設定して、その４分野に合わせた (1)「寺子屋式インターンシップを柱とした産官学連携による教育カリキュラム改革」、(2)「地域就職率の向上に向けた協働事業の実施」、(3)「徳島県の「vs 東京『とくしま回帰』総合戦略」による雇用創出」の３つの事業を推進し、５年後に県内の高等教育機関からの県内就職率を 10%増加させようとする取組です。

事業の２年目となる平成 28 年度は、徳島大学での「とくしま元気印イノベーター教育プログラム」の導入や、「寺子屋式インターンシップ」の本格導入に先駆けて実施した「実践力養成型インターンシップ」、四国大学での「とくしまサイコー塾」や「とくしま学生ビジネスプラン道場」、また、地域で活躍する各参加校の OB・OG 等によるサテライト配信講義の導入に向けて試行した「COC プラス特別セミナー」、保護者と学生に向けて徳島の企業の魅力を伝達する「企業ガイダンス」、大学、自治体、企業、NPO 等の事業協働体が一体となって行う「FD 地域人材育成フェスタ」など、様々な事業を実施しました。

この度、平成 28 年度の取組の詳細を成果報告書として取りまとめましたので、ご一読頂ければ幸いです。

今後も、本事業の目標達成に向けて、事業協働機関一体となって地方創生に取り組んでまいりますので、更なるご支援、ご協力をお願い申し上げます。

とくしま元気印イノベーション人材育成協議会会長
徳島大学長

野 地 澄 晴

事業概要

「とくしま元気印イノベーション人材育成プログラム」の概要について

本事業の目的は、地元の高等教育機関並びに自治体・企業・NPO 等との間で「とくしま元気印イノベーション人材育成協議会（以下「協議会」という。）を組織してインターンシップをはじめとする教育プログラム開発に協働して取り組むことを通して、地域の未来にビジョンを持ち、地域イノベーションに意欲と専門知識等を持って主体的に参画する「元気印」のイノベーション人材を育成することで、新たな就労先の開拓を含めた卒業生の県内就職率の向上を目指すことである。

そのために本事業では、地域イノベーションを通じて徳島県で新たな雇用創出と学生の就職率向上が期待される 4 分野（①次世代技術関連分野、②地域医療・福祉関連分野、③6 次産業化関連分野、④地域づくり・観光・ICT 関連分野）を選定して、この 4 分野に対応した教育プログラムを学内に設けると共に、地域協働機関に設置する「教育プログラム開発委員会」にも 4 つの分科会を置いて、地域のニーズを分野ごとに把握するとともに、産官学協働の取り組みによりインターンシップ受入企業の増加と受入れノウハウの共有を進め、申請大学の教育プログラムや参加校の教育にその内容を反映させる。また、これにより、大学以外の事業協働機関による事業への満足度 100%達成に向けて努力する。

その際、インターンシップを受入機関任せにせず、事前学習からインターンシップ、そして事後の振り返りを徹底するため、課題とレポート、ディスカッションを繰り返す「寺子屋式指導法」（チュートリアル）を開発して導入する。この教育法の開発と普及のため、「COC+FD 委員会」を組織し、教育プログラム担当教員の FD 活動に組織的に取り組む。

また、既存のキャリア教育の中に地元で活躍する各分野のリーダーや OB・OG を講師とした、地域の将来のビジョンや地域で働くメリットを学生に伝える講座を取り入れると共に、参加する高等教育機関との間で「とくしま高等教育コンソーシアム」を組織して、同様の講座や高校生向けの講座、地元企業の合同説明会を共同開催して、地域全体で学生の地域に対する関心を高め、地域に対する誇りや将来ビジョンへの認識を豊かにして、事業協働地域全体の県内就職率向上を目指すことが本事業の目的である。

平成27年度 地（知）の拠点大学による地方創生推進事業 ～地（知）の拠点COCプラス～

とくしま元気印イノベーション人材育成プログラム

とくしま元気印 イノベーション人材育成協議会

徳島県内の39機関で事業協働体を組織
- 高等教育機関［徳島大学・四国大学・四国大学短期大学部・徳島文理大学・徳島工業短期大学・阿南工業高等専門学校］
- 徳島県 ●12の地元企業
- 3つのNPO法人 ●17の関連団体

事業運営担当コーディネーター

徳島の課題 ……●人口減少・超高齢社会 ●若年層人口の流出 ●厳しい財政状況

徳島の可能性 ……徳島県で雇用創出と就職率向上が期待される4分野
1. 次世代技術関連分野（LED・自動車・ロボット等）
2. 地域医療・福祉関連分野
3. 6次産業化関連分野
4. 地域づくり・観光・ICT関連分野

PDCAサイクルの構築　外部評価委員会

徳島大学 人材育成

徳島大学 教育カリキュラム改革
- 全学生が地域志向科目を受講
  地域の文化や地域への理解・愛着
- ボランティアパスポートの普及
  課題に挑戦する元気・覇気

教育プログラム開発担当コーディネーター

4つの分野に対応した教育プログラムの開発
- 専門分野に必要な能力（知識・技術の向上）
- キャリア教育科目の充実
  「徳島の将来ビジョン」「徳島で暮らすメリット」2つの確信
- 寺子屋式インターンシップの導入
  職業人意識とコミュニケーション力の育成

「COC ＋ FD委員会」教育法の開発と普及

参加校

とくしま高等教育コンソーシアム
- e-learningによるweb配信授業の実施
- 地元で活躍するOB・OGによる合同授業
- 教育カリキュラム開発プログラムの導入

協働事業　地域に対する誇りや将来ビジョンの認識
- 駅前協働キャンパス授業の開講
- 学生・父兄向け「合同就職説明会」
- 「創業支援事業」
  ビジネスコンテストなどの起業支援
- 「FD地域人材育成フェスタ」
- 県内インターンシップの拡充（30%増）と企業メンターの導入
- 教育プログラム開発委員会（全機関参画）

協働事業担当コーディネーター

雇用創出に向けた事業
プログラムの政策的な支援と施策への反映
- 産学官金連携による4分野の雇用創出
  - 「LEDバレイ構想」の推進
  - 「とくしま『健幸』イノベーション構想」の推進
  - 「アグリサイエンスゾーン」の構築
  - 「とくしまサテライトオフィスプロジェクト」の推進
- 若者定着促進に向けた取組
  - 地元就職促進・奨学金返還支援制度
  - トビタテJAPAN! 地域人材コース
- 地域と連携した教育・研究活動の実施
  - 「地域連携フィールドワーク講座」の開講

雇用創出

VS東京『とくしま回帰』総合戦略（平成27年7月策定）

とくしま元気印イノベーション人材

4つの能力
- 地域文化や地域への理解・愛着
- 専門分野の知識・理解
- 明確な職業人意識とコミュニケーション力
- 課題に挑戦する元気・覇気

2つの確信
- 地域の将来に対するビジョン
- 地域で暮らすことのメリット

雇用創出
- 先端技術開発による新領域への展開
- 多職種協働による医療・介護分野の新規雇用
- 6次産業化キャリアアップシステム構築によるイノベーション展開
- ICTを活用した地域づくり、観光等の新規雇用

数値目標 県内就職率を10％増

事業協働機関について

事業協働機関について

地元の高等教育機関並びに自治体・企業・NPO 法人等、計 39 機関で「とくしま元気印イノベーション人材育成協議会」を組織して、インターンシップをはじめとする教育プログラム開発に協働して取り組むことを通して、地域の未来にビジョンを持ち、地域イノベーションに意欲と専門的知識を持って取り組む「元気印」のイノベーション人材を育成し、新たな就労先の開拓を含めた卒業生の県内就職率の向上を目指す。なお、平成 28 年度は、藤崎電機株式会社、四国化工機株式会社、有限会社樫山農園が加入し、計 39 機関となった。

機　　関　　名	備　　考
徳島大学	会長（徳島大学長）
四国大学	
四国大学短期大学部	
徳島文理大学	
徳島工業短期大学	
阿南工業高等専門学校	
徳島県	副会長（徳島県知事）
一般社団法人 徳島経済同友会	
徳島県経営者協会	
徳島県商工会議所連合会	
徳島県商工会連合会	
徳島県中小企業団体中央会	副会長（徳島県中小企業団体中央会会長）
一般財団法人 徳島県観光協会	
全国農業協同組合連合会徳島県本部	
徳島県農業協同組合中央会	
徳島県木材協同組合連合会	
公益社団法人 徳島森林づくり推進機構	
徳島県漁業協同組合連合会	
公益社団法人 徳島県畜産協会	
一般社団法人 徳島県医師会	
一般社団法人 徳島県歯科医師会	
社会福祉法人 徳島県社会福祉協議会	
一般社団法人 徳島県自動車整備振興会	
日本自動車販売協会連合会徳島県支部	
大塚テクノ 株式会社	
株式会社 丸本	
日本フネン 株式会社	
株式会社 テレコメディア	
社会福祉法人 健祥会	

社会医療法人 川島会	
有限会社 竹内園芸	
特定非営利活動法人 郷の元気	
特定非営利活動法人 マチトソラ	
特定非営利活動法人 グリーンバレー	
有限会社 樫山農園	
一般社団法人 徳島新聞社	
港産業 株式会社	
藤崎電機 株式会社	
四国化工機 株式会社	

平成28年度実施会議一覧

平成 28 年度実施会議一覧

とくしま元気印イノベーション人材育成協議会…1 回実施

平成 28 年 5 月 16 日（月）13:30～14:15
協議事項 （1） 平成 28 年度の事業協働機関について （2） 平成 28 年度の事業計画について 報告事項 （1） 平成 27 年度の事業実績について （2） 外部評価委員会委員について （3） 専任スタッフについて

COC+本部執行会議…3 回実施

平成 28 年 8 月 3 日（水）14:30～
協議事項 （1）平成 28 年度の事業計画について （2）事業協働機関の新規加入について （3）COC+推進コーディネーターの選考について 報告事項 （1）平成 28 年度予算について （2）事業の進捗について
平成 28 年 10 月 12 日（水）17:00～
協議事項 （1）COC+推進コーディネーターについて （2）共同授業の実施等について 報告事項 （1）平成 27 年度事業に関する外部評価結果について
平成 28 年 12 月 22 日（木）11:00～
協議事項 （1）COC+推進コーディネーターの採用について （2）常三島地区インターンシップ連絡協議会の設置について 報告事項 （1）「徳島の魅力、徳島で働く～企業ガイダンス偏～」の実施報告について

COC+推進機構会議…2 回実施

平成 28 年 4 月 25 日（月）15:00～16:00
協議事項 （1）専門科目における地域志向科目の指定に関する進捗状況について （2）平成 28 年度における事業スケジュールについて （3）平成 28 年度第 1 四半期 COC+事業推進スケジュールについて ① 学生を対象とする COC+事業説明会の実施について ② 中期インターンシップの試行について ③ 地域志向科目広報冊子の作成について ④ 活動先評価掲示板（web）の構築について
平成 28 年 12 月 7 日（水）16:00～
協議事項 （1）インターンシップに関する学内組織の整備について （2）「FD 地域人材育成フェスタ」の開催について （3）保護者向け就職ガイダンスの実施について 報告事項 （1）専門教育プログラムの編成状況について （2）特別セミナーの開催について （3）ニュースレターの発行配付について

プログラム教員会議…1 回実施

平成 28 年 9 月 30 日（金）10:30～11:30
(1)プログラム教員会議の趣旨説明 ① COC+事業の概要と教員会議の位置づけ ② 分野別議長の選定について (2)COC+事業の進捗状況報告 ① 事業全体について ② 教育プログラムについて ③ インターンシップについて (3)今後の予定 ① 専門教育科目への地域志向要素の取り入れと報告 ②「FD 地域人材育成フェスタ」の開催について

協働事業に関するワーキンググループ…6 回実施

平成 28 年 8 月 25 日（木）13:30
（1）「とくしま元気印イノベーション人材育成プログラム」の事業概要について （2）共同授業の実施について （3）FD 地域人材フェスタの開催について （4）他県におけるコンソーシアムに関する調査について
平成 28 年 10 月 12 日（水）10:30～12:00
（1）共同授業の実施について ① ＴＶ会議システムの使用について ② 広報の対象について ③ 講師の選出について ④ 平成 29 年度実施に向けた準備について （2）ＦＤ地域人材育成フェスタの開催について ① 開催内容について ② 広報・宣伝について （3）コンソーシアムに関する調査報告について （4）就職ガイダンスの実施について
平成 28 年 11 月 9 日（水）10:30～11:50
（1）共同授業の実施について ① 平成 28 年度の試行について ○ ＴＶ会議システムの使用について ○ 広報の対象について ○ 講師の選出について ○ 平成 29 年度実施に向けた準備について ② 平成 29 年度の実施日程について （2）ＦＤ地域人材育成フェスタの開催について ① 開催内容について ② 広報・宣伝について （3）コンソーシアムに関する調査報告について （4）就職ガイダンスの実施について
平成 28 年 12 月 7 日（水）10:30
（1）共同授業の実施について ① 平成 28 年度の試行結果について ② 平成 29 年度の実施について （2）就職ガイダンスの実施について （3）FD 地域人材育成フェスタの開催について （4）ニュースレターの発行について
平成 29 年 1 月 11 日（水）10:45
（1）保護者向け就職ガイダンスの実施報告 （2）「FD 地域人材フェスタ」の開催について （3）集中講義「徳島の魅力、徳島で働く」について （4）ニュースレター配布依頼

平成 29 年 2 月 15 日（水）11:00
（1）平成 28 年度 FD 地域人材フェスタの開催について （2）平成 29 年度協働授業の実施内容について （3）平成 29 年度事業計画の作成方針について （4）平成 28 年度就職データの共有方針について

COC+FD 委員会…1 回実施

平成 29 年 3 月 31 日(金)9:00～10:20
（1）教育プログラムの編成状況について （2）実践力養成型インターンシップの実施状況について （3）「FD 地域人材育成フェスタ」の開催について （4）来年度の事業スケジュールについて （5）教育効果検証アンケートについて （6）コンソーシアム集中講義について （7）ボランティアパスポート活動発信掲示板について

■とくしま元気印イノベーション人材育成協議会の様子
（5 月 16 日実施）

■プログラム教員会議の様子
（9 月 30 日実施）

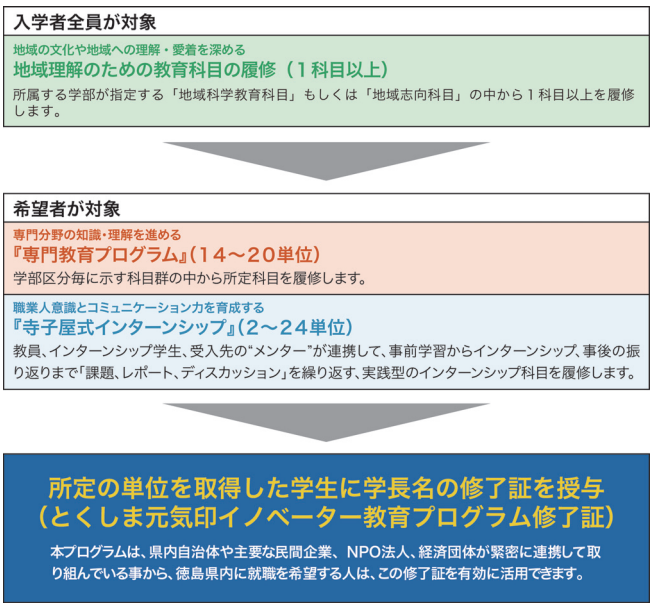
■協働事業に関するワーキンググループの様子
（8 月 25 日実施）

参加校実施事業

［徳島大学］とくしま元気印イノベーター教育プログラムの編成状況について

徳島大学では、徳島県内に就職して地域の産業振興と地域課題の解決に積極的に参画する「元気印イノベーション人材」を育成するために必要となる「4 つの能力」と「2 つの確信」を付与するための教育カリキュラムと指導方法の開発を進めている。

そのためのプログラムとして、①入学者全員が履修する「地域理解のための教育科目」、②徳島県の未来を想像する 4 分野で活躍するための「専門プログラム」、③「課題・レポート・ディスカッション」を繰り返す「寺子屋式インターンシップ」の 3 つの段階のカリキュラムを編成し、所定の単位を取得した学生に学生名の修了証を授与する「とくしま元気印イノベーター教育プログラム」を開発（右図参照）し、平成 28 年度以降の入学生が履修できる体制を整備した。



① 入学者全員が履修する「地域理解のための教育科目」

平成 28 年度から「地域の文化や地域への理解・愛着を深める」のための地域志向科目を入学者全員に履修させる体制を整えた。全学共通教育に「地域科学教育科目群」を編成した他、一般教養科目群及び専門科目の中に「地域志向科目」を設定し、学部学科に応じた履修要件を設定した。「地域科学教育科目群」については、平成 28 年度は 14 科目を開講、平成 29 年度は新たに 10 の授業題目を追加し、計 24 科目の開講を予定している。

② 徳島県の未来を想像する４分野で活躍するための 「専門プログラム」

各学部のカリキュラムの中から４分野の「当該業種に必要な専門分野の知識・理解」に関わる科目の編成を行い、その中から所定単位数を学生に選択履修させる体制を整備した。

③ 「課題・レポート・ディスカッション」を繰り返す「寺子屋式インターンシップ」

平成 28 年度に「寺子屋式インターンシップ」の試行となる「実践力養成型インターンシップ」を実施し、35 名の学生が 7 つの企業・団体にて課題解決型のインターンシップに取り組んだ。また、平成 29 年度より、新規科目「実践力養成型インターンシップⅠ」「実践力養成型インターンシップⅡ」を開講し、正課科目として受講できる体制を整えた。

また、医学部、歯学部、薬学部については、実習科目の位置付けを明確にし、「寺子屋式インターンシップ」として履修が可能な体制を整えた。

以上のプログラムについて、履修の要項を冊子形式に編集し、平成 28 年 10 月に総合科学部、理工学部、生物資源産業学部の平成 28 年度入学生に先行配布した。平成 28 年度内には全ての科目編成を終え、平成 29 年度には全学部新入生、学部 2 年生に配布を行い、履修を促進する予定である。次頁より冊子の内容を掲載する。

あっ！ここに未来があるかも？

地(知)の拠点

2017年度 とくしま元気印 イノベーター 教育プログラム 履修案内 パンフレット

発行：平成29年3月

Innovation Tokushima COC Center of Community

●プログラムに関するお問い合わせ
徳島大学COCプラス推進本部
徳島市南常三島町１丁目１番地（地域創生・国際交流会館３階）
TEL:088-656-9910　FAX：088-656-9880
mail：coc-plus@ml.tokushima-u.ac.jp

INDEX

はじめに …1
徳島の未来を創造する4つの分野 …2
プログラムの構成と修了要件 …3
育成する能力・態度・志向性 …4
教育プログラム履修マップ
■ 総合科学部 …5
■ 医学部 …7
■ 歯学部 …9
■ 薬学部 …10
■ 理工学部 …11
■ 生物資源産業学部 …13
地域科学教育科目の紹介 …14
■ 食の地域経済学／日本農業を考える …15
■ ボランティア・パスポート入門 …16
■ ボランティア活動から学ぶグローバル社会と地域社会／ボランティアリーダーと語る地域社会 …17
■ 徳島を考える …18
■ 地域の自然と食材 …19
■ 埋もれた文化遺産Ⅰ／埋もれた文化遺産Ⅱ …20
■ ボランティア実践 …21
■ 地方行政経営論 …22
■ まちづくり入門 …23
■ 地球環境と持続可能な社会 …24
■ 統計データから見る徳島県 …25
■ 平成29年度新規開講授業 …26

はじめに

人口減少社会に入った日本。大阪府ですら人口が減少する中で、首都圏だけに人口が流入する東京一極集中が生じています。しかし、これでは日本に未来はありません。それぞれの地方、徳島であれば徳島で生じている「人口減少・超高齢化社会」、「若年層人口の流出」、「厳しい財政状況」などの課題と向き合って、徳島の未来を創造する分野に取り組み、専門性に応じた地方創生の担い手となる人材を育成することが、徳島の大学に求められています。

地方は若者の力を求めています。若者のアイデア、行動力が活かせる場です。若者の力で地域が変えられる。やりがいや達成感がある。だからおもしろい。是非、みなさんに、徳島県を変えてほしい。徳島大学は、そのために必要となる能力と資質を育成する「とくしま元気印イノベーター教育プログラム」を準備しました。

本プログラムでは、徳島県の産業の特質と将来性を鑑み、徳島の未来を創造する4つの分野を設定しました。皆さんが所属する学部ごとに所定の科目履修を行うことで、それぞれの学部が対応する分野において、課題解決に積極的に参加していくための能力を身につけてもらいます。

さらに、教員が「ドン」となって少人数の学生を担当し、受け入れ先の「メンター」と連携して、事前学習から振り返りまで、「課題・レポート・ディスカッション」を繰り返す、チュートリアル方式の「寺子屋式インターンシップ」を通じて、地域社会で求められる実践的な能力を身につけてもらいます。

また、プログラムを修了した学生には学長からの修了証が授与され、地域への就職に役立てることができます。

本プログラムの履修を通じて、一人でも多くの徳島大学生が、徳島の将来に対するビジョンや、徳島で働き暮らすことのメリットに確信を持ち、将来にわたって徳島県の課題に挑み続ける「元気印イノベーション人材」として成長することを期待しています。

Innovation Tokushima COC Center of Community

徳島の未来を創造する4つの分野

卒業後に徳島県内で活躍することを希望する学生に、徳島県の未来を創造する4つの分野に合わせた教育プログラムを提供します。①次世代技術関連分野（LED・自動車・ロボット等）、②地域医療・福祉関連分野、③6次産業化関連分野、④地域づくり・観光・ICT関連分野の4つの分野において、教養教育と関連する学部における専門教育とを組み合わせ、地方創生の担い手となる人材を育成します。

分野①
次世代技術関連分野
［関連学部］理工学部

青色LEDの発明者中村修二さんは徳大工学部の卒業生です。徳島県はLEDの出荷額で全国1位、集積した世界有数のLED研究基盤があります。また、自動車関連産業やロボットテクノロジーは、徳島県のものづくり企業が有するLED、リチウムイオン電池、CFRP（炭素繊維強化プラスチック）等、多くの次世代技術の応用が期待される分野です。

分野②
地域医療・福祉関連分野
［関連学部］医学部、歯学部、薬学部

糖尿病患者は世界的に増加傾向にあり、徳島県は糖尿病死亡率が非常に高い地域です。このことから、徳島大学、徳島文理大学、大塚製薬、そして徳島県が連携・協力して糖尿病の世界レベルの研究拠点を育成する「『健幸』イノベーション構想」を推進しています。また、徳島県は高齢化率が高く、介護・福祉分野の人的・物的な投資拡大が不可欠です。

分野③
6次産業化関連分野
【関連学部】生物資源産業学部

徳島県は、生産額が全国1位のすだちをはじめとして、阿波尾鶏、カリフラワー、洋ラン、生しいたけなど、全国シェアで上位を占めるブランド農林水産物を数多く有しています。このような背景を受けて、新たな農林水産技術の開発と6次産業化を進める拠点づくりが進められており、食料・バイオ分野で次世代を担う人材に対するニーズが高まっています。

分野④
地域づくり・観光・ICT関連分野
【関連学部】総合科学部

葉っぱビジネスの上勝町、サテライトオフィスが集積する神山町、世界から観光客が訪れる祖谷渓、全国から若者が集まるマチ☆アソビなど、徳島県は全国から注目される地域づくりの事例や観光コンテンツを有しています。このような取り組みを継承・発展させて、徳島に新しい人の流れを作り出すことが徳島の未来を創造する鍵となります。

プログラムの構成と修了要件

本プログラムは、地域の文化や地域への理解・愛着を深める「地域理解のための教育科目」、地域の産業の課題解決に挑むにあたって必要となる専門分野の知識・理解を深める「専門教育プログラム科目」、職業人意識とコミュニケーション力を育成する「寺子屋式インターンシップ科目」の3つの部分で構成されます。

「地域理解のための教育科目」は入学者全員を対象とします。教養教育もしくは、所属する学部が指定する「地域科学教育科目」、もしくは「地域志向科目」の中から1科目以上を履修します。

「専門教育プログラム科目」、「寺子屋式インターンシップ科目」については、希望者が対象となります。「専門教育プログラム科目」については、それぞれの学部で対応する分野に応じた教育目標を設定し、これに沿って編成された科目群の中から所定の単位を履修します。「寺子屋式インターンシップ」については、学部の専門の学びを活用し、徳島県内の企業の課題解決プロジェクトに参画する、実践的なインターンシップ科目を履修します。

これらの教育プログラムを全て履修し、所定の単位を取得した学生には「学長名の修了書」が授与されます。修了書は地域への就職に役立てることができます。

入学者全員が対象

地域の文化や地域への理解・愛着を深める
地域理解のための教育科目の履修（1科目以上）
所属する学部が指定する「地域科学教育科目」もしくは「地域志向科目」の中から1科目以上を履修します。

希望者が対象

専門分野の知識・理解を進める
『専門教育プログラム』（14～20単位）
学部区分毎に示す科目群の中から所定科目を履修します。

職業人意識とコミュニケーション力を育成する
『寺子屋式インターンシップ』（2～24単位）
教員、インターンシップ学生、受入先の"メンター"が連携して、事前学習からインターンシップ、事後の振り返りまで「課題、レポート、ディスカッション」を繰り返す、実践型のインターンシップ科目を履修します。

所定の単位を取得した学生に学長名の修了証を授与
（とくしま元気印イノベーター教育プログラム修了証）
本プログラムは、県内自治体や主要な民間企業、NPO法人、経済団体が緊密に連携して取り組んでいる事から、徳島県内に就職を希望する人は、この修了証を有効に活用できます。

育成する能力・態度・志向性

本プログラムを受講することで、徳島の課題を解決するために必要な4つの能力と2つの確信を身につけ、徳島の各地で地域イノベーションに意欲を持って参加し、活躍していく人材として育つことが期待されます。

4つの能力

1. 地域文化や地域への理解・愛着
徳島の過去から現在に至る歴史・文化や県民の営みに対する正しい知識を身につけた上で、徳島を愛し、徳島の地でその将来の発展に貢献しようとする強い意欲を持つこと

2. 専門分野の知識・理解
徳島の発展のために、自らが貢献しようとする各分野において、高度な専門知識や技術を修得した上で、職業人として活用し、改善さらにはイノベーションできる能力を持つこと

3. 職業人意識とコミュニケーション力
プロフェッショナルとして、自らの職業やその専門分野に自覚と誇りを持ち、職場はもとより異業種の人々や他者との間で、十分なコミュニケーションができること

4. 課題に挑戦する元気・覇気
困難な課題や大きな壁に直面しても、それを乗り越え、克服しようとするチャレンジ精神と粘り強さを身につけること

2つの確信

1. 地域の将来に対するビジョン
将来にわたる地域の潜在的可能性・将来像への確信を抱けるようになること

2. 地域で暮らすことのメリット
ライフワークバランスを踏まえた人生設計への確信を抱けるようになること

教育プログラム履修マップ

地域づくり・観光・ICT関連分野

総合科学部

【教育上の目標】

人口減少や高齢化が進み、グローバル競争で経済格差が拡大するなか、活力ある地域づくりに求められるのが、ソーシャル・イノベーションです。イノベーションは発明や技術開発に限ったものではありません。ソーシャル・イノベーションは私たちの社会の仕組みを見直し、柔軟な発想で新たな価値を生み出そうとする変革です。徳島県には、「葉っぱビジネス」で高齢者が生き生きと働く上勝町や、IT系ベンチャー企業のサテライトオフィスが次々と進出する神山町、「秘境」と呼ばれた山間地で外国人ツーリストが増加している三好市など、地域活性化の成功例として全国から注目される取組がいくつも存在します。

経済・社会・政治などあらゆる面で、私たちのくらしの基盤はつねに地域にあることを考えてみて下さい。仕事を見つけて働くことはもちろん、日々の買い物をするにせよ、教育や医療のサービスを受けるにせよ、さまざまなコミュニティ活動に参加するにせよ、生活の場としての地域がしっかりと持続可能でなければ、私たちは充実した人生を送ることができません。同時に、私たち一人一人がその地域を支えるメンバーでもあるのです。世の中の変化が激しい今日、かつて信じられた「安定した就職先」を探すだけでは不十分です。自ら努力して新しい価値を発見し、みんなで協力して課題に挑戦する態度が求められます。

地域の課題解決にはどのようなアプローチが有効でしょうか。優れたアイデアやプランは、単に白紙からの思いつきで生まれるものではありません。病気の診断と同様に、まず、問題の背景にある諸要因をきちんと把握し、その関連や構造を理解することが必要です。次に、市民や企業や行政などが連携して目指すべきビジョンについて検討することが大切です。その上で、新しいビジネスモデルや政策を提案し実行していくことが重要になります。そうしたプロセスにおいてリーダーとして活躍できる人材が「イノベーター」です。

総合科学部の専門教育プログラムでは、地域に根ざしたソーシャル・イノベーションを構想できる見識と、それを実現するスキルを持ったジェネラリストを育てます。国際教養コースの科目からは地域の文化や国際比較の視点を、心身健康コースの科目からは健康な地域づくりに向けた手法を、公共政策コースの科目からは地域の経済や行政の仕組みを、地域創生コースの科目からは地域の実態を分析する調査法を学びます。さらに、インターンシップを通じて地域社会で求められる実践的な能力を身につけることができます。

地域理解のための教育科目（教養教育科目・専門科目／2単位以上を取得）

以下の①、②のいずれかから2単位以上を取得してください。
①地域科学教育科目
②下記地域志向科目に指定されている授業題目

★地域科学教育科目（→14ページを参照）

★地域志向科目

【前期】	● 気象災害を防ぐ	[2単位／一般教養教育科目《自然と技術》]
	● 災害を知る	[2単位／一般教養教育科目《自然と技術》]
	● グローバル社会に必要な地域医療とは	[2単位／グローバル化教育科目]
	● スチューデント・アンバサダー（※平成29年度は開講せず）	[2単位／イノベーション教育科目]
【後期】	● 空海と歩く～歩き遍路の世界～	[2単位／一般教養教育科目《歴史と文化》]
	● 地域コンテンツと知財管理その1（eラーニング科目）	[1単位／一般教養教育科目《生活と社会》]
	● 地域コンテンツと知財管理その2（eラーニング科目）	[1単位／一般教養教育科目《生活と社会》]
	● 地震・火山災害を防ぐ	[2単位／一般教養教育科目《自然と技術》]
	● （徳）地域の環境と防災（※平成29年度は開講せず）	[2単位／一般教養教育科目《自然と技術》]
	● 災害に備える	[2単位／一般教養教育科目《自然と技術》]
	● グローバル化時代の地域医療を考える	[2単位／グローバル化教育科目]
	● 国際協力論-この貧困と紛争の尽きない世界で	[2単位／グローバル化教育科目]
	● Global Communication -Peer learning on cluture of Tokushima-	[2単位／グローバル化教育科目]
	● 「モラエスの鶴鳥」～グローバリズムと異邦人～（eラーニング科目）	[2単位／グローバル化教育科目]

専門教育プログラム（専門科目／16単位以上を取得）

※所属コースの科目と他コースの科目を合わせて16単位以上を取得してください。

国際教養コース

【2年次後期】	● キャリアプラン［2単位］	
【2年次以降前期】	● 日本史研究Ⅰ［2単位］	
【2年次以降後期】	● 現代アジア社会Ⅰ［2単位］ ● 応用日本語学概説［2単位］ ● 地理学の基礎Ⅰ［2単位］	● 方言と社会［2単位］ ● 比較文化研究［2単位］

心身健康コース

【2年次後期】	● キャリアプラン［2単位］	
【2年次以降前期】	● スポーツ経営学［2単位］	● 臨床心理学［2単位］
【2年次以降後期】	● スポーツ社会学［2単位］	
【3年次以降通年】	● ウェルネス・プロジェクト実習［2単位］（集中講義）	
【3年次以降前期】	● コミュニティ心理学［2単位］ ● 健康心理学［2単位］	● 福祉心理学［2単位］
【3年次以降後期】	● 地域スポーツ文化論［2単位］	● スポーツマーケティング論［2単位］

公共政策コース

【2年次後期】	● キャリアプラン［2単位］	
【2年次以降前期】	● 経営学Ⅰ［2単位］ ● 財政学Ⅰ［2単位］ ● まちづくり地域社会論［2単位］	● 地域政策論Ⅰ［2単位］ ● 地理学の基礎Ⅱ［2単位］ ● 地域経済論［2単位］
【2年次以降後期】	● 公共政策学［2単位］	● 地理学の基礎Ⅰ［2単位］

地域創生コース

【2年次後期】	● キャリアプラン［2単位］	
【2年次以降前期】	● まちづくり地域社会論［2単位］ ● 地域政策論Ⅰ［2単位］ ● 地域計画Ⅰ［2単位］ ● 地理学の基礎Ⅱ［2単位］ ● 考古学調査法［2単位］	● 日本史研究Ⅰ［2単位］ ● 空間情報論Ⅰ［2単位］ ● 地域調査法A［2単位］ ● 地域調査演習A［2単位］ ● 環境アート［2単位］
【2年次以降後期】	● 地域政策論Ⅱ［2単位］ ● 地域計画Ⅱ［2単位］ ● 地理学の基礎Ⅰ［2単位］ ● 地域構造論［2単位］ ● 地域変容論［2単位］ ● 地域情報論Ⅱ［2単位］	● 地域文化論Ⅰ［2単位］ ● 地域文化論Ⅱ［2単位］ ● 考古学調査演習［2単位］（集中講義） ● 方言と社会［2単位］ ● 地域調査法B［2単位］ ● 地域調査演習B［2単位］

寺子屋式インターンシップ（教養教育科目・専門科目／2単位以上を取得）

★地域科学教育科目

【前期】	● 実践力養成型インターンシップⅠ［1単位］	※実践力養成型インターンシップⅠ,Ⅱを寺子屋式インターンシップとして履修する場合、同科目の単位を地域理解のための科目としてカウントできません。
【後期】	● 実践力養成型インターンシップⅡ［1単位］	

★専門科目

【3年次前期】	● 短期インターンシップ［2単位］ ※寺子屋式インターンシップとして「短期インターンシップ」の履修を希望する学生は、開講の中で実施されるガイダンスに沿って必要な履修手続きを行ってください。単に同授業の単位を取得するだけでは、寺子屋式インターンシップとは見なされません。	

教育プログラム履修マップ

地域医療・福祉関連分野

医学部

【教育上の目標】

（医学科）

徳島県内の地域の課題の中で、特に医療・福祉・介護等の地域医療の課題に焦点をあてた学びを含む科目で構成されており、履修によって以下の3つの能力を身につけることを目標とします。

①社会・地域における医療の問題を理解し、保健・医療・福祉・介護および行政等と連携協力して、情報を発信するとともに、その解決に積極的に参加することができる。

②疾病予防と健康増進について理解・実践ができる。

③災害時における医師の役割を理解し、実践する準備ができる。

（医科栄養学科）

徳島県は他の県に比べ肥満の者の割合が高く、糖尿病による死亡率は毎年上位に位置しています。様々な基礎疾患となる肥満に関わるのは主として栄養と運動であるため、本専門プログラムでは、食環境と集団の健康問題との関連について理解を深めると共に食の提供により健康を保持増進する能力を身につけます。

本プログラムを履修することにより、地域の栄養状態のアセスメント、栄養改善計画立案、様々な社会資源を活用した効果的な栄養改善プログラムを実施できる技能を修得する。また、食の専門家として疾病予防の一次予防を目指した食事管理から病者の回復を目的とした食事療法を修得します。

（保健学科）

教養教育において、地域に関する基礎的知識の理解を深めます。専門教育では、まず、健康問題の変遷や健康課題を理解し、地域で生活する人々の健康を支援するために病院・行政・学校・産業・在宅でどのような支援活動が行われているのかを学びます。さらに、保健学科共通科目と臨地・臨床実習科目の履修を通して、地域の保健・医療を担う専門職として必要な知識・スキルと問題解決力を身につけることができます。

地域理解のための教育科目（学科毎に所定の科目の単位を取得）

【医学科】医療基盤教育科目「医と法・倫理」の2単位を取得してください。
【医科栄養学科・保健学科】以下の①、②の科目のいずれかから2単位以上を取得してください。
①地域科学教育科目
②下記地域志向科目に指定されている授業題目

★医療基盤教育科目

【1年次前期】
- 医と法・倫理［2単位］

★地域科学教育科目（→14ページを参照）

★地域志向科目

【前期】	気象災害を防ぐ	［2単位／一般教養教育科目《自然と技術》］
	災害を知る	［2単位／一般教養教育科目《自然と技術》］
	グローバル社会に必要な地域医療とは	［2単位／グローバル化教育科目］
	スチューデント・アンバサダー（※平成29年度は開講せず）	［2単位／イノベーション教育科目］
【後期】	空海と歩く～歩き遍路の世界～	［2単位／一般教養教育科目《歴史と文化》］
	地域コンテンツと知財管理その1（eラーニング科目）	［1単位／一般教養教育科目《生活と社会》］
	地域コンテンツと知財管理その2（eラーニング科目）	［1単位／一般教養教育科目《生活と社会》］
	地震・火山災害を防ぐ	［2単位／一般教養教育科目《自然と技術》］
	（理）地域の環境と防災（※平成29年度は開講せず）	［2単位／一般教養教育科目《自然と技術》］
	災害に備える	［2単位／一般教養教育科目《自然と技術》］
	グローバル化時代の地域医療を考える	［2単位／グローバル化教育科目］
	国際協力論-この貧困と紛争の尽きない世界で	［2単位／グローバル化教育科目］
	Global Communication -Peer learning on cluture of Tokushima-	［2単位／グローバル化教育科目］
	「モラエスの徳島」～グローバリズムと異邦人～（eラーニング科目）	［2単位／グローバル化教育科目］

専門教育プログラム（学科毎に所定の科目の単位を取得）

医学科（専門科目／16単位以上を取得）

【3年次通年】
- 予防医学［2単位］
- 公衆衛生学［2単位］
- 医学研究実習［6単位］（法医学分野、公衆衛生学分野、予防医学分野、総合診療医学分野のいずれかを選択すること）

【3年次通年】
- 法医学［2単位］

医科栄養学科（専門科目／下記必修科目の単位を取得（9科目17単位））

【2年次通年】
- 公衆衛生学［4単位］

【2年次後期】
- 公衆栄養学［2単位］
- 給食栄養管理論［2単位］

【3年次前期】
- 給食栄養管理論実習［1単位］
- 地域公衆栄養学［2単位］
- 保健医療福祉学［2単位］

【3年次後期】
- 給食運営管理論［2単位］
- 公衆栄養学実習［1単位］
- 給食運営管理論実習［1単位］

保健学科（専門科目／専攻毎に所定の科目の単位を取得）

看護学専攻	表の対象科目より19単位以上を取得
放射線技術科学専攻	表の対象科目より14単位以上を取得
検査技術科学専攻	表の対象科目より19単位以上を取得

	看護学専攻	放射線技術科学専攻	検査技術科学専攻
● 人間関係論［1単位］	1年次前期	2年次前期	2年次前期
● 生化学Ⅰ［1単位］	1年次前期	2年次前期	1年次前期
● カウンセリング［1単位］	2年次前期	2年次前期	2年次前期
● 解剖生理学Ⅰ［1単位］	1年次前期	1年次前期	1年次前期
● 解剖生理学Ⅱ［1単位］	1年次前期	1年次前期	1年次前期
● 解剖生理学Ⅲ［1単位］	1年次後期	1年次後期	1年次後期
● 解剖生理学Ⅳ［1単位］	1年次後期	1年次後期	1年次後期
● 衛生学［1単位］	1年次後期	1年次後期	1年次後期
● 保健学概論［1単位］	1年次前期	1年次前期	1年次前期
● 医療経済論［1単位］	2年次前期	2年次前期	2年次前期
● 社会福祉概論［1単位］	3年次前期	3年次前期	3年次前期
● 放射線衛生学［1単位］	3年次前期	3年次前期	2年次前期
● 医療安全管理学［1単位］	3年次前期	3年次前期	2年次前期

	看護学専攻	放射線技術科学専攻	検査技術科学専攻
● 介護実習［1単位］	1年次前期	2年次前期	2年次前期
● チーム医療論［1単位］	1年次通年	1年次通年	1年次通年
● 教育指導論［1単位］	3年次前期	4年次前期	3年次前期
● 薬理学［1単位］	2年次前期	3年次前期	3年次前期
● 栄養学［1単位］	2年次前期	3年次後期	2年次後期
● 精神保健［1単位］	2年次後期	3年次後期	2年次後期
● 免疫学Ⅰ［1単位］	2年次前期	3年次前期	2年次前期
● 病理学Ⅰ［1単位］	1年次前期	3年次前期	2年次前期
● 医学統計学［1単位］	2年次前期	2年次前期	2年次前期
● 医学統計学演習［1単位］	2年次後期	2年次後期	2年次後期
● 在宅看護学概論［2単位］	2年次後期	-	-
● 地域看護学概論［1単位］	2年次後期	-	-
● 保健科学［1単位］	-	2年次前期	-
● 臨床技能実習［1単位］	-	3年次後期	3年次後期
● 環境衛生学［1単位］	-	-	2年次前期
● 保健学［1単位］	-	-	2年次後期
● 保健環境学実習［1単位］	-	-	2年次前期
● 臨床検査総論Ⅰ［1単位］	-	-	2年次前期
● 臨床検査総論Ⅱ［1単位］	-	-	3年次前期

寺子屋式インターンシップ（学科毎に所定の科目の単位を取得）

医学科（専門科目／下記必修科目の単位を取得（2科目2単位））

【専門科目／3年次後期】
- 社会医学実習［1単位］

【専門科目／4～5年次通年】
- 診療参加型臨床実習（地域医療学）［1単位］

医科栄養学科（専門科目／下記科目の単位を取得（2科目2単位））

【専門科目／4年次】
- （臨地実習）公衆栄養学実習（保健所等）［1単位］
- （臨地実習）給食経営管理論実習（学校）［1単位］

保健学科（専門科目／専攻毎に指定する必修科目の単位を取得）

寺子屋式インターンシップに該当する科目は、専攻によって異なります。下記の表に従って、所定の科目を履修してください。

看護学専攻（1科目2単位）	放射線技術科学専攻（3科目9単位）	検査技術科学専攻（3科目8単位）
【3年次後期】 ● 在宅看護学実習［2単位］	【4年次通年】 ● 診療画像学臨床実習［5単位］ ● 核医学技術学臨床実習［2単位］ ● 放射線治療技術学臨床実習［2単位］	【2年・4年次前期】 ● 臨床検査節論実習［2単位］ 【3年次後期～4年次前期】 ● 生理検査学実習［2単位］ ● 微生物学実習［4単位］

教育プログラム履修マップ

地域医療・福祉関連分野

歯学部

【教育上の目標】

歯学部では、口腔保健学科学生が本教育プログラムの対象となります。教養教育において地域の理解を育む教養教育科目を履修した上で、専門科目において社会福祉関連科目を履修します。これらの授業から、人々が幸せな生活を送ることを目指せるよう、徳島地域の現状に応じた社会福祉に貢献できる知識を修得します。

さらに、インターンシップに相当する授業として口腔保健衛生学臨地実習を履修します。在宅診療を含めた歯科診療所、学校現場や保健所、障害者福祉施設、要介護高齢者や有病者が入所する施設等、徳島県内の保健・医療・福祉関連施設の協力を得て実施する実習で、これまで学んだ知識や技能に加えて、判断能力、思考力、問題解決能力などの実践力を培うことにより、徳島地域での口腔保健・福祉分野で貢献する人材を育成します。

歯学科学生においても、地域理解のための共通教育科目の履修を推奨し、将来、地域貢献できる医療人の育成を目指します。

地域理解のための教育科目（教養教育科目・専門科目／2単位以上を取得）

【歯学科】下記地域志向科目に指定されている授業題目から2単位以上を取得してください。
【口腔保健学科】以下の①、②の科目のいずれかから2単位以上を取得してください。
①下記地域志向科目に指定されている授業題目
②専門科目「現代社会と福祉」

★地域志向科目

【前期】	気象災害を防ぐ	［2単位／一般教養教育科目《自然と技術》］
	災害を知る	［2単位／一般教養教育科目《自然と技術》］
	グローバル社会に必要な地域医療とは	［2単位／グローバル化教育科目］
	スチューデント・アンバサダー（※平成29年度は開講せず）	［2単位／イノベーション教育科目］
【後期】	空海と歩く～歩き遍路の世界～	［2単位／一般教養教育科目《歴史と文化》］
	地域コンテンツと知財管理その1（eラーニング科目）	［1単位／一般教養教育科目《生活と社会》］
	地域コンテンツと知財管理その2（eラーニング科目）	［1単位／一般教養教育科目《生活と社会》］
	地震・火山災害を防ぐ	［2単位／一般教養教育科目《自然と技術》］
	（理）地域の環境と防災（※平成29年度は開講せず）	［2単位／一般教養教育科目《自然と技術》］
	災害に備える	［2単位／一般教養教育科目《自然と技術》］
	グローバル化時代の地域医療を考える	［2単位／グローバル化教育科目］
	国際協力論-この貧困と紛争の尽きない世界で	［2単位／グローバル化教育科目］
	Global Communication -Peer learning on cluture of Tokushima-	［2単位／グローバル化教育科目］
	「モラエスの徳島」～グローバリズムと異邦人～（eラーニング科目）	［2単位／グローバル化教育科目］

★専門科目（口腔保健学科）

【1年次後期】
- 現代社会と福祉［2単位］

専門教育プログラム　※歯学科学生の履修は不要です。

口腔保健学科（専門科目／14単位を取得）

【1年次後期】
- 相談援助の基盤と専門職［2単位］

【2年次前期】
- 地域福祉の理論と方法［2単位］

【2年次後期】
- 福祉行財政と福祉計画［1単位］

【3年次前期】
- 社会保障［1単位］
- 高齢者福祉［1単位］
- 障害者福祉［2単位］
- 児童・家庭福祉［2単位］
- 公的扶助［1単位］
- 保健医療サービス［1単位］
- 福祉サービスの組織と経営［1単位］

寺子屋式インターンシップ　※歯学科学生の履修は不要です。

口腔保健学科（専門科目／下記必修科目の単位を取得（1科目4単位））

【3年次後期～4年次前期】
- 口腔保健衛生学臨地実習［4単位］

教育プログラム履修マップ

地域医療・福祉関連分野

薬学部

【教育上の目標】

教養教育科目及び指定した専門科目において、地域医療についての理解を修得します。ついで、地域医療において課題を解決できる知識・技能を習得するために順次専門科目を履修します。創薬研究や臨床薬学研究を活性化できる高度な専門知識を習得し、県内の薬関連産業や医療に貢献する人材を育成します。

地域理解のための教育科目（教養教育科目・専門科目／1単位以上を取得）

以下の①、②、③のいずれかから1単位以上を取得してください。
①地域科学教育科目
②下記地域志向科目に指定されている授業題目
③専門科目「薬学体験実習」

★地域科学教育科目（→14ページを参照）

★地域志向科目

【前期】	気象災害を防ぐ	［2単位／一般教養教育科目《自然と技術》］
	災害を知る	［2単位／一般教養教育科目《自然と技術》］
	グローバル社会に必要な地域医療とは	［2単位／グローバル化教育科目］
	スチューデント・アンバサダー（※平成29年度は開講せず）	［2単位／イノベーション教育科目］
【後期】	空海と歩く～歩き遍路の世界～	［2単位／一般教養教育科目《歴史と文化》］
	地域コンテンツと知財管理その1（eラーニング科目）	［1単位／一般教養教育科目《生活と社会》］
	地域コンテンツと知財管理その2（eラーニング科目）	［1単位／一般教養教育科目《生活と社会》］
	地震・火山災害を防ぐ	［2単位／一般教養教育科目《自然と技術》］
	（理）地域の環境と防災（※平成29年度は開講せず）	［2単位／一般教養教育科目《自然と技術》］
	災害に備える	［2単位／一般教養教育科目《自然と技術》］
	グローバル化時代の地域医療を考える	［2単位／グローバル化教育科目］
	国際協力論-この貧困と紛争の尽きない世界で	［2単位／グローバル化教育科目］
	Global Communication -Peer learning on cluture of Tokushima-	［2単位／グローバル化教育科目］
	「モラエスの徳島」～グローバリズムと異邦人～（eラーニング科目）	［2単位／グローバル化教育科目］

★専門科目

【1年次通年】
- 薬学体験実習［1単位］

専門教育プログラム（専門科目／下記必修科目の単位を取得（20科目20単位））

【1年次後期】
- 物理化学1［1単位］
- 基礎有機化学2［1単位］
- 生命薬学2［1単位］
- 基礎分析化学［1単位］
- 基礎有機化学3［1単位］

【2年次前期】
- 物理化学2［1単位］
- 製剤学1［1単位］
- 生物化学3［1単位］
- 薬理学［1単位］
- 分析化学1［1単位］
- 応用有機化学1［1単位］
- 衛生薬学1［1単位］

【2年次後期】
- 応用有機化学2［1単位］
- 衛生薬学2［1単位］
- 薬学英語1［1単位］
- 生命薬学3［1単位］
- 薬剤学1［1単位］

【3年次前期】
- 分析化学2［1単位］
- 薬剤学2［1単位］
- 先端無機化学［1単位］

寺子屋式インターンシップ（学科毎に所定の科目の単位を取得）

薬学科（専門科目／下記必修科目の単位を取得（3科目24単位））

【4年次通年】
- 実務実習事前学習［4単位］

【5～6年次通年】
- 医療薬学・病院実務実習［10単位］
- 医療薬学・薬局実務実習［10単位］

創製薬科学科（教養科目／2単位を取得）

【前期】
- 実践力養成型インターンシップⅠ［1単位］

【後期】
- 実践力養成型インターンシップⅡ［1単位］

※実践力養成型インターンシップⅠ、Ⅱを寺子屋式インターンシップとして履修する場合、同科目の単位を地域理解のための科目としてカウントできません。

教育プログラム履修マップ

理工学部

次世代技術分野

【教育上の目標】

教養教育において地域の自然や文化、歴史の理解に関する科目を履修した上で、各専門分野から徳島県内の地域に根ざした理工学系課題への応用に役立つ科目を履修します。たとえば，都市交通や建築計画、メカトロニクスや自動制御、材料科学や工業化学，光デバイスや電子回路設計、情報計測や光情報機器、熱統計力学や最適化論など、県内企業が得意とする技術の発展に貢献できる人材に求められる能力を身につけます。

地域理解のための教育科目（教養教育科目・専門科目／2単位以上を取得）

以下の①、②のいずれかから2単位以上を取得してください。
①地域科学教育科目
②下記地域志向科目に指定されている授業題目
※夜間主コースの学生については、グローバル化教育科目、イノベーション教育科目は卒業要件単位ではありませんのでご注意ください。

★地域科学教育科目（→14ページを参照）※夜間主コースの学生は受講できる科目が限られますのでご注意ください。

★地域志向科目

【前期】	● 気象災害を防ぐ	［2単位／一般教養教育科目《自然と技術》］
	● 災害を知る	［2単位／一般教養教育科目《自然と技術》］
	● グローバル社会に必要な地域医療とは	［2単位／グローバル化教育科目］
	● スチューデント・アンバサダー（※平成29年度は開講せず）	［2単位／イノベーション教育科目］
【後期】	● 空海と歩く〜歩き遍路の世界〜	［2単位／一般教養教育科目《歴史と文化》］
	● 地域コンテンツと知財管理その1（eラーニング科目）	［1単位／一般教養教育科目《生活と社会》］
	● 地域コンテンツと知財管理その2（eラーニング科目）	［1単位／一般教養教育科目《生活と社会》］
	● 地震・火山災害を防ぐ	［2単位／一般教養教育科目《自然と技術》］
	● （理）地域の環境と防災（※平成29年度は開講せず）	［2単位／一般教養教育科目《自然と技術》］
	● 災害に備える	［2単位／一般教養教育科目《自然と技術》］
	● グローバル化時代の地域医療を考える	［2単位／グローバル化教育科目］
	● 国際協力論-この貧困と紛争の尽きない世界で	［2単位／グローバル化教育科目］
	● Global Communication -Peer learning on cluture of Tokushima-	［2単位／グローバル化教育科目］
	● 「モリエスの猿島」〜グローバリズムと異邦人〜（eラーニング科目）	［2単位／グローバル化教育科目］

専門教育プログラム（専門科目／16単位以上を取得）

履修についての考え方

専門教育プログラムには、コース共通科目の地域志向科目と、コース別専門科目の地域志向科目で構成されています。コース共通科目と、所属するコースで設定された科目を履修することを推奨しますが，不足している場合は選択科目として他コースで設定された地域志向科目を履修することができます。合計で16単位以上になるように単位を取得してください。

履修推奨科目

コース共通科目（STEM概論／プロジェクトマネジメント基礎／アイデア・デザイン創造／ニュービジネス概論）＋ 所属コースで設定された地域志向科目 ＋ 他コースで設定された地域志向科目

全体の中から16単位を選択履修

コース共通科目

【1年次前期】	● STEM概論［2単位］	
【2年次前期】	● プロジェクトマネジメント基礎［2単位］	● アイデア・デザイン創造［2単位］
【2年次後期】	● ニュービジネス概論［2単位］	

コース別専門科目

社会基盤デザインコース

【1年次前期】	● 社会基盤デザイン概論［2単位］		
【3年次前期】	● 都市・交通計画［2単位］		
【3年次後期】	● 合意形成技法［2単位］	● 建築構造計画［2単位］	

機械科学コース

【1年次後期】	● 材料力学1［2単位］		
【2年次前期】	● メカトロニクス工学［2単位］		
【2年次後期】	● 自動制御1［2単位］		
【3年次前期】	● 自動制御2［2単位］		
【3年次後期】	● デジタルエンジニアリング［2単位］		

応用化学システムコース

【1年次前期】	● 基礎分析化学［2単位］		
【2年次後期】	● 材料科学［2単位］		
【3年次後期】	● 材料物性［2単位］	● 電気化学［2単位］	● 工業化学［2単位］

電気電子システムコース

【1年次前期】	● 電気エンジニアリング入門［2単位］		
【3年次後期】	● 光デバイス工学［2単位］ ● 電子回路設計［1単位］	● 照明電熱工学［2単位］	● マイコンシステム設計［1単位］
【4年次前期】	● 機器応用工学［2単位］		

情報光システムコース

【1年次前期】	● コンピューターリテラシー［1単位］		
【1年次後期】	● プログラミング入門及び演習［1単位］		
【2年次後期】	● 情報計測工学［2単位］		
【3年次後期】	● 光デバイス［2単位］	● 光情報機器［2単位］	

応用理数コース自然科学系

【1年次前期】	● 計算機概論［2単位］		
【3年次前期】	● 量子力学1［2単位］	● 物性科学1［2単位］	● 熱統計力学［2単位］
【3年次後期】	● 物性科学2［2単位］		

応用理数コース数理科学系

【1年次後期】	● 計算機概論［2単位］		
【3年次後期】	● 最適化論［2単位］		

寺子屋式インターンシップ（教養教育科目・専門科目／2単位以上を取得）

★地域科学教育科目

【前期】	● 実践力養成型インターンシップⅠ［1単位］	※実践力養成型インターンシップⅠ，Ⅱを寺子屋式インターンシップとして履修する場合、同科目の単位を地域理解のための科目としてカウントできません。
【後期】	● 実践力養成型インターンシップⅡ［1単位］	

★専門科目

【3年次前期】	● 短期インターンシップ［2単位］ ※寺子屋式インターンシップとして「短期インターンシップ」の履修を希望する学生は、講義の中で実施されるガイダンスに沿って必要な履修手続きを行ってください。単に同授業の単位を取得するだけでは、寺子屋式インターンシップとは見なされません。	

教育プログラム履修マップ

生物資源産業学部

6次産業化関連分野

【教育上の目標】

教養教育において地域の自然や文化、歴史の理解を修得した上で、地域の生物資源の製品化、産業化にかかわる専門科目を順次、履修することで、県内の農林水産業のイノベーションへの関心を高め、そのための知識とスキルが習得できます。さらに、実践的なインターンシップを通じて地域の企業等が直面している課題を身を以て体験することで、県内に就職してからも問題解決に積極的に参画できる人材に成長してもらいます。

地域理解のための教育科目（教養教育科目・専門科目／2単位以上を取得）

以下の①、②のいずれかから2単位以上を取得してください。
①地域科学教育科目
②下記地域志向科目に指定されている授業題目

★地域科学教育科目（→14ページを参照）

★地域志向科目

【前期】	● 気象災害を防ぐ	［2単位／一般教養教育科目《自然と技術》］
	● 災害を知る	［2単位／一般教養教育科目《自然と技術》］
	● グローバル社会に必要な地域医療とは	［2単位／グローバル化教育科目］
	● スチューデント・アンバサダー（※平成29年度は開講せず）	［2単位／イノベーション教育科目］
【後期】	● 空海と歩く〜歩き遍路の世界〜	［2単位／一般教養教育科目《歴史と文化》］
	● 地域コンテンツと知財管理その1（eラーニング科目）	［1単位／一般教養教育科目《生活と社会》］
	● 地域コンテンツと知財管理その2（eラーニング科目）	［1単位／一般教養教育科目《生活と社会》］
	● 地震・火山災害を防ぐ	［2単位／一般教養教育科目《自然と技術》］
	● （理）地域の環境と防災（※平成29年度は開講せず）	［2単位／一般教養教育科目《自然と技術》］
	● 災害に備える	［2単位／一般教養教育科目《自然と技術》］
	● グローバル化時代の地域医療を考える	［2単位／グローバル化教育科目］
	● 国際協力論-この貧困と紛争の尽きない世界で	［2単位／グローバル化教育科目］
	● Global Communication -Peer learning on cluture of Tokushima-	［2単位／グローバル化教育科目］
	● 「モリエスの猿島」〜グローバリズムと異邦人〜（eラーニング科目）	［2単位／グローバル化教育科目］

専門教育プログラム（専門科目／下記必修科目の単位を取得（10科目17単位））

【1年次前期】	● 経済学基礎［2単位］	● 生物生産フィールド実習［1単位］
【1年次後期】	● 経営学入門［2単位］	● 起業体験実習［1単位］
【2年次後期】	● 地域資源経済学［2単位］ ● フードシステム論［2単位］	● 生物資源産業学実習［2単位］
【3年次後期】	● アグリビジネス起業論［2単位］ ● 食品マーケティング論［2単位］	● 商品開発プロジェクト演習［1単位］

寺子屋式インターンシップ（教養教育科目・専門科目／2単位以上を取得）

★地域科学教育科目

【前期】	● 実践力養成型インターンシップⅠ［1単位］	※実践力養成型インターンシップⅠ，Ⅱを寺子屋式インターンシップとして履修する場合、同科目の単位を地域理解のための科目としてカウントできません。
【後期】	● 実践力養成型インターンシップⅡ［1単位］	

★専門科目

【3年次前期】	● インターンシップ［2単位］ ※寺子屋式インターンシップとして「短期インターンシップ」の履修を希望する学生は、講義の中で実施されるガイダンスに沿って必要な履修手続きを行ってください。単に同授業の単位を取得するだけでは、寺子屋式インターンシップとは見なされません。	

地域科学教育科目の紹介

地域科学教育科目は、徳島県の地域問題を自らの課題として受け止められる公共の精神と、地域における組織人として必要な資質を得ることを目指して、地域創生、地域貢献の意義などの体験的学習も含めて学ぶ科目です。平成28年度に編成された14授業題目に加え、平成29年度からはさらに10授業題目が新規開講します。

次のページから、平成28年度に編成されたそれぞれの授業題目について詳しく紹介します。「とくしまのどのような課題が学べるの？」「学びのためにどのような工夫がされているの？」という二つの観点から、担当する先生にインタビューを行いました。

地域科学教育科目を受講することで、徳島県の様々な課題と、課題解決に向けたアプローチを学ぶことができます。これからの学生生活で地域の課題に取り組む入り口となる科目です。紹介記事を参考に、自分の関心とつながる学びを探してみましょう。

15P ●【前期】食の地域経済学［2単位］
●【後期】日本農業を考える［2単位］
16P ●【前期】ボランティア・パスポート入門［2単位］
17P ●【前期】ボランティア活動から学ぶグローバル社会と地域社会［2単位］
●【後期】ボランティアリーダーと語る地域社会［2単位］
18P ●【前期】徳島を考える［2単位］
19P ●【前期】地域の自然と食材［2単位］
20P ●【前期】埋もれた文化遺産Ⅰ［2単位］
●【後期】埋もれた文化遺産Ⅱ［2単位］
21P ●【後期】ボランティア実践［2単位］
22P ●【後期】地方行政経営論［2単位］
23P ●【後期】まちづくり入門［2単位］
24P ●【後期】地球環境と持続可能な社会［2単位］
25P ●【後期】統計データから見る徳島県［2単位］
26P 平成29年度新規開講授業題目
●【前期】徳島の魅力・徳島で働く（集中講義）［2単位］
●【前期】とくしまの環境を学ぼう［2単位］
●【後期】実践・地域創生学［2単位］
●【後期】歴史から学ぶ地域〜経済・社会〜［2単位］
●【前期】実践力養成型インターンシップⅠ［1単位］
●【後期】実践力養成型インターンシップⅡ［1単位］
●【前期】瀬戸内海論 その1［1単位］（eラーニング科目）
●【前期】瀬戸内海論 その2［1単位］（eラーニング科目）
●【後期】瀬戸内地域活性化政策 その1［1単位］（eラーニング科目）
●【後期】瀬戸内地域活性化政策 その2［1単位］（eラーニング科目）

地域科学教育科目の紹介

【前期】食の地域経済学
【後期】日本農業を考える

担当：玉 真之介

とくしまのどのような課題が学べるの？

急傾斜地の面積が広いのが徳島県の地形的な特徴で、特に三好市を含む徳島剣山系の西阿波地域は、斜度の高い傾斜地を広く有する国内有数の中山間地域です。まとまった平坦な耕地が少なく、高齢化が進み、後継者不足や耕作放棄地の問題が生じており、農業の持続が大きな課題になっています。

講義の前半では、食や農業に関する社会問題を学びます。講義で食の課題と農業の課題の関係を理解した後、後半は実際の農業の課題解決に取り組む地域でフィールドワークを行い、課題解決に向けた実際の取り組みの様子を学びます。

学びのためにどのような工夫がされているの？

前期科目の「食の地域経済学」では、三好市の活性化に取り組むNPO主催のワークショップに参加し、かつては耕作放棄地だった梅畑で梅の収穫とシロップ作りを体験します。後期科目の「日本農業を考える」では世界農業遺産の候補となっている美馬市穴吹の傾斜地農業の取材を行います。大学に帰った後は、それぞれの地域のアピール方法をグループで検討し、ポスターを作成して発表会を行います。生産、加工、販売まで、食の６次産業化の工程を模擬的に体験しながら、日本の食の現状の中での徳島の農業のあり方を考えてもらいます。

ポスターを作るプロセスは、自分たちで地域の課題を調査して解決まで考えるきっかけとなります。教養教育ですので参加する学生の学部学科の幅が広く、知り合ったばかりの学生と協力してグループワークを行います。学部を超えた交流・協働ですが、時には上手くいかないことまで含めて、社会の疑似体験となります。

担当教員からのメッセージ

徳島の農業の課題を考えることで、中山間地域の高齢化問題など、日本全国で起こっている課題に触れることになります。また、自然に囲まれた農業生産の現場に触れることはほとんどの学生にとって初めての体験になるでしょう。生産の現場にはその場で暮らす人々の文化や歴史があり、そこに触れることでこれまで知らなかった地域の魅力の発見や、新しい世界に触れる感動が得られます。（現地でいただく地元農家のおばちゃん達の手作りご飯は美味しいですよ！）

徳島には、このような教養教育が目指す人間性の育成につながる経験が得られるフィールドがたくさんありますので、積極的に学びに参加してください。

梅の収穫体験の様子

ワークショップの様子

玉 真之介教授

【前期】ボランティア・パスポート入門

担当：玉 真之介、橋本 直史

とくしまのどのような課題が学べるの？

履修生は、徳島県全域で募集があるボランティア活動に参加することになります。社会奉仕活動を体験することは、社会に役立つ活動に主体的に取り組む人間に成長する機会になります。

徳島県では、青少年が自主的に様々なボランティア活動行う授業・講座の取り組みを、大学と連携して促進する方針が示されており、県民活動プラザでは県内のボランティア情報を紹介する「NPO・ボランティアお試し体験」の仕組みが取り入れられています。この授業では、この仕組みを活用して皆さんに様々なボランティアを経験してもらいます。

学びのためにどのような工夫がされているの？

ボランティア・パスポートは、県が用意したボランティアー覧から選んで参加することでパスポート型の冊子にスタンプが押されていく仕組みです。スタンプは１時間の活動で１つ押されます。合計40個のスタンプを集めることが、単位取得の条件となります。講義では、まずボランティアについて教室で学ぶことからはじめて、その後は一覧から自らで取り組みたいボランティアを選んで、スタンプを取得していきます。

講義終了後もボランティア参加の意欲が維持されるように、パスポートの昇格と評価の仕組みを取り入れています。緑色（初級）のパスポートのスタンプを全部集めると、単位取得に加えて、赤色（中級）→青色（上級）と昇格したパスポートが手に入ります。上級パスポートの修了まで至った学生は徳島県知事からの表彰が受けられるなど、段階に応じた達成感が得られる工夫を行っています。

担当教員からのメッセージ

ボランティア・パスポートの仕組みは私が東北の大学に勤務していた時、東日本大震災の被災地にボランティアとして学生を送り出し、「地域活動への参加で学生自身が成長する」と実感した経験を踏まえ、アイデアを県に持ち込みました。徳島大学ならではの特色ある取り組みであり、社会の実活動に自然に入っていける貴重な機会です。

時が経つにつれて東日本大震災の記憶は失われてきていますが、徳島県でも南海トラフ巨大地震や活断層地震などの大災害が想定されています。ボランティアへの参加から、助け合うことの大切さを実感し、これからの生き方を考えるきっかけにしてください。

スタンプを集めると段階的にパスポートの級が昇格

大学のHPにボランティア情報を掲載

地域科学教育科目の紹介

【前期】ボランティア活動から学ぶグローバル社会と地域社会
【後期】ボランティアリーダーと語る地域社会

担当：大橋 眞

とくしまのどのような課題が学べるの？

講義ではボランティアの理念を講義で教えると同時に、徳島県を始めとした様々なボランティアを紹介します。徳島のNPO法人など社会貢献活動に取り組む団体には、若手に活動の裾野が広がらないなど、活動の継承の課題を抱える団体が少なくありません。授業では、実際にボランティアに取り組む活動者をお招きして、具体的な徳島のボランティア団体の活動の様子や課題を学びながら、若者が活動に参加する意義を考えます。

学びのためにどのような工夫がされているの？

ボランティア活動の意義に気がついてもらうためには、いろいろな人に触れることが重要です。前期の授業では、河川の自然環境をいかして地域再生に取り組む「吉野川に生きる会」、自然をいかした農業や竹林の再生に取り組む「竹林再生会」、上勝町で高齢者の葉っぱビジネスを実践する「いろどり」など、様々な活動者をお招きします。ボランティア活動に参加されている方の話を伺った後、5～6人のグループに分かれ、ゲストも交えてディスカッションを行ってもらいます。

後期の授業では地域の伝統的な農業や、これに基づく生活文化に焦点を当てています。ボランティアの定義は無償奉仕ではなく自発的活動です。農薬を使わない自然栽培、祖谷の傾斜地農業など、地域における新しいことへの自発的な取り組みを紹介します。

また、留学生とのコラボレーションを重視していることも、本授業の特徴です。日本の習慣や伝統について留学生とディスカッションすることで、自分たちの守るべき地域社会のあり方を見つめ直すきっかけとなります。

担当教員からのメッセージ

私は元々疫学の専門家でしたが、ソロモン諸島でマラリア対策を行った経験から、私たちが本当にするべきことは何かを考えるようになりました。マラリアの根絶はできないというのが世界的な見解になっています。そこで、外国から派遣された専門家ではなく、現地の人が対策できるように様々な取り組みを行いました。学校教育の中でのマラリア対策の教育環境づくりを行う中で、日本で廃棄する予定の顕微鏡を運んで改造し、電気が無くても使えるようLEDを取り付けました。電気だけではなく道路や公共交通のインフラなど、日本で当たり前のものはソロモンにはありません。そのような地域で課題解決に取り組むことで、何もない場所での暮らしや工夫が学べました。

勝浦町の自然栽培農園体験

美馬市の古民家での異文化体験

大橋 眞教授

【前期】徳島を考える

担当：豊田 哲也、平井 松牛、高橋 晋一、中村 豊、田口 太郎

とくしまのどのような課題が学べるの？

５人の教員が交代で登壇するオムニバス形式の講義であることがこの授業の大きな特徴です。それぞれの教員の専門である、考古学、歴史学、地理学、民俗学、地域計画学等、様々な視点から、徳島のそれぞれの地域の、地理的・歴史的・文化的な背景の違いが反映された特性を明らかにし、地域的課題について考察します。

学びのためにどのような工夫がされているの？

本授業は、地域の文化や歴史を学ぶ科目の中では、最も古くからある老舗の科目です。一人の教員による授業では経験できないような広い視点から多角的に地域を学び、徳島のことをより深く知って欲しいという趣旨の元で、総合科学部の複数人の教員が担当します。ベテランの先生が、各回それぞれの授業において、独立したテーマで90分の構成を考えます。各回、他分野の教員が聞いても興味深い話題に触れることができます。

担当教員からのメッセージ

地域の特性や本当の課題を分析して、客観的な根拠に基づいた解決方法を考える力を身につけてください。地域を良くしたいという強い思いだけや、思いつきだけのアイデアでは地域をよくすることはできません。本当に地域の課題を解決したいのであれば、地域に飛び込んでいく実践も大切ですが、同時に地域を客観的に理解する能力を身につけることが不可欠です。徳島大学では、地域を客観的に理解するための様々なアプローチとしての学問を学ぶことができます。色々な授業に出て、関心を広げていってください。（豊田）

「徳島」と聞かれて、皆さんは何を連想しますか？徳島大学に入学された皆さんは、県外の人に徳島のことをどう紹介しますか？阿波踊り、鳴門の渦潮、祖谷のかずら橋、剣山、吉野川、山が多い、人口が少ない、過疎地、鳴門金時、徳島ラーメン、阿波藍・・・・。この授業では、こうしたキーワードを切り口に、徳島の成り立ちや課題について考えます。（平井）

阿波踊り、阿波人形浄瑠璃、四国遍路、歴文化、吹筒花火・・徳島は実は個性的な文化の宝庫です。授業では、徳島の地域文化の歴史的変化や現代社会における意味を、豊富な映像資料をもとに紹介していきます。目の前の文化を「フィールドワーク」することのおもしろさ、また、時代を超えて受け継がれる徳島文化のパワーを少しでも伝えることができたらと思います。（高橋）

130万人以上が訪れる阿波踊り

祖谷のかずら橋

豊田 哲也教授

地域科学教育科目の紹介

【前期】地域の自然と食材

担当：浜野 龍夫

とくしまのどのような課題が学べるの？

徳島には海山川の多様な自然があります。海だけでも瀬戸内海、紀伊水道、太平洋と三つの海に面した地域があり、それぞれに自然の特徴と特産物があります。例えば、徳島を代表するブランド産品の鳴門金時は、温暖で降雨量が少なく、適気性が良く、水はけが良い砂地の多い、瀬戸内海に面した地域で生産されています。

このように、徳島は豊かな自然とそこで生産される食材に恵まれています。この恵みを活かして、農業を成長産業にすることが大きな課題となっており、県でも2004年から農産物のブランド化の方針（「とくしまブランド戦略」）が進められています。

授業では、鳴門金時、レンコン、ニンジン、わかめなど、徳島県の特産物や、阿波尾鶏、阿波とん豚など、新たに開発されたブランド食材を紹介しながら、これらの食材を育んだ徳島の自然の特徴や、ブランド化の取り組みを理解してもらいます。

学びのためにどのような工夫がされているの？

この講義は、徳島に初めて住む学生も多い1年生が受講する科目ということもあり、まずは徳島の自然と食の魅力を紹介し、課題を通じて体験してもらいます。さらに、体験した食材の魅力を他人に語るコミュニケーションに取り組む課題によって、徳島の特産品を知る・伝えるための工夫を考えてもらいます。また、食材に加えて、海山川の面白さ、遊び方なども紹介します。地域の環境を自分で体験することで、自然と暮らしと産業のつながりが意識できるようになります。

担当教員からのメッセージ

私自身も徳島出身です。長らく山口県の下関市で働いていましたが、家族が皆、徳島での暮らしへの思いが強く、機会にも恵まれて徳島に戻ってきました。娘は下関で育ちましたが、夏休みに徳島の田舎で生活していたら川潜りが大好きな子供になり、現在は海部川の流れる海陽町の職場でブランド食材に関わる仕事をしています。自然の産物を活用した仕事を考えることは、自然を楽しむことにもなります。仕事のあり方と共に、暮らし方、遊び方も含めて徳島のこれからの農林水産業を考えましょう。まずは徳島の美味しいものを食べて、海山川でひたすら遊んでください。

徳島の特産品「鳴門金時」

新開発のブランド豚「阿波とん豚」

浜野 龍夫教授

【前期】埋もれた文化遺産Ⅰ
【後期】埋もれた文化遺産Ⅱ

担当：中村 豊、端野 晋平

とくしまのどのような課題が学べるの？

講義では遺跡や考古資料に触れることから、その地域における現代とは異なる人々の生業や実生活を体験してもらいます。そこからは地域の環境を活用してモノを自分で作るという、現在の市場経済の中にいる私たちが見えなくなっている地域の姿への気づきが得られます。歴史的な生業や暮らしと現代社会を相対化して見つめ、地域の特性を見つめ直すヒントになります。

現在、地方自治体には地域特性に応じた文化の振興が求められています。徳島市においても、本講義でフィールドワークしてもらう蜂須賀家墓所や徳島城をはじめとした様々な文化遺産を保全するだけではなく、まちづくりや地域文化の創造に向けて活用していくことが課題になっています。古代人の生活を通して、これからの地域社会を考えるためのきっかけを掴んでください。

学びのためにどのような工夫がされているの？

講義の前半において徳島県内の遺跡を紹介しながら、文献やフィールドワークをもとに遺跡を調査する方法を知ってもらいます。また、石器や土器などの古代人の遺物に触れることから、当時の暮らしを推測し、理解してもらいます。講義の後半では前半で学んだ手法をもとに、自分たちで徳島の文化財に関するテーマを決め、グループで調査して成果を発表してもらいます。

授業は学びが受け身にならないよう、実習を中心とした構成です。遺跡の紹介では元城下町であった常三島キャンパスの遺跡や徳島城、蜂須賀家墓所を訪れます。遺物づくりの実習では、蔵本キャンパスにある埋蔵文化財調査室の教員と共同で、実際に徳島で出土した土器にも触れてもらいます（蔵本キャンパスの周辺には古代からの集落遺跡があります！）。後期の科目では、フィールドワークに加えて出土文化財に触れる体験学習機会を設け、文化財を記録する拓本採取など様々な経験をしてもらいます。

担当教員からのメッセージ

情報が氾濫している時代ですが、まず自分の足で現地に行き、自分の目で現場を見て、手を動かして作業するなど、五感を使った実体験を通して徳島を学んでください。学部生の早い段階で様々な実習を経験することは、今後の能動的な学修のきっかけになります。このようにして得られた学修のイメージは、今後の専門の学びでも必ず活用できます。

フィールドワークの様子①

フィールドワークの様子②

中村 豊准教授

地域科学教育科目の紹介

【後期】ボランティア実践

担当：矢部 拓也、樋口 直人、土屋 敦

とくしまのどのような課題が学べるの？

ボランティアを理論としてではなく、実践的な活動として理解してもらいます。社会を持続させていくためには、自発的に社会問題に関わる市民セクターの活動が不可欠です。

例えば、徳島市中心部を流れる新町川をフィールドに活動しているNPO法人「新町川を守る会」は、ひょうたん島遊覧船運航などの新町川の賑わい作りの活動で知られていますが、その基礎となる活動は河川の清掃です。1990年代から地道な清掃活動を続けてきたことで、賑わいづくりのプログラムが可能になった背景があります。このように、すごい仕組みを考えることではなく、日々の当たり前の活動が社会の下支えとなっています。

授業では、座学ではなく実際にNPO等の活動に参加し、ボランティアを実践してもらうことで、このような社会の実情を肌で学んできてもらいます。

学びのためにどのような工夫がされているの？

授業の具体的なプログラムはその年度の担当教員によって異なりますが、いずれもボランティア活動を実践してもらう体験型の授業となります。過去の実践としては、小児科で入院している子どもたちにクリスマスを楽しんでもらうための、バルーンアートイベントに参加した事例があります。透析を行なっている方が、自分の闘病体験から課題意識を持って始めたプログラムです。1日目の参加はただひたすらバルーンを作るだけの作業でしたが、そのような地味な参加を通して信頼関係が生まれます。病院などの公共的な場所に受け入れてもらうためには、参加者の心構えや信頼関係が不可欠です。

このような感覚を掴み取って自発的に動ける学生もいれば、残念ながら授業でやらされている感覚が抜けない学生もいます。本授業は自発性を持ってもらうことを目的としていますので、ハードルの高い活動の強要は行いませんが、多くの気づきにつながるきっかけを提供します。

担当教員からのメッセージ

単位のために活動するのでは本当の意味でのボランティアとは言えません。授業の中では、気軽にできるボランティアから、しっかりしたNPOで本気で取り組むボランティアまで、多様なボランティア活動を紹介します。しっかりしたボランティアに参加した学生は、しっかりした発表を作れるようになって帰って来ます。学びを得ようと思ったら、楽そうだからという理由で自分の活動を選択するのではなく、本当の意味でのボランティア（＝自発的に参加する）意識を持って、積極的な学生生活を過ごしてください。

病院でのバルーン体験

授業での報告プレゼンの様子

矢部 拓也准教授

【後期】地方行政経営論

担当：石田 和之

とくしまのどのような課題が学べるの？

徳島県エリアの課題と、課題に対して県が行なっている取り組みを紹介します。地域社会の抱える様々な課題は、全て行政が抱える課題でもあります。しかし、行政の取り組みが効果的に作用する課題もある一方で、行政の取り組みだけでは解決が難しい課題も数多く存在します。この授業では、行政の具体的な取り組みの効果と同時に、その限界も理解してもらいます。「自分なら何ができるか」を考え、地域の未来に積極的に関わる将来の行動につながるきっかけとなることを期待しています。

学びのためにどのような工夫がされているの？

いずれかの行政施策について、自分の専門や関心とつなげて興味を持ってもらうため、人口減少や過疎、観光のような比較的身近な分野から、高齢者医療、行政評価のような専門性の高い分野まで、幅広い分野の事例を紹介します。例えば観光分野であれば、人形浄瑠璃や藍染などの地域の文化や資源を紹介すると同時に、これを活用した県の施策などについて、背景にある課題、目的、限界など多様な側面から解説し、行政施策と関連づけながら地域を考えてもらいます。

担当教員からのメッセージ

単に知識を得ることで学びを終えるのではなく、行動を起こすきっかけにしていくことを意識してください。学生生活や、将来の仕事の中で地域に対して何らかのアクションを起こしたいと思った時、行政がサポートする仕組みや体制を理解していることで、最初の一歩を踏み出すハードルが下がります。地域の課題解決を考える際の行政の視点を知り、味方につけるコツを身につけてください。

徳島県庁舎

眉山から見た徳島市内

石田 和之教授

地域科学教育科目の紹介

【後期】まちづくり入門

担当：田口 太郎

とくしまのどのような課題が学べるの？

授業の前半はまちづくりの考え方を、後半はまちづくりの実際を取り上げます。教員自身が様々な地域のまちづくりに関わってきましたので、実体験をもとに教科書には載っていない現場の生の事例を紹介します。

徳島県については漁村のまちづくりの事例として、旧由岐町木岐集落での取組を取り上げます。この地域では、調査の結果、田舎とはいえど多世代交流がなくなっていたことがわかり、再度人間関係をつなぎ直す試みを行いました。このように具体的な事例をもとに、地域との関係づくり、調査、調査成果のまとめ、地域づくりへの展開まで、まちづくりの各段階の課題を学びます。

学びのためにどのような工夫がされているの？

まちづくりの一つのアプローチとして、地域に住まう方々の人生をひたすら聞いていくオーラル・ヒストリー調査というものがあります。聞き出した声をつむぎあげながら、地域の人が実際に感じている歴史が浮かび上がります。木岐集落ではこのような歴史を地域の資源と捉え、小学校の学習プログラムや、多世代間の交流プログラムに活用してきました。一方で、学校という組織の中に新しいプログラムを導入する難しさや、持続させる難しさがありました。

このように、上手くいった部分だけではなく苦労した部分も交えて紹介します。実際の取り組みの中から新たに出てきた課題を伝えることで、まちづくりの難しさを考えてもらいます。

担当教員からのメッセージ

地域の現場を何度も訪ねてください。頭で理解するのと、現場の体験は別のものです。現場の持つ感覚をつかんでください。

大学のプログラムに乗って活動している間は、地域にとってはお客様です。様々なプログラムをきっかけに、個人として地域の現場と関わりを持てるようになることが大事です。大学生の間に広げた人間関係が、人生を左右することになります。

アルバイトや部活動など、大学生活は色々と忙しいという声を聞きますが、やりたいこと、やるべきことをやらざるを得ないように退路を絶つことも必要です。自分で自分の背中を押すことで、自分の未来を切り開いてください。

オーラル・ヒストリー調査

地域づくりワークショップ

田口 太郎准教授

【後期】地球環境と持続可能な社会

担当：齊藤 隆仁

とくしまのどのような課題が学べるの？

地球環境問題に関する世界の状況を紹介し、世界の中での先進的な課題解決の取組事例に触れた上で、地球レベルの大きな問題が徳島の地域の取組とどのようにつながっているかを解説します。徳島においても、地球環境レベルの課題意識を持った様々な取組が行われています。上勝町のゴミの排出をなくすことを目標に掲げたゼロ・ウェイスト運動や、佐那河内村の太陽光・風力発電など、徳島県内における再生可能エネルギーの取り組みは、化石燃料や原発の問題、最終的には地球レベルの気候変動への課題意識につながっています。

学びのためにどのような工夫がされているの？

徳島県内の事例を世界や日本の事例と比較するために、教室内では動画やゲストスピーチを取り入れます。ゲストスピーチでは、徳島で環境問題に取り組んでいる社会人の方をお招きして、授業と関連のあるテーマを語ってもらいます。技術者として働き退職された方などに、社会人の現場で得た技術や知識を地域の環境問題にどのように活用しているかといった話は、学生にとっては非常に刺激になるでしょう。

さらに、課外活動として森づくりやゼロウェイストなど、現地で行なっている地球環境と関連する取組を見学する機会を提供します。例えば、神山町にはかつての水力発電所の跡地が博物館として残っています。この発電所は、昭和30年代まで使われていましたが、国の拡大造林政策で杉林を作り出してから水量が減っていき、発電がペイしなくなった背景があります。発電所の痕跡を水源と合わせて見ることで、地域資源としての水の価値と共に、サスティナブルな地域の可能性に気づくことができます。

担当教員からのメッセージ

大学時代に、課題発見・課題解決の基礎を体験を通して学んでください。徳島には、観光地になっていないものの、魅力溢れる場所がたくさんあります。授業の中でも紹介していきますが、積極的に自分の足で訪れ、お気に入りの場所を発見してください。大学の中で大きな課題意識を持って学ぶと同時に、自分の課題となる地域を見つけ、学んだことを地域とつなげて考えられるようになってください。

佐那河内村風力発電見学会

上勝町森林資源活用見学会

齊藤 隆仁教授

地域科学教育科目の紹介

【後期】統計データから見る徳島県

担当：徳島県政策創造部統計戦略課職員

とくしまのどのような課題が学べるの？

人口、結婚と出産、商業、工業、経済動向、消費動向、就業状況など、授業の各回のテーマに合わせて担当職員が、データの分析から徳島県の特徴などの解説を行います。統計を上手く扱うことによって、多様な見方を生み出すことができます。

例えば、皆さんは徳島県は大都市と比較して少子高齢化が進んでおり、経済が衰退しているというイメージを持っているかもしれません。しかし、人口増減と、地域の産業動向やGDPを組み合わせてみると、電気機械や化学の増産効果が牽引して、徳島県の近年の一人当たりのGDPは大都市圏に負けない成長をしていることがわかります。このように、複数のデータを組み合わせることで、人口減少のイメージとは異なる、地域の別の側面が見えてくることがあります。

学びのためにどのような工夫がされているの？

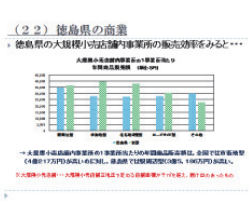
授業の中では、徳島県を題材に統計の種類や意義を理解してもらいます。具体的な統計データを紹介しながら、他都道府県との比較など全国の中での徳島県の位置づけを交え、統計を理解すると同時に徳島県の特徴がわかるような工夫をしています。

また、徳島県が独自に作っている経済指標を解説したり、オープンデータの利活用の方法を解説します。統計を理解するだけではなく、自分たちで統計を利用し、徳島県や日本全体の経済・社会分野の現状や特色、課題を把握できるようになってもらいます。

担当教員からのメッセージ

統計を学ぶことで、客観的かつ多面的に世の中の動向を分析する視点を身に付けることができます。みなさんの日常生活には、新聞やテレビの報道など、データが溢れています。日々報道されている統計データに目を留め、データをもとに社会の動向を考察するよう意識してみましょう。

自分でデータを集めて、課題を考えることができるようになってもらうことが、授業の最終目標です。物事の一面だけにとらわれるのではなく、様々な側面から客観的に見ることができるような学生になってください。



授業では、統計データから見えてくる地域社会の動向や、その捉え方について紹介します。

平成２９年度新規開講授業題目

【前期】徳島の魅力・徳島で働く（集中講義）

徳島県内の第一線で活躍するリーダーや県内高等教育機関のOB・OGを講師に迎えて、経験の中から生まれた確信や考え方を語ってもらうと共に、ディスカッションを行うことで、徳島の魅力や徳島での働き方について主体的に考える場を設けます。

【前期】とくしまの環境を学ぼう

地球温暖化や廃棄物、水質汚濁・大気汚染等の環境問題と実践的な環境活動、国・県の施策などを学びます。また、現地視察研修に参加することで、地域の諸課題を知り、環境問題に取り組む意義を学びます。

【後期】実践・地域創生学

徳島大学地域創生センターが実施している「まちしごとファクトリー」及び、那賀町、上勝町、美波町、神山　町、にしあわのサテライトオフィスで開催する授業に参加して、地域課題・地域創生の取り組み・新しい試みを知り、自分の役目やできることをワークショップやグループワークで実践する授業を実施します。

【後期】歴史から学ぶ地域～経済・社会～

日本史の観点から徳島や日本の経済・社会について、資料を通して理解を深めます。受講生を5名程度のグループに分かれて、江戸時代と現代社会からテーマを設定し、グループで調査・報告を行います。調査や他のグループの報告を通して、徳島という地域の歴史的な変化にも目を向け、グループディスカッションなどを通じて、徳島の特色などを発表できるようになってもらいます。

【前期】実践力養成型インターンシップⅠ
【後期】実践力養成型インターンシップⅡ

徳島県内の企業・団体が抱える課題に対して、受入先と学生が中・長期にわたり共同してミッションの達成を目指す、実践型のインターンシップです。インターンシップ先ごとに参加学生でチームを組んで取り組み、インターンシップ先での活動と大学内での活動（グループワークなど）を繰り返し行いながら進めます。

【前期】瀬戸内海論 その１（e-larning科目）
【前期】瀬戸内海論 その２（e-larning科目）

瀬戸内地域の活性化に関わる具体的なプロジェクトについて、そのプロジェクトを行う意義を考え、プロジェクトの具体策に係る検討を進めていくことで、地域活性化を進める方策を検討するための考察力を身につけます。また、地域活性化政策の推進に関する行財政制度などの基本的な仕組みや、県内外の地域活性化に関する事例について学びます。

【前期】瀬戸内地域活性化政策 その１（e-larning科目）
【前期】瀬戸内地域活性化政策 その２（e-larning科目）

物理学、化学、生物学、地学などの自然科学的観点から瀬戸内海の環境問題、資源問題に接近すると同時に、法学、経済学などの社会科学的観点からも対象に接近します。e-learningによる映像配信型授業であり、瀬戸内海の環境問題、資源問題を対象に調査研究している研究者によるオムニバス形式の授業となります。

平成 28 年度　実践力養成型インターンシップの実施について

徳島大学では、教育カリキュラム改革の 1 つとして、寺子屋式インターンシップの開発を進めている。寺子屋式インターンシップとは、企業側にはメンターを、大学側にはドン（学内メンター）を配置し、相互が密に連絡を取り合い、事前学習から事後の振り返りまで「課題・レポート・ディスカッション」を繰り返しながら課題解決に向けた取り組みを行う少人数制の受入企業・団体の課題解決型インターンシップを指す。本年度は寺子屋式インターンシップのプロトタイプとして、名称を変え「実践力養成型インターンシップ」を実施した。

（1）実践力養成型インターンシップ　事業スキーム　（図 1）

実践力養成型インターンシップとは、徳島の企業・団体の抱える課題に対して企業と学生が協働して取り組む、プロジェクト型のインターンシップである。特に徳島県にて雇用の創出が見込まれる、次世代技術関連分野、地域医療・福祉関連分野、6 次産業化関連分野、地域づくり・観光・ICT 関連分野の 4 つの分野の企業・団体を中心にインターンシップ実施のための関係構築を行った。

関係構築後は、受入先の経営者および受入担当者と COC+推進コーディネーターが連携してプロジェクトを組み立て、参加希望学生と企業のマッチングを経て、学生がインターンシップに参加する。さらに、プロジェクトに取り組む中でのアドバイスやメンタリングなど、インターンシップ開始後もコーディネーターが学生の支援を行う。

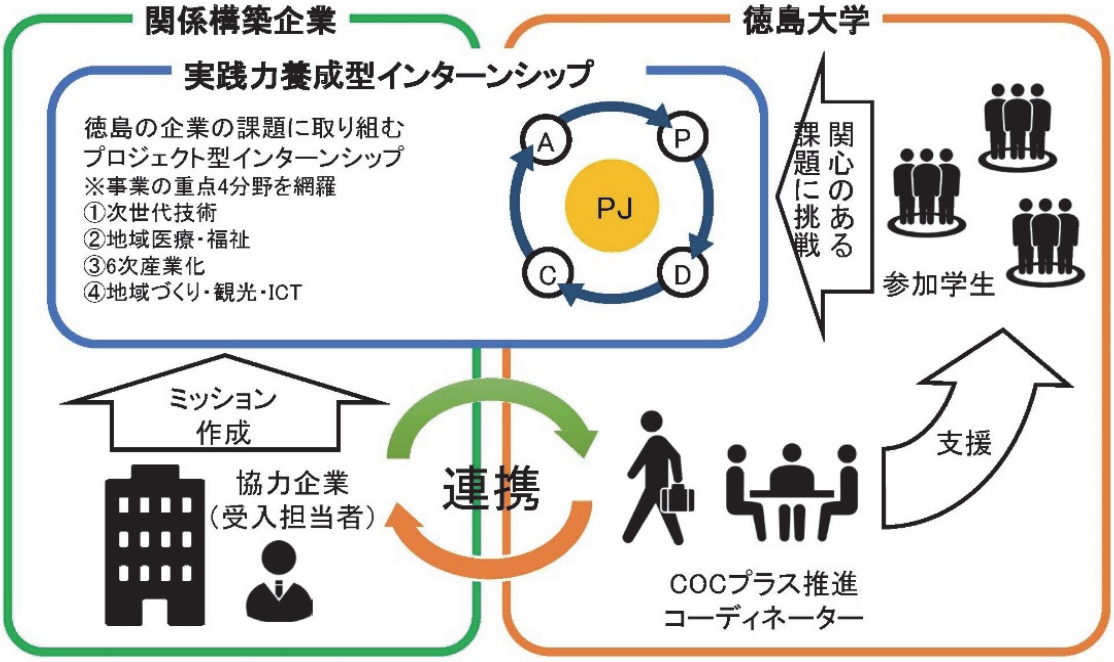


図 1　実践力養成型インターンシップ　事業スキーム

（２）インターンシップの類型

徳島大学内には、学部生が履修する既存のインターンシップ科目として、短期間の就労体験型「短期インターンシップ」を導入している。「短期インターンシップ」は、業界理解や自己の志向性の把握を学習効果としているが、実践力養成型インターンシップは、より長期に渡り実践的に企業と関わることで、就業力や社会人基礎力を身につけていくことを学習効果とした。（図 2）

実践中心のインターンシップとしては、①業務補助型　②課題協働型　③事業参画型の 3 つのスタイルが考えられるが（図 3）、今年度は課題協働型および事業参画型に力点をおいてインターンシッププロジェクトを定めた。受入企業・団体の担当者と学生が一つのチームメンバーとなり課題解決に取り組むことによって、地域を知り、企業を知り、働くとはどういうことかを知ることのできるプログラムとなっている。

学生がプログラムに従事する期間は、事前の研修から事後の振り返りまで含め、約半年間（うちインターンシップでの実質活動時間 30 日間程度）とした。

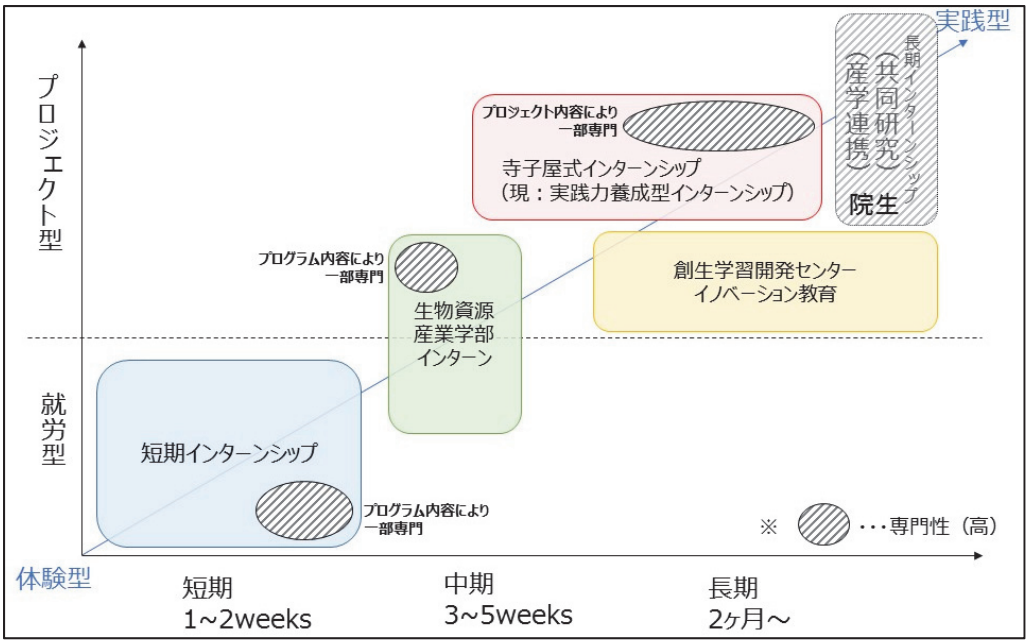


図 2　学習効果を基準とした徳島大学内におけるインターンシップ等の大学･企業間協働教育活動

実践中心 数週間～数か月が多い	**業務補助型**	普通のアルバイトでは経験できないような企業の業務に取り組む。期間は1か月以上の長期が多い。	**社会人基礎力**	**若者を活用した業務の推進**
	課題協働型	会社と大学を行ったり来たりして課題発見や企画立案に取り組む。グループワーク形式が多い。	**社会人基礎力＋学びの実践**	**若者の発想の活用・社内活性化など**
	事業参画型	企業の新規事業や変革プロジェクトの一員として業務に取り組む。期間は1か月から長いものだと半年間の長期が多い。	**社会人基礎力＋リーダーシップ**	**若者を活用した新規事業などの推進**

図 3　実践力養成型インターンシップのスタイル

（3）参加学生数

7つの受入団体で、1年生4名、2年生5名、3年生24名、4年生2名の計35名（単位の修得有り23名、自由応募（参加）12名）の学生が参加した。受入団体別参加者数の内訳は図4に記す。

分野	企業名	参加学生数（1年生）		参加学生数（2年生）		参加学生数（3年生）		参加学生数（4年生）		合計
		総合科学部	工学部	総合科学部	工学部	総合科学部	工学部	総合科学部	工学部	
次世代技術関連分野	大塚テクノ株式会社	-	-	1	-	2	1	-	-	4
6次産業化関連分野	有限会社樫山農園	1	-	1	-	-	6	-	-	8
地域づくり・観光ICT関連分野	株式会社あわわ	-	-	-	1	1	1	-	-	3
	一般社団法人徳島新聞社	1	-	-	-	4	1	1	1	6
	株式会社QLiP	-	1	-	1	-	2	-	1	5
	ＮＰＯ法人マチトソラ	-	-	-	-	3	-	1	-	4
	徳島大学地域創生センター上勝学舎	1	-	2	-	1	1	-	-	5
合計		4		5		24		2		35

図4　受入企業・団体と参加学生数内訳

（4）受入団体とプロジェクトの概要

7つの受入団体でプロジェクトに取り組んだ。各プロジェクトの概要を図5に記す。

No	企業名	キーワード	プロジェクト
1	大塚テクノ株式会社	製造業 人材登用 広報・ＰＲ	他社のリサーチや社員のインタビュー結果をもとに、企業が求める人材を採用するために効果的な広報ツールを採用対象となる工学系の学生の視点を踏まえて作成する。
2	有限会社樫山農園	農業 デザイン IT/情報発信	Web 販売部門という新セクションの立ち上げと経営理念の社内外への浸透を目的に、経営陣や社員へのヒアリング等を行い、HPのグランドデザインを作成する。
3	株式会社あわわ	メディア業界 取材/編集 イベント企画	取材や街頭アンケートを通してたくさんの徳島人と繋がり、その中から地域の課題を発見、課題を解決するためのイベントを企画・運営する。
4	一般社団法人徳島新聞	メディア業界 取材/執筆	高校生や大学生へのアンケート調査を行い、若者に新聞を手に取ってもらう仕掛けを考えると共に、徳島新聞の若者向けページ"ニチヤン"の企画、取材・原稿執筆を行う。
5	株式会社QLiP	IT/教育 イベント企画 情報発信	海外先進地域のプログラミング教育を調査し、授業カリキュラムを考える。 近隣小・中学校にアンケートを取り、プログラミング教育の認知拡大のためのイベントを企画運営する。
6	NPO法人マチトソラ	地域活性化 まちづくり マーケティング	うだつマルシェの主催者、出店者、来場者にアンケート調査を行い、リピーター率と客単価をアップさせるための提案を行う。
7	徳島大学地域創生センター上勝学舎	地域活性化 まちづくり 限界集落 住民ヒアリング	企業棚田オーナーを獲得する為に地元住民へのヒアリングを行い、効果的な営業ツール作成する。また、今後のオーナー制のあり方についての意見交換を行うため、地元住民と運営主体を交えた座談会を開催する。 古民家の有効的活用に向けた基礎調査として、地元住民へヒアリングを行い、困り事（ニーズ調査）ならびに、小コミュニティの把握を行う。

図5　受入企業・団体とプロジェクトの概要

（５）実践力養成型インターンシップ　年間実施スケジュール

時期	項　　目
４月	**企業訪問・プロジェクト組み立て** ① コーディネーターが受入団体を訪問し、プロジェクトの組み立てを行う。
５月	
６月	**インターンシップフェア開催（６月２日）** ② 受入団体が学生にプロジェクトの紹介を行うインターンシップフェアを開催。 （プレゼン企業８社 / 参加学生数 69名） **マッチング** ③ 受入団体とエントリー学生が面談を行い、マッチングを行う。
７月	**事前研修** ④ 参加学生に対し、コーディネーターが事前研修を実施。 **事前講習** ⑤ 受入団体担当者に対し事前講習を実施。
８月	**インターンシップ開始** プロジェクト毎に随時インターンシップ開始。 受入団体数 7 社 / 参加学生数 35名 **企業訪問** ⑧ インターンシップスタートアップの企業訪問。
９月	**第１回学生リーダーミーティング実施（９月13日）** ⑥ 各プロジェクトの学生リーダーを集めた会議を実施。 リーダーの役割やインターンシップの今後の流れについて協議を行う。 **参加学生メンタリング** ⑦ インターンシップに取り組む中で困っていること・不安なことなどをヒアリングし、メンタリングを実施。
１０月	**第２回学生リーダーミーティング実施（10月13日/17日）** ⑥ 各プロジェクトの学生リーダーを集めた会議を実施。 中間報告会についての情報伝達を行う。 **中間報告会開催（10月26日）** ⑨ プロジェクトの進捗報告、気づきの共有のため、中間報告会を開催。 ①各プロジェクトチームからの報告 ②他プロジェクトの参加学生・受入団体との情報交換 参加者数 44名 **企業訪問** ⑧ 中間報告会前の受入団体訪問。 ・中間報告会についての説明 ・プロジェクトの進捗確認 ・学生の取り組み姿勢　等
１１月	**参加学生メンタリング** ⑦ インターンシップに取り組む中で困っていること・不安なことなどをヒアリングし、メンタリングを実施。インターンシップを終えたプロジェクトは振り返りの促しを行う。
１２月	**第３回学生リーダーミーティング実施（12月19日）** ⑥ 各プロジェクトのリーダーを集めた会議を実施。 最終報告会についての情報伝達を行う。 **企業訪問** ⑧ 最終報告会前の受入団体訪問。 ・最終報告会についての説明 ・プロジェクトの進捗確認　等
１月	**最終報告会に向けたフォローアップ** 最終報告会に向けての資料作成アドバイス、プレゼン練習などを実施。 **最終報告会（１月21日）** ⑩ プロジェクトの成果報告を行う最終報告会を開催。参加者数 141名
２月	**修了生振り返り会（２月16日）** ⑪ インターンシップに参加しての学びを深めるための振り返り会を実施。
３月	**受入団体振り返り会（３月10日）** ⑫ 今回のインターンシップの知見の共有と来年度のインターンシップの課題についての協議。

（６）実践力養成型インターンシップ　年間プログラム実施概要

※項目番号は前ページ「年間実施スケジュール」の表と対応

①プロジェクト組成（企業訪問）（4 月、5 月）

インターンシップ受入先企業の開拓、ならびにプロジェクト組み立てを行うため、県内企業ならびに団体への訪問を実施した。（55 団体を訪問）

経営者及び、直接の受入担当者とコーディネーターが協議を行い、①経営と直結した課題であること、②課題解決が受入団体の益になること、③学生にとって十分な学習効果が見込まれること、という 3 つの条件のもとにインターンシップで取り組むべき課題を整理し、プロジェクトを組み立てた。受入団体とコーディネーターが共同でプロジェクトを組み立てることで、インターンシップの事前準備段階での受入団体の負担を軽減した。また、課題解決型のインターンシップとすることで受入団体にとってのメリットを明確にする効果を図った。

②インターンシップフェア（6 月 2 日）（33P 参照）

組み立てたプロジェクトの内容を学生に伝え、インターンシップへの参加を募るため、受入団体担当者から学生に向けてプロジェクトを紹介するプログラムを実施した。（8 団体がそれぞれのプロジェクトを紹介）

第 1 部は、各受入団体が参加学生全体に向けて 4～5 分程度でプロジェクトを紹介するプレゼンテーションを実施した。第 2 部は、各プロジェクトのブースを設け、興味を持った学生がプロジェクトの詳細な説明を受ける個別説明会を実施した。

③エントリー受付およびマッチング（6 月）

インターンシップ開始後のミスマッチを防ぐため、インターンシップへのエントリー学生と受入先担当者が面談する場を設けた。受入団体からは、学生の参加への意気込みや他活動（アルバイト、部活、授業等）の状況等を、学生からはプロジェクトの内容や実施日程等についての確認を行い、プロジェクトへの参加に関しての最終意思を相互に確認した。

マッチングの形式（個別面談、集団面談、グループワーク等）は、受入団体の裁量に任せ、新しい採用面接方法の試行や、入社 2～3 年目の人事担当者の面接官訓練の機会として活用していただいた。

④受講生生事前研修（7 月）

インターンシップ開始後の活動を円滑に進めるため、社会人基本動作などのマナー講習や、プロジェクトの推進に必要となる基礎知識等を学ぶ研修をプロジェクト毎に 3～5 回実施した。

⑤受入団体事前講習（7 月）

インターンシップ開始後の活動を円滑に進めるため、学生受入にあたっての心構え、学生への対処法、法令等について、受入団体担当者を対象に事前講習会を実施した。受入団体別の個別事前講習に加え、複数団体が参加する合同の講習も実施し、団体同士の交流の機会を設けた。

⑥学生リーダーミーティング

各プロジェクトでリーダーとなる学生を決め、リーダーの役割講習と、コーディネーターとの情報共有を行うためのミーティングを、インターンシップ開始直後、中間報告会前、最終報告会前の計 3 回実施した。情報交換のほか、リーダー同士が交流し、チームでプロジェクトを進める上での課題や知見を共有するプログラムを実施した。

⑦受講生メンタリング

コーディネーターがメンターとなり、必要に応じてチーム毎にメンタリングを実施した。さらに、個別学生についても、プロジェクトを進めるにあたってつまずきを感じているなど、必要な場合に適宜メンタリングを実施し、課題を乗り越える為のフォローや、さらなる挑戦に向けて学生の背中を押す役割を担った。

⑧受入団体訪問

インターンシップの開始時、中間報告会前、最終報告会前の計 3 回、コーディネーターが受入団体を訪問し、学生の取り組み姿勢や進捗状況について情報共有を行った。インターンシップを進める中で発生した問題点と、その対応について、受入担当者とコーディネーターが共有することで、プロジェクトの円滑な推進に繋がった。

⑨中間報告会（10 月）（43P 参照）

実践力養成型インターンシップにおける、プロジェクトの進捗の中間段階において、これまでの取り組み状況の振り返りを行い自己評価すると共に、各プロジェクトに取り組む受入団体、学生間での情報交換を行い、目標達成に向けた課題の整理や今後必要となる取り組みの確認、意識の共有を図ることを目的として中間報告会を開催した。

⑩最終報告会（1 月）（46P 参照）

受入団体担当者、事業協働機関担当者、徳島大学学生及び教職員等を招き、インターンシップへの取り組み内容、成果、得られた学びを報告する最終報告会を実施した。取り組みと成果だけではなく、インターンシップでのつまずき、苦労などの振り返りと、そこで行った工夫を報告することで、得られた学びを自覚する効果を図った。

⑪修了生振り返り会（2 月）（68P 参照）

修了生が、インターンシップを通して得られた学びや気づき、参加前後での意識の変化等について振り返り、これをもとに今後の学生生活の課題を展望するための振り返り会を実施した。

⑫受入団体振り返り会（3 月）（72P 参照）

受入団体が、インターンシップの振り返りをもとに知見を共有し、次年度のインターンシップ事業の課題について協議するための振り返り会を開催した。今年度の受入団体と次年度の受入を検討する COC+事業関連団体が参加し、インターンシップ実施のメリットを共有すると共に、負担となった点・問題点の整理と対応策を協議した。

実践力養成型インターンシップ インターシップフェア

（1）主旨・目的

実践力養成型インターンシップを実施するにあたって、受入団体が学生に、取り組むプロジェクトを紹介するインターンシップフェアを実施した。

（2）日時

平成 28 年 6 月 2 日（水）13：00～17：00

（3）場所

徳島大学地域創生・国際交流会館 5 階 フューチャーセンター

（4）参加団体（プレゼンター）

企業名	担当者 氏名
大塚テクノ株式会社	人事総務部課長 千葉 雄介
日本フネン株式会社	代表取締役社長 久米 徳男
一般社団法人徳島新聞社	編集委員 門田 誠 / 生活文化部 橋本 真味
株式会社あわわ	代表取締役社長 岩佐 乃介 / 営業チームメディアプランナー 小山 亜紀
株式会社 QLiP	情報責任者 江本 大輔
NPO 法人マチトソラ	理事 横山 篤志
有限会社樫山農園	専務取締役 樫山 直樹
徳島大学地域創生センター上勝学舎	客員教授 澤田 俊明

（5）来場者数

69 名（1 年生：15 名、2 年生：7 名、3 年生：43 名、4 年生：4 名）

（6）プログラムの流れ

プログラム	時間	担当者	内容
開会	13：00 ～13：05	玉 真之介 (COC+推進本部推進監)	インターンシップフェア開会挨拶
主旨説明	13：05 ～13：10	川崎 克寛 (コーディネーター)	主旨説明
プロジェクト紹介	13：10 ～14：30	受入団体担当者	来場学生に向けたプロジェクト紹介 （5 分×8 団体）

個別説明会	14：40 ～16：20	各企業担当者	各企業・団体に分かれてのインターンシッププロジェクト説明会（30 分×3 回）
エントリーシート記入	16：20 ～17：00		・インターンシップへのエントリー用紙記入（随時受入団体との相談受付）

（7）プログラムの内容

① 全体プレゼンテーション

各受入団体より、来場学生に向けて 5 分間のプロジェクト紹介を行った。

企業名	プロジェクト名
大塚テクノ株式会社	未来を生み出す優秀な人材にテクノで働く魅力を伝える
日本フネン株式会社	年間 18 万枚のドアを製造する生産ラインの改善の検討
一般社団法人徳島新聞社	若者の wants を探る新聞づくり
株式会社あわわ	徳島の課題を知るために徳島の 1000 人とツナガル
株式会社 QLiP	プログラミングの面白さを子供に伝えるノウハウをつくる
NPO 法人マチトソラ	5000 人以上の人が集まるうだつマルシェを進化させる
有限会社樫山農園	アグリビジネスを成功させる web コミュニケーションを考える
徳島大学地域創生センター上勝学舎	多様な地域資源を活用した地域活性化の拠点づくり

② 個別プレゼンテーション

各受入団体のブースに分かれて 30 分間×3 クールのブース別プロジェクト説明会を行った。学生は、全体プレゼンテーションを聞いて興味を持った企業・団体のブースを訪問し、担当者から、より詳しいプロジェクトの説明を受けた。累計 69 名の学生がフェアに参加し、学生からは「企業の本気を感じ、良い刺激をもらえた」、「様々な企業の話を聞くことができた。はじめて分かることが多く、いい機会になった」、「インターンシップに行こうと考えていたが、web の情報だけでは分からないことが多すぎたので、担当者から直接話を聞けて勉強になった」等の声が聞こえた。

■ブースの様子（大塚テクノ㈱）

■ブースの様子（日本フネン㈱）

（８）添付資料

①　インターンシップフェア　リーフレット（表）

② インターンシップフェア リーフレット（裏）

＜インターンシップ開始までの流れ＞

★Q&A★

Q:フェアに参加できなかったんだけど、プロジェクト内容やエントリーの仕方が聞きたい！

A:地域創生・国際交流会館3FのCOC+本部へお越しください！スタッフが個別にプロジェクトの説明並びにエントリシートの配布等を行います♪

Q:後日エントリーシートを出したいんだけど、どこに出せばいいの？

A:上記COC+本部へお持ちください！エントリーシートを持っていない方も、こちらに取りに来てください♪

③ インターンシップフェアパンフレット

文部科学省 地(知)の拠点

2016年6月2日
徳島大学COCプラス推進本部

実践力養成型インターンシップ
プロジェクト紹介パンフレット

目次

3ページ 大塚テクノ株式会社 未来を生み出す優秀な人材にテクノで働く魅力を伝える

5ページ 日本フネン株式会社 年間18万枚のドアを製造する生産ラインの改善の検討

7ページ 一般社団法人徳島新聞社 若者のwantsを探る取材と紙面づくりの実践

9ページ 株式会社あわわ 徳島の課題を知るために徳島の1000人とツナガル

11ページ 株式会社QLiP プログラミングの面白さを子どもに伝えるノウハウをつくる

13ページ NPO法人マチトソラ 5000人以上の人が集まるうだつマルシェを進化させる

15ページ 有限会社樫山農園 アグリビジネスを成功させるwebコミュニケーションを考える

17ページ 徳島大学上勝学舎 多様な地域資源を活用した地域活性化の拠点づくり

21ページ 番外編 あたらしい暮らし方働き方開発ラボ サテライトワーク先進地域で行うインターンシップを企画する

未来を生み出す優秀な人材に テクノで働く魅力を伝える

鳴門市に拠点を置きグローバルに事業展開を行う企業の魅力を全国の技術者&ビジネスパーソンの卵に向けて発信します。

徳島県鳴門市
大塚テクノ株式会社

どのような事業を行っている企業（組織）ですか？

大塚テクノの歩みは、医療品の輸液容器プラスチック部材の開発・製造から始まりました。現在では、国内だけに留まらず、海外へも生産拠点を拡大しています。また、医薬品のプラスチック製造で培った成形技術を生かし、電子分野への参入にも成功し、LEDパッケージ製品の製造に加えて、2013年にはリチウムイオン電池の安全装置の製造を開始しています。需要の広がる医療分野と電子分野へ、高い品質と技術を武器に、更に海外にも活躍の場を広げていきます。

事業としては、「医療製品」と「精密製品」を事業の柱として展開しています。医療製品としては、点滴用のバッグやキャップ、薬品を保管するためのケースなど、用途に応じた軽くて丈夫なプラスチック製品を最も得意としています。また、喘息治療用の薬剤吸入デバイスや人工透析の医療機器の製造なども行っており、海外拠点を中心に販売を広げています。これからも医療現場のニーズを拾い上げ、それを的確に製品に反映させていきます。

「精密製品」としては、医療用製品の開発が技術的な基盤になっており、プラスチックを熟知しているため高付加価値のプラスチック素材を扱うことができます。例えば、スーパーエンジニアリングプラスチックと呼ばれる素材は、機能設計によって、金属と同じ性質を与えることもできます。耐熱性、耐薬品性、導電性、耐久性、耐摩耗性を高め、精密機器の部品として利用します。金属の代替ではなく、金属を超えるプラスチック製品を生み出すことができます。

さらに、高いプラスチック成形技術があるので、ミクロン単位での精密な製品を作ることができ、プラスチックと金属を組み合わせた複合部材も生産しています。また、製品の機能や安全性、耐久性を高めることも可能です。この技術は様々な電子機器に使われ、特にLEDの普及に伴って生産を伸ばしてきました。

新規事業としては、大塚テクノの新たな事業の柱となるオリジナル製品としてサーマルプロテクターの生産を行っています。サーマルプロテクターは、これからますます普及することが予測されている、リチウムイオン電池の安全装置です。これまでのプラスチックとその成形技術を土台としながら新しい技術を取り入れた製品です。

どのような課題にこれから取り組んでいきますか？

医療関連製品と精密関連製品の両分野にわたり高度な技術と競争力を持つ大塚テクノでは、グローバルな事業展開を進めています。急激な事業拡大に伴い、即戦力となる優秀な技術者を獲得することが、喫緊の課題となっています。

求める技術やスキル、人物像と合致した方に、如何にして大塚テクノで働く魅力を情報として届けるか。この方法を見つけることを重要な課題と考え、人材確保に向けたブランディングとPRにさらに力を入れいきます。

挑戦するプロジェクトについて

大塚テクノは世界的に見ても非常に高い技術と競争力を持った企業です。しかし、昨今は国内景気が回復基調で推移し、企業の新卒採用が大幅に増える傾向にあり、中小企業にとって生命線でもある人材確保が厳しい状況になっています。そこで本プロジェクトでは、働く先としての大塚テクノの魅力を抽出し、その魅力を効果的にPRする方法を検討してもらいます。採用対象と目線の近い学生のみなさんに取り組んでもらうことで、多くの優秀な方に弊社に興味を持ってもらえる成果が出ると期待しています。

project
未来を生み出す人材にテクノの魅力をPR

【プロジェクトの目的】

優秀な人材に関心を持ってもらうためには、徳島県だけではなく、全国に向けて大塚テクノの技術、製品の競争力、仕事に対する研究者・技術者としてのやりがい、そして研究・開発を支える部門のやりがいを発信していかなければなりません。

また、大塚テクノで働くことについて、私たち自身が現在まだ気がついていないメリットを探り、発信できる強みを増やしていくことも必要です。

プロジェクトでは、新しい大塚テクノの強みを見つけるブランディングと、ターゲットに的確にその強みを伝えるPRの視点を持って、人材登用のための効果的な手段・方法を考案してもらいます。

【具体的な活動】

まずは、会社が求める素養を持った採用対象学生にとって、弊社で働くことが魅力に感じられるような弊社の強みをリサーチしてもらいます。弊社が社員に求める素養には、「業務に合致した技術を持っている方」という視点もありますが、加えて「アグレッシブな人、自分事として仕事に打ち込める人」と共に働きたいと思っています。そのようなターゲットの目線を持って、社内の様々な方にインタビューを行うことで、弊社の強みを探ります。また、同業他社が捉えている自社の強みと、その発信方法を知ることは、プロジェクトを進めるための大きな手がかりになります。合わせて、業界のリサーチも行います。

発信すべき強みが明らかになったら、それを効果的に伝える方法を検討します。学生を対象としたインタビューなど、参考になる情報を集めながら、弊社の強みが効果的に伝わるPR方針（媒体、構成、伝えるべき情報やメッセージ等）の検討を進めます。方針ができれば、社内でプレゼンテーションを行います。承認が出れば、実際のPRの作成に取り掛かります。

最終的には、みなさんが作成した方針に沿って、ホームページの内容の拡充や、企業紹介パンフレットの作成まで取り組んでいただきます。

【求められる成果】

「リサーチ→提案作成→プレゼンテーション→承認→提案に沿った事業実施」の、企業における企画立案業務の一連の流れを経験してもらいます。目に見える成果物としては、ウェブサイトやパンフレットの作成ですが、そこに至るまでの各段階のハードルを超えることが、本プロジェクトでは求められます。

挑戦する学生へのメッセージ

大塚テクノ人事総務部課長
千葉雄介

当社は100年後も顧客満足のために存続し続けるために、メーカーとして新しい価値を持つ製品を世の中に提供し続ける集団でありたいと願っています。そのため、人材育成が最重要課題であると認識しています。

新しい価値とは何か。市場が求めているものは何か。そのために今何をすべきか。こういった将来の大塚テクノにとって重要な課題に一緒に取り組んでもらえる優れた人材に、どうすればアプローチできるのか。

みなさんにはまさしく大塚テクノが今後も新しい価値を創造し続けるために必要なしくみづくりに取り組んでもらいます。非常に重要な事業ですので、時には厳しく接することもありますが、諦めずに成功体験と達成感をつかみ取ってください。

年間18万枚のドアを製造する 生産ラインの改善の検討

新築分譲マンションを中心とした玄関ドアトップシェア企業にて生産技術の基盤となる生産ライン改善の課題解決に取り組みます。

徳島県吉野川市
日本フネン株式会社

どのような事業を行っている企業（組織）ですか？

日本フネンは玄関ドアを中心とした「建築資材」を製造・販売する会社です。社名にフネン（不燃）とあるように、建築物に対して、「不燃」「防火」「耐火」性能など機能性の高い建築資材を開発してきました。更に、「断熱」「防音」「防犯」「対震」などの新たな機能を加え、新素材を駆使した製品開発を日々重ね、年間18万枚以上のドアの製造・販売を行っています。特に分譲と賃貸を合わせたマンションの玄関ドアでは、業界トップシェアの45%が日本フネン製です。

主要な顧客は、マンション・オフィスビル・ホテル等の施主・デベロッパー、ゼネコン、設計事務所などになります。このように様々な顧客の要望に応えられる高い水準の製品を開発しています。市場に受けられている理由としては、安全性・機能性・快適性に加えて、意匠性（デザイン性）の評価の高さやオーダーメイド商品を既製品と同等の価格で提供できる価格競争力や、豊富な品揃えなどがあげられます。

また、近年はLEDやリサイクル素材を使った新建材など、環境製品の開発も行っています。信号機は、白熱電球式から省エネルギー効果の高いLED式に変わりつつありますが、信号機本体を新規に設置しなければならないので多大な経費がかかり、十分には普及していないのが現状です。そこで、まだ十分に使用可能な信号機本体をそのまま生かし、電球を取り換えるだけでLED信号機に変えることができる歩行者信号機用LED電球を、徳島県警察本部、徳島県立工業技術センターと共同開発しました。この取り組みは、地球温暖化防止活動環境大臣賞をいただくなど、社会的にも高く評価されています。このように、培った技術を自然環境や社会に還元する事業にも積極的に取り組んでいます。

どのような課題にこれから取り組んでいきますか？

顧客の要望に応え続けるためには、日々生産技術・生産効率を高める必要があります。機械にできるものは機械に任せ、製造の現場が革新を続けることで、業務効率・収益性を高めなければなりません。

近年は海外の製造業において、IT技術の進歩を受けたインダストリー4.0などの考え方も出てきています。これまでの技術では、一つの製品を一つの製品製造ラインで一貫して製造するのが効率的な生産方式でした。IT技術が進歩を続ける今後は、生産を工程ごとに標準化すると同時に工場内のあらゆる機器をインターネットに接続し、製品需要に応じて工程の組み替えを行っていくなど、自律的に生産ラインを考え出すスマートファクトリー方式が主流になっていくのではないかと言われています。このような新技術の導入の検討も行いつつ、多様化する顧客のニーズに即対応できる迅速な生産技術の開発を進めていくことが、これからの課題になっています。

挑戦するプロジェクトについて

日本フネンの社訓は「創造・革新・挑戦」です。グローバル化時代の昨今、インダストリー4.0など製造業においても劇的な変化が訪れる時代になると言われていますが、日本フネンは本格的な海外展開を視野に、常に変革するための取り組みを行っています。今回のプロジェクトでは、億ションと呼ばれるマンションの玄関ドアを製造する実際の製造過程に触れてもらい、若い方の柔軟な視点と意欲を持って、生産性向上につながる課題点を見つけ出してもらいます。

project
柔軟な視点で考える生産性向上プロジェクト

【プロジェクトの目的】

日本フネンでは、顧客だけではなく社員、関連企業、地域等、ビジネスに関わる様々なステークホルダーに信頼され続ける「ものづくり」のために、生産現場をはじめとして、常に変革する意識を持ち続けています。そのために、現場での日々の努力はもちろんですが、時には先入観のない外からの意見を聞き、中にいると気がつかない課題に目を向けることも必要です。

一つの専門やものの見方にとらわれない若い方の意見から、思わぬ気づきが得られることもあります。柔軟な発想力、着眼点、パワーとやる気を持った学生の視点で、現場の技術者と意見交換をしながら生産ラインの課題を検証し、生産性を向上させるための改善点を提案して下さい。

【具体的な活動】

現在稼働しているドアの生産工程の現状把握と分析を行い、生産効率を上げるための改善案を検討・立案・検証します。その際に、次の点を意識して取り組んでもらいます。

①作業の無理・無駄な点を見つけ、作業時間を減らす。
②人手作業を機械に置き換えられる点を見つける。
③工程を見直し、生産の流れをスムーズにする方法を考える。
④違和感を感じる点を見つけ、具体的に検証する。

【求められる成果】

みなさんが提案してくれた様々な改善提案を組み合わせて、設備導入した場合の作業時間を試算します。ハードルは高いかもしれませんが、作業時間を1/2に短縮する工程が出来上がることを目標に、プロジェクトに取り組んでもらいます。

挑戦する学生へのメッセージ

日本フネン代表取締役社長
久米徳男

当社は一流の企業やお客様に直接アプローチできるといった点で恵まれています。また、産・官・学など様々な専門機関との連携により、やる気さえあれば高い技術やノウハウを吸収できる環境があります。私は常に社員に「夢とロマンを持ってほしい」と話しています。インターンシップでは、様々な暮らしのニーズに応える性能を持ち、お客様から高く評価される製品の生産現場に触れることができます。高い技術を持つものづくりの生産工程に触れることは、みなさんのこれからの人生設計と、将来の夢が広がる大きなきっかけになるはずです。さらに、インターンシップをきっかけに、夢を形にするチャレンジの場として日本フネンで働くイメージを持って帰っていただければ、これほど嬉しいことはありません。

若者のwantsを探る
取材と紙面づくりの実践

徳島新聞の若者向けコーナー1ページの紙面作りに取り組みながら若者に響くこれからの新聞のあり方を検討します。

徳島県徳島市

一般社団法人徳島新聞社

どのような事業を行っている企業（組織）ですか？

徳島新聞社は「県民と共に行く」を信条にした、徳島県民に寄り添う報道で高く評価されている新聞社です。朝刊、夕刊を発行し、地元ニュースから世界各地のニュースまで新鮮情報を幅広くお届けしています。県内外に取材拠点（支局）を多数設置し、多くのスタッフの力と情報の集結により新聞がつくられています。朝刊部数は23万部を超え、世帯普及率74%超は全国有数の高さを誇っています。

新聞社の仕事は、大きくは社会で起こっていることを取材して記事にする「記者」の仕事と、新聞をできるだけ多くの人に読んでもらうための事業を進める「営業」の仕事に分けられます。

「記者」の仕事を行うにも、様々な部局があり、それぞれの役割があります。県内の企業や経済団体、官公庁を取材し、新技術・新製品の開発、決算情報、県独自の経済施策導入といったニュースを紹介する「政経部」、事件事故や地域のイベント、話題の県民、社会問題など県内のあらゆるニュースを取材する「社会部」、読者が一目で分かるビジュアル性の高い紙面を作るため、日々さまざまなニュースを写真で追う「写真映像部」、紙面のレイアウトを行う「整理部」や、県内の教育機関で新聞を使った授業を新聞社側から支援する「NIE（Newspaper In Education）推進部」のような仕事もあります。

みなさんの手元に届く前に、様々な仕事を経て新聞は作られています。一度そのような目線を持って、徳島新聞の紙面を眺めてみてください。

どのような課題にこれから取り組んでいきますか？

近年、若年層の新聞離れが深刻になっています。徳島新聞では、子供や若者が新聞に触れる機会を増やし、新聞を読むことが楽しくなるような取り組みを行っています。

前述のNIE推進部では、実際に学校へ出向き、新聞読み方を説明する出前授業や、職場体験、切り抜き新聞コンクールなどを、子供達に提供しています。若者に向けた発信としては、毎週日曜の朝刊に掲載されている、高校生を中心とした10～20代を応援する紙面「ニチヤン」があります。今年で45年を迎えた「ニチヤン」ですが、若者が欲しいと思える情報を提供し続けるために、適切な情報や編集の方法を常に模索しています。今後も多様な世代から愛される紙面作りに向けて、必要な情報を探り続けることが、新聞社に求められています。

挑戦するプロジェクトについて

徳島新聞の記者の言葉「事実は小説よりも奇なり、という言葉がありますが、記者という仕事をしていて本当にそう思う。人に出会うということは、自分の想像を超える面白さがある。この面白さを伝えたい。」

今回のインターンシッププログラムでは、徳島新聞で若者を対象に毎週日曜日に掲載されている“ニチヤン”の紙面計画を立案、取材、執筆、編集する一連の作業に携わり、若い読者が手元に置いて読みたくなる企画にしていくために同世代の視点から調査、検証を行います。

project
若者のWantsから始める新聞づくり

【プロジェクトの目的】

若者世代の新聞離れが進んでいると言われています。しかし「新聞は読まないが、新聞社発信の情報は信用して読んでいる」といった学生の発言をよく耳にします。言葉通りに受け取ると、新聞を手に取る機会は少ないが、新聞記者が書いたニュースは信頼性が高く、読む価値のある情報だと考える学生が多いのではないでしょうか。

だとすれば、学生のWantsをしっかりと捉え、欲しい情報を深掘りして、彼らが読み応えを感じる紙面を作り、学生に届く情報拡散方法を見つけ出していくことで、学生が手元に置いて読みたくなる新聞に近づけるのではないかと考えています。

そこで、本プロジェクトでは、学生の視点から学生がどのような新聞を欲しているかを調査します。そして、調査結果をもとに紙面を作成してもらい、若者世代からどのような反応が帰ってくるかを受け止めながら、若者に響く新聞のあり方を考えてもらいます。

【具体的な活動】

学生が知りたいと思う、欲しいと思う情報を探るにはどのような方法があるでしょうか。プロジェクトでは、まずその調査方法から新聞記者と一緒に考えてもらいます。前半の課題として、様々な視点から学生の意見を収集し、整理した報告書を作成してもらいます。

後半は、整理した情報をもとに、徳島新聞の若者向けページ「ニチヤン」の企画と編集に取り組んでもらいます。みなさんでテーマを決めて取材を行い、記事を執筆して、「若者が手にしたくなる新聞紙面」としてニチヤンの1ページを完成させます。

【求められる成果】

参加するみなさんの力でニチヤンを1ページ完成させることを期待しています。もちろん、ただ完成させるだけでは不十分で、その紙面が本当に学生に受け入れられているか否かを調べ、次の課題を見つけ出すことも必要です。

ぜひ、読者の声も集めてもらいたいと思います。どのような形で声を集めるのか、どのような質問をするのかもみなさんで考えてください。最後にアンケートの結果も踏まえて、これからの新聞のあり方について発表してもらいます。

挑戦する学生へのメッセージ

徳島新聞社記者
橋本真味

記者として大切なのは、自分から面白いことを探してみようという好奇心です。観察力や見聞を広げる努力も必要です。文章力なんて、その次か、そのまた次くらいでしょうか。

ご縁あって今暮らしている場所、徳島のことをもっと知ってみませんか。そして徳島の未来をデザインしてみませんか。

ニチヤンは10代、20代の人たちに届けたい紙面です。今回のプロジェクトでは、同年代の皆さんに「記者」となってもらい、自分たちの世代が知りたい情報を考えながら、様々な取材に取り組んでもらいます。身近なようでまだ知られていないことをどんどん発信していきましょう。

徳島の課題を知るために
徳島の1000人とツナガル

人を動かし街を元気にするタウンコンテンツを考えるために とにかく人と会ってひたすら徳島の課題を取材します。

徳島大学常三島キャンパスより自転車で10分

株式会社あわわ

どのような事業を行っている企業（組織）ですか？

「徳島を元気にする!」を企業ミッションに、徳島の生活者であるファンに支えられつつ、『街の暮らしに役立つ情報&街のハッピーな情報』をみなさんに届け続けています。一人でも多くの生活者に届けるために手段であるメディアは、時代の流れとニーズと共に変化させています。 月刊誌からはじまり、ムック、フリーマガジン、WEBメディア等 様々なメディアのカタチにチャレンジしています。

主要な事業はタウンコンテンツの編集・発信です。月刊誌や別冊の編集・発行、広告営業、企業パンフレットやホームページの制作から運営まで行っています。近年は、創刊から30周年を迎えた『あわわ』をフリーマガジン『あわわfree』にリニューアル、『ASA』『050』を統合して新雑誌『Geen』を創刊、ウェブメディア「AWALOG」を創刊するなど、時代のニーズにあわせたタウンコンテンツの創出に様々な形で挑戦しています。

このような事業を進めるためには「取材・撮影」「メディア編集」「企画・制作」「グラフィックデザイン」などの仕事を行う能力が求められます。取材・撮影では、受け手に伝わる、響く記事を作成するため、スタッフは取材・撮影・原稿制作までの全ての工程をこなします。メディア編集では、取材・撮影で得られた情報・コンテンツを企画コンセプトに沿って校正、整理して、各メディア（月刊誌・別冊・WEB）に最適な構成に組み立てます。企画・制作では、月刊誌などの特集はもちろん、広告・パンフレット制作から販促イベントなど、“街を元気にする”企画であればカタチを問わず、立案・制作することが求められます。グラフィックデザインでは、企画・編集・制作したものを、より効果的に伝えるために文字・画像・イラストをデザインし、クオリティの高いビジュアル表現に仕上げていくことが求められます。

どのような課題にこれから取り組んでいきますか？

“街の情報”というのは、“街の魅力・価値・文化”だと考えます。街の魅力・価値・文化に感動すれば、人は動く。人が動けば街は動き、そして元気になる。その気づきと感動の場をいかに創り出していくかがまさに、私たちの使命です。そして、これからもこの街とつながり、街とともに生きるためにファンのみなさんと街の魅力・価値・文化を共有、共感し、チャレンジを続けていきます。またより豊かに、より便利に、未来ある徳島にするためにも新しい魅力・価値・文化をみなさんと共に創っていくことも、あわわの課題です。

つまりシンプルに言うと、徳島を元気に、面白くすることが課題です。徳島愛に満ちたあわわスタッフが日々街をはしり、街の人と出会い、その中で街の面白さを見つけ、それをみんなに伝えていく。さらに自ら、面白いことも作り出す。これからも、時にやんちゃに、時に真面目に、時にお洒落に、時に力強く みんなを面白がらせていきます。

挑戦するプロジェクトについて

『あわわ』の様々な業務を通じて、街とつながることを体感してもらいます。タウン誌の仕事は情報を発信することが目的ではありません。街とつながり、街とともに生きる、徳島を元気にすることが私達の目的です。徳島に住む皆さん、ぜひあわわの仕事を通じて、徳島を元気にしましょう。

project
1000人と繋がるプロジェクト

【プロジェクトの目的】

あわわの仕事は、街、そして街をつくっている様々な人とつながることで初めて価値が生まれます。ただ情報を収集・発信するだけではなく、その情報を持っている人とつながることで、より深く地域の課題を知り、解決のアイデア発見に近づくことができます。

皆さんには「あわわ」のメンバーとして、徳島のいろいろな人とつながりを作り、徳島の様々な課題を聞き取ってもらいます。

【具体的な活動】

あわわの業務を通じて、街とつながることを体感してもらいます。あわわの全ての仕事は基本的に人と出会い、関係を作っていくことから始まります。

例えば、新店や特集記事の取材、求人情報サイトの掲載店を集める営業、あわわ誌面の企画、街頭アンケートやインタビューなどなど、いずれの仕事もいろいろな人と関係を作らなければ進んで行きません。あわわのスタッフと一緒に仕事を進めていく中で、数多くの人のつながりが生まれます。

【求められる成果】

30日間で1000人とつながりましょう。さらに、つながった人に徳島の魅力と課題を聞いてみましょう。毎日の日報でつながった人から集めた魅力と課題を蓄積していきます。

1000人と出会った後には、1000個以上の徳島の魅力と課題が集まります。1000人の声を聞けば、徳島を元気に、面白くするには何をすれば良いか必ず見えてきます。

挑戦する学生へのメッセージ

あわわ代表取締役社長
岩佐乃介

『あわわ』は、こんな人を求めています。さぁ！30日間、一緒に働いてみませんか？

「仲間を信じ、助け合う人」あわわの仕事は常にチームプレー。部署を越えて協力するという社風が創業時から伝承されています。

「あいさつと笑顔を忘れない人」苦しい時にこそ、挨拶と笑顔を忘れない人が大好きです。

「変化へのチャレンジ精神をもつ人」メディア、仕事スタイルも固定概念に囚われない新しいチャレンジが必要な時代。チャレンジをしなかった後悔は、厳禁です。

「常に未来思考が出来る人」アイデア・企画には、ハッピーな未来を。計画段階では慎重に、未来のリスクも。未来の両面を俯瞰イメージできる力を求めています。

「徳島が大好きな人」“街とつながり、街とともに生きる”。スタッフ一人ひとりの徳島愛を結集し、街のみんなに愛されるメディア作りを目指しています。

プログラミングの面白さを子どもに伝えるノウハウをつくる

これからの社会で重要性が高まっていくプログラミングについて子どもが積極的に学びたくなるような方法を見つけ出します。

徳島県徳島市

株式会社QLiP

どのような事業を行っている企業（組織）ですか？

QLiPは、徳島駅前に教室のあるユニークな学習塾です。今までの学習塾とはひと味違った探究心と創造を育むワークショップ型探究講座と少人数型講座を提供することをミッションとしています。

2011年に小学校に入学した子どもたちの65%が、今はまだ存在していない職業に就くだろう。これは、アメリカの女性研究者が2011年にNYタイムズで語った言葉です。現在の教育には21世紀型の職業に対応した、21世紀型の学びのスタイルが求められています。その一つの鍵となるのがプログラミングです。

QLiP（クリップ）とは、Qはクエスト（探究）Lはロジック（論理）Iは、イシューソルビング（問題解決）、Pはプレゼンテーション（発表・表現）を意味します。これまでの詰め込み型授業ではなく、HOW（どうして）とWHY（なぜ）を学ぶ能力を大切にして、徳島の子どもたちが世界に通用する人になって欲しいと考えています。そのために、今までの学習塾（集団授業・個別指導）とはひと味違った、子供の探究心をくすぐり創造を育むワークショップ型探究講座と少人数型講座（定員2名・4名）を提供しています。また、子供達がプログラミングを学び、自ら創り上げる面白さを知ってもらうためのプログラミングスクールを開講しています。

学習塾としては、特色のある様々な講座を運営しています。例えば「ロジカルシンキング」講座。与えられた情報を論理的に整理して考える方法を身につけることで、社会に出てからも十分通用する論理的思考力を養成する講座です。「探究・創造型学習講座」は、世の中の「なぜ」を研究者になりきって探究したり、誰もが知ってる商品のアイデアをヒントに、アイデアを考えるコツを学んだり、様々な方法で創造力をつけていく講座です。

どのような課題にこれから取り組んでいきますか？

21世紀型の仕事を最先端で切り拓いているのが「プログラミング」です。世界はいま、プログラミングの重要性に大きく注目しています。

これからますますITは我々の生活に密接に関わり、プログラミングが日常に根付いてきます。その中で、子どもの頃からプログラミングを学ぶことが重視され始めています。日本でも小学校でのプログラミング教育の必修化が検討されています。

一方で、プログラミングは子どもの創造性を養うには最適のツールです。自分でプログラミングを組み立て、思い通りに動かすことは、創作活動そのものです。自ら考え、組み立て、楽しめる「プログラミング」は、特定の職業を目指した技術訓練などではなく、子どもの可能性を広げる知育玩具のようなものです。自分が創りだしたプログラミングを周りに広め、社会や人とコミットしていく。このような社会性や情操を育むツールにもなるのがプログラミングです。

このような社会の背景を受けて、QLiPは子供達へもっとプログラミングを普及し、自ら創り上げる面白さを知って欲しいと考えています。子どもがプログラミングに関心を持つようなイベントの実施や、海外の教育プログラムの導入などを図るなど、徳島で充実したプログラミング教育を提供できるように取り組みを進めていきます。

挑戦するプロジェクトについて

みなさんは「プログラミング教育」について、単にコンピュータプログラムの作り方を教わるようなイメージを持っていないでしょうか。実は「プログラムが作れるようになる」ことだけではなく、「論理的に考えを組み立て」、「順序だてて問題解決を考える」方法を学ぶことについても、教育上重視されているのです。今年の4月、文部科学省が小学校でのプログラミング教育の必修化を検討すると発表しました。社会の中でも認知され始めたこの社会課題に対して、「子どもに効果的にプログラミングを教える授業を考える」、「子どもにプログラミング教育の意義・面白さを伝える」の2点からアプローチしてもらいます。

project❶ 世界のプログラミング教育をリサーチせよ！

【プロジェクトの目的】

日本のプログラミング教育はまだ産声を上げたばかりです。いずれの教育機関も効果的な教育方法を模索しています。特に、座標や変数などの観念を教育課程の中でまだ教わっていない子どもに理解してもらう方法については、多くの指導員が頭を悩ませています。この課題について、海外の教育事例を参照しながら新しい方法を考案し、QLiPの教室で実践しながら検証を進めることで、効果的な教育プログラムを開発します。

【具体的な活動】

海外のプログラミング教育の事例をリサーチし、それを参照しながら授業を設計します。授業はQLiPの講師が行いますが、みなさんには授業のアシスタントとして参加してもらい、受講する子どもの反応やアンケートなどから更なる改善点を見つけてもらいます。

【求められる成果】

① 海外での効果的な教育事例を調査し、手法や指導方法についての分析を行う。
② 分析をもとに学習する子どもにとって適切で効果的な授業を設計する。
③ 実施した授業の課題を検証し、改善した教育プログラムを提案し、報告会を行う。

project❷ 子どもに発信！プログラミングは面白い

【プロジェクトの目的】

QLiPではプログラミング教育の普及活動を行っていますが、ほとんどの子どもがゲームに興味があるにも関わらず、そこから「プログラミングを勉強したい」「自分でゲームを作ってみたい」と考える子どもは少ないのが現状です。子どもは本当に興味がないのでしょうか。無関心の背景には、意義や面白さに気がついていない、難しいと考えている、きっかけがない、など様々な理由が考えられます。このような子どもが意識していない本音（インサイト）を明確にすれば、ターゲットの絞り込みなど、今後の事業を展開していくうえでの大きな情報になります。

【具体的な活動】

近隣の小中学校にアンケートを実施し、そこからプログラミングへの関心ついて意識調査を行います。次に、調査の分析をもとにグループ分け（カテゴライズ）を行い、それぞれのグループの子どもの声を聞きながら、本音を探ります。さらに、グループごとの子どもの本音に応じて、プログラミングに興味を持ってもらうためのイベントの企画と運営を行います。イベント後にはアンケートを実施し、その効果と課題点を検証してもらいます。

【求められる成果】

① 小中学生のプログラミング教育への関心について本音を聞き出す。
② 本音を元にグループ分けを行い、各グループへの有効なアプローチを設定する。
③ アプローチに沿った普及イベントを実施し、その効果と課題となる点を検証する。

挑戦する学生へのメッセージ

はじめまして。学生の皆さんには、このインターンシップの参加を通して仕事内容の理解や自らの適正把握だけでなく将来のキャリア形成に是非とも役立ててください。学校とは異なる新しい学びの機会を通して人間的にも成長し、この経験を活かし社会で活躍することを願ってやみません。

プログラミングやITに興味のある方だけではなく、教師を目指す方もぜひ参加して下さい。わかりやすく伝える方法や、授業に興味を持ってもらう方法を模索しながら授業構成を考え、実践し、フィードバックまで行うという経験は貴重です。ぜひこの機会を活用してください。チャレンジ精神のある学生の皆さんをお待ち申し上げます。

QLiP情報責任者
江本大輔

QLiP技術責任者
福島正清

5000人以上の人が集まるうだつマルシェを進化させる

14年続く地域の魅力発掘マーケットの集客力を活用しながら若い世代が地域に入ってくる土台づくりを考えます。

徳島県三好市

NPO法人マチトソラ

どのような事業を行っている企業（組織）ですか？

四国で一番広い自治体である三好市は、「マチ」と呼ばれる四国の交通の要所として栄えた阿波池田と、「ソラ」と呼ばれる祖谷や大歩危のある山間部があり、各地域で独自の建築様式の建物が残り、土地に根付いた暮らしが綿々と続けられてきました。しかし少子高齢化に伴い、そのような歴史ある建物が空き家となり、地域での暮らしやコミュニティが存続の危機に立たされています。

NPO法人マチトソラは、上記の課題を抱える三好市にて2012年に発足しました。三好市にある空き家や地域に残る伝統文化を活用した事業に取り組むことで、地域を盛り上げ、住民はもとより観光客等来訪者にとっても魅力あふれる地域であり、住んでみたい町づくりを目指しています。主な取り組みとして、「うだつマルシェ」、「マチトソラ芸術祭」「伝える暮らしワークショップ」、「マチソラ学校」の4つがあります。うだつマルシェは、三好市近隣の作り手のとっておきの手作りのおいしいものやすてきな雑貨が集まる一日マーケットです。三好市池田町のうだつの町並みの魅力発信と空き家の活用のために行っています。マチトソラ芸術祭は、地域資源を活用し「マチ」と「ソラ」とをアートでつなげます。三好市の古民家を舞台に、現代アートの展示やアーティスト本人によるワークショップを行うことで、そこに暮らす人の日々に新しい出会いをもたらし、訪問者にも地域の魅力を伝えます。様々な人が集うことで、次の世代をになう若者たちが地域に魅力を感じ、交流を深め、新しい可能性を作る場を創り出しています。

伝える暮らしワークショップは、収穫体験や加工体験を通して山間部の昔からの暮らしの知恵を次世代に伝え、将来の耕作放棄地の再生につなげることを目的としています。三好市の敷地の多くを占める急斜面の山間部では、蕎麦や雑穀、茶、ぜんまいなど、土地を活かした伝統的な作物が代々作られていました。また、かずら細工など、自生している植物を活用した産品も多く見られます。豊かな暮らしの知恵の残る山間部で現在も暮らす、じいやんばあやんを講師やガイドに迎え、季節ごとにワークショップを開催しています。

マチソラ学校は、過疎地域での仕事や暮らしについて多角的に関わり考える場を作る取組みです。、四国内外で地域に根差した活動をしている方が先生となり講座やワークショップを行います。四国のへそと呼ばれる交通の便のいい土地柄を活かし、四国四県の同志がゆるやかにつながりいきいきと活躍できる場にしていきます。

どのような課題にこれから取り組んでいきますか？

地域活性化、地方の魅力発掘をコンセプトに行ってきたうだつマルシェは今年で14年目を迎えます。当初の立ち上げ期と比較して人口動態も街の様相も少なからず変化してきており、うだつマルシェについて、現在の課題の解決を図る上で適切なイベントへと形を変えることが必要となっています。今後の地域の活性化、人口の定着などを視野に入れ、若い世代が地域に入ってくるための土台づくりに活用したいと考えています。

挑戦するプロジェクトについて

NPO法人マチトソラで中核となっている事業が5年前に発足した「うだつマルシェ」です。当初のコンセプトは、地域内における創業支援と地域の魅力発信でした。これまでの成果として、街の賑わいや地域資源を使った特徴的な事業などの定着の兆しが見えてきました。

これからの「うだつマルシェ」では、近年の社会状況の変化を反映させ、「若い世代が入って来やすい地域風土の土台づくり」をコンセプトに加えたいと思っています。今後さらに加速する人口動態や環境変化に対し、街の活力を生み続けるマルシェの形をみなさんと共に考えたいと思います。

project 若者を定着させるうだつマルシェを考える

【プロジェクトの目的】

三好市の高齢化率は40パーセントを超え、2010年から30年間での20歳から39歳の女性の人口減少率は77.9パーセントだと言われています。高齢化と人口減少が続き、2011年に三好市は「消滅可能性都市」に指定されてしまいました。

時を同じくして、うだつマルシェ、四国酒まつり、地域おこし協力隊などの地域活性化活動が一斉に始まりました。うだつマルシェは現在までに15回行われ、平均5000人から10000人の集客があるイベントになってきました。

今後はイベント当日の交流人口を増加させるだけではなく、人が地域に定着するきっかけとなるイベントにプログラムを改善すると共に、今後、若い世代が入ってきやすい地域風土の土台をつくりたいと思っています。このような視点から、うだつマルシェをよりよくするための事前調査、当日調査を行い、次回以降のうだつマルシェについての改善提案を行ってください。

【具体的な活動】

まず、6月下旬に行われるうだつマルシェの企画と準備に参加し、イベントの内容を把握します。その後、若い世代が地域に定着する後押しとなるようにうだつマルシェを改善するために必要な情報を収集し、改善の方針を検討します。

具体的には、県外からうだつマルシェに出展参加し、その後三好市で起業した方々の取材から、起業を後押しするために運営に求められる要件を検討します。また、地域での起業支援に関する全国の取り組み事例を調査します。7月30日のうだつマルシェ当日は、来訪者と出展者に対してアンケートと聞き取り調査を実施します。

【求められる成果】

①これまでのマルシェが若者の定着に果たした役割についての評価を行い、今後の改善点を指摘する。
②若者の定着を目的とした全国の取り組み事例の調査をもとに、三好市の状況に効果的なプログラムを提案する。
③うだつマルシェを改善していく方針と、今後のうだつマルシェで実施するプログラムを提案する。

挑戦する学生へのメッセージ

マチトソラ理事長
横山篤志

みなさんのような10代、20代の意見をイベントに取り込めることや、インターン生が地域に入り活動することで、三好市に新しい息吹が吹き込まれることになります。プロジェクトを通じてこれからのうだつマルシェや、三好市に様々な提案を行ってください。

20代での視野の広がりは大きな可能性につながります。大学生の時期に公益を考えた事業に接することで物事を俯瞰する視点を身につけ、疲弊する地域を救うために奔走した経験は、将来の学びや仕事に大きな広がりをもたらしてくれるでしょう。

三好市池田町の伝統的な商家のうだつのまちなみの中で、みなさんの積極的な挑戦をお待ちしています。

アグリビジネスを成功させる webコミュニケーションを考える

全国にいる小松島市のブランドトマト「ももりこ」の購買者と農園のコミュニケーションを取り持つホームページをデザインします。

徳島県小松島市
有限会社樫山農園

どのような事業を行っている企業（組織）ですか？

樫山農園は山々に囲まれた自然豊かな土地柄で、名水が湧き出る地としても知られている徳島県の小松島市で、フルーツトマト「ももりこ」と小松島ブランド米「泣く子もだまる米」の生産を行っています。

ももりこは10数年間栽培方法に工夫を重ねてきた非常に糖度の高いトマトです。普通のトマトの糖度は5程度、一般的なフルーツトマトは糖度8～10度という商品がほとんどの中、ももりこは糖度10～12とかなり甘い。

さらに、一般的にフルーツトマトは水を切り、塩分でストレスを与えることで旨味が増すという手法が用いられています。しかし、樫山農園では過度のストレスを与えることで、皮が硬くなり実にえぐみが出てしまわないよう、水をふんだんに使用した栽培を行っています。ももりこは甘いのに柔らかいのです。

泣く子もだまる米は、有機と生物多様性、2つの試みを取り入れた農法で作った徳島産コシヒカリです。いい お米を作るためには、前年の刈り取り直後からの手入れが必須です。樫山農園では、収穫後の稲の切れ端が次年度の稲に悪い影響を与えないように、きれいに分解させるための土壌改良を毎秋行っています。これによって稲が健康に育ち、たくさんの米が実ると同時に、美味しいお米が出来上がります。

しっかりと秋処理をした田んぼには、生物の害になる硫化水素が発生しません。ということは、ひと昔前まではたくさんいた、カエルやなどの小さな生物たちが、田んぼに帰ってくるのです。こうした小さな生物が土の中を動き回ることによって、土がトロトロの状態になり稲の成長を妨げる雑草の種が沈んで除草剤の散布が必要なくなります。

このように、できるだけ有機肥料や生物の力を借りることにより、国が定める慣行農業の基準値と比べ、化学肥料や農薬を使う割合を半分近くまで減らすことができました。特にお子様のいるご家庭では、安心してお召し上がりいただくことができると自負しています。

どのような課題にこれから取り組んでいきますか？

樫山農園はブランド農産物の開発と販売に力を入れているため、単独の農家としては多い4種類の品目の管理を行っています。また、事業を急激に拡大してきたことから、組織として経営業務ができるような仕組みを整えることが必要になっています。社長や専務が農場にいないと業務が回らないのが現状です。各事業部署を担うことができる人材を育成し、権限を移譲していくことが必要です。商品の受注業務、お客様対応、情報発信方法の整理など、販売に関わる様々な業務をwebサイトと組み合わせることで円滑化していくことも重要な課題と考えています。

挑戦するプロジェクトについて

徳島市に隣接する小松島市に農場を持つ樫山農園ではブランド農産物の開発と販売に力を入れることで、急速に業務が拡大しています。農業だけではなく、販売管理や顧客とのコミュニケーション、ブランディングや情報の発信など、取り組まなければならない会社としての課題もたくさん出てきています。今回のプロジェクトではこのように急成長する6次産業の企業の課題と向き合い、webサイトの構築を通して業務を円滑化する工夫を考えていきます。

project
6次産業の企業を支えるwebサイトを検討する

【プロジェクトの目的】

これまで樫山農園の商品の販売は市場を中心に行ってきました。毎年買いに来ていただくお客様や、ご紹介、ご贈答用など、多くのお客様に好評をいただいています。

しかし近年、全国から発送依頼が増えてきました。より多くのお客様に「ももりこ」と「泣く子もだまる米」をお届けしたいと考え、インターネットでの販売を開始しました。現在、商品を販売するだけではなく、インターネットを通じてお客様とコミュニケーションする方法を模索しています。

こうした課題に対応して、樫山農園や商品を好きになってもらうための情報を発信する、より満足してもらえる商品を提供できるようになるために、お客様とのコミュニケーションを図る、等の課題に応えられるwebサイトのデザインを具体的に検討することがプロジェクトの目的です。

【具体的な活動】

樫山農園の特徴的な商品の情報を発信し、お客様と交流し、購買に結びつけるためのwebサイトのグランドデザインを行います。その際に、弊社の事務員が従来行っている広報や販売管理の仕事との関係も考える必要があります。

プロジェクトでは、まず樫山農園の従業員にヒアリングを行いながら、販売・広報業務上の課題を整理します。また、商品についての考え方や特徴を元に、webサイトで発信する内容を整理し、デザインのコンセプトを検討した企画書を作成します。さらに、可能であれば実際のwebサイト作成まで進めていきます。

【求められる成果】

webサイトに掲載する要素が全て整理され、作成に取り掛かれる状態の企画書を作成して下さい。企画書にはwebサイトの構成の他、樫山農園らしさが出る視覚的なデザインや、商品を発信するための適切な写真やコピーライト（宣伝記事）、樫山農園の従業員の取材やインタビューを編集した記事等も取りまとめ、webサイトの構築が始められる手前の段階まで詰めてもらいます。

挑戦する学生へのメッセージ

樫山農園販売責任者
樫山直樹

農業を成長産業に育てる方法は、今の社会の大きな課題になっていています。樫山農園もこれから大きく成長したいと考えていますが、webサイトの充実がそのための大きな鍵になるでしょう。

webサイトは会社の顔になりますので、みなさんには会社の企画の段階で樫山農園の経営や広報、ブランディングの方針など、経営に関する様々な課題に触れていただきます。企画・作成していただいたwebサイトは実際に活用したいと考えています。

みなさんと一緒に、樫山農園の成長に取り組めることを楽しみにしています。

多様な地域資源を活用した地域活性化の拠点づくり

四国で最も人口の少ない町上勝町。国内のみならず海外からも注目されている、多様な地域資源を活用した上勝町の取り組みを学びます。

徳島県上勝町
徳島大学上勝学舎

どのような事業を行っている企業（組織）ですか？

徳島大学地域創生センター上勝学舎は、徳島大学と徳島県上勝町が連携運営する中山間ビジネス創出のための人材養成拠点です。

上勝町は徳島県勝浦郡の勝浦川上流に位置する人口1,699人(2016.1.1現在)の町です。ICTシステムを活用した葉っぱビジネス「いろどり」の開発と、モノを廃棄せずにリサイクリングさせるゼロウエイストの考え方と実践、バイオマスによる低炭素社会化などで大成功をおさめ国内のみならず海外からも注目を集めています。

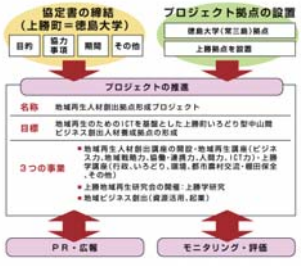
なかでもいろどりの事業は、「ICTの活用」「高齢者の出番づくり、生き甲斐づくり」「身近な地域資源（葉っぱ）の活用」を3大要素とする典型的な「目から鱗」ビジネスの創出で大きな成果をあげています。

上勝学舎では、いろどりのような、豊かな自然とコミュニティを基盤とした低炭素型でかつ力強く、持続性の高い地域社会形成を支える中山間ビジネスモデルを創ることのできる人材の養成を目的として、レジデント型拠点として次の3つの事業を行っています。

一つ目は、農山漁村地域の人材育成を図る教育です。上勝町での活動知見に着目して、ビジネス力、地域戦略力、協働・連携力、人間力、ICT力などを鍛え、徳島県下の山村や全国過疎地などで、プロデューサー、プレイヤー、コネクタの役割を担って活躍できる人材を育成しています。

二つ目は、人材育成の基礎となる研究です。農山漁村地域における「課題解決」「価値創造」の視点を持って、上勝町での地域再生活動を中心に中山間地域の活性化・再生に関する知見・資料を集積し、上勝モデルの構築、成功を導いた要因の分析・失敗学、関連する領域の研究者のネットワーク化などの展開を行っています。

三つ目は、農山漁村地域の支援連携です。上勝町には、自治体や大学などの他、NPOやグリーンツーリストなど様々な団体が情報収集や地域活動に訪れます。これらの団体の地域活動を支援するハブ施設、そして地域に滞在して行う研究の支援施設として、学舎の運営を行っています。



どのような課題にこれから取り組んでいきますか？

上勝町の循環型地域運営モデルと「いろどり」事業を教材に、上勝町の地域活動力のさらなる形成と強化に取り組み、地域人材創出、中山間地域ビジネスモデルの開発、それに基づく起業実験から、実際のビジネスの立ち上げまで実践していきます。具体的には、①地域創生人材創出、②里地・里山ビジネスモデル開発、③里地・里山ブランド開発、④情報リテラシーの形成、⑤ボランティア連携実践、5つの事業に取り組んでいきます。

挑戦するプロジェクトについて

「里地・里山ブランド開発」の課題に関わるプロジェクトとして、上勝町内に存在する地域資源のブランディングや広報戦略の作成に挑戦してもらいます。いずれのプロジェクトにもフィールドワークがあるので、コミュニケーション力や、マーケティング力が高まります。調査内容を様々な形でPRするので、デザインカや広報の力なども身につきます。これから上勝にしかない魅力を日本全国へ、世界へと発信していくためには、若い人の力が不可欠です。ぜひ、一緒に上勝プロジェクトに取り組みましょう。

project❶
集落得意技調査

【プロジェクトの目的】

地域の過疎や高齢化の課題解決につながる調査を行います。日本の中山間地域の多くでは過疎と高齢化が同時進行し、地域社会の維持が難しくなっています。このような集落を持続可能なものにしていく為には、そこに暮らす人々の知恵や力を共有し、その地域の特徴に応じた新たな地域社会の仕組みを作っていくことが必要です。自然や周辺の環境だけではなく、そこに住まう人々の知恵や力も人的資源として、地域の重要な資源なのです。人々の力と知恵をこれから活用していくために、地域の活動グループや得意技を持つ個人などを調査し、どのようなユニークな人がそこにいるか地域で共有することが、プロジェクトの目的です。

【具体的な活動】

調査票に基づいて数名のグループで集落を訪問し、地域に住まう方にインタビューを行います。インタビューでは、対象者のこれまでの暮らしの歴史（ライフヒストリー）や職業経歴、趣味の履歴などを聞き取り、その人固有の得意技を発掘していきます。

【求められる成果】

地域の個性的な人と得意技の情報をまとめた「集落得意技リーフレット」を作成します。リーフレットを地域に配布することで、地域の方が身近な人の得意技に気がつきます。さらに、リーフレットは今後の地域づくりの参考資料として様々な場で活用されます。

project❷
かやぶき民家利用促進

【プロジェクトの目的】

現在、上勝町では空き家の増加が問題になっています。来訪者が畑から作物を直接購入し、かやぶき民家で調理し、食し、ゆるやかな時間を過ごす。加えて地元集落住民も活用できるような滞在型観光と集落利用のハイブリッドな活用はできないでしょうか。プロジェクトでは、このようなスタイルの空き家活用を実現するために、かやぶき民家の拠点化及び、生産者と消費者の間に農協や直売所を挟まず各畑で直売する農場（オープンファーム）の現状や課題を明らかにし、集落住民利用型の滞在型観光を促進する方法を考えてもらいます。

【具体的な活動】

上勝町八重地区において、かやぶき民家、オープンファーム及び集落に関する資源把握、魅力度調査、マーケティング概要調査を行います。さらに、調査結果に基づいた適切な滞在型観光及び集落住利用のハイブリッド促進戦略を考えてもらいます。現時点では、来訪者に向けたマップ作成や、SNSを用いた情報発信などを想定しています。日程があえば、実際のオープンファームに参画してもらいます。

【求められる成果】

かやぶき民家が滞在型観光の拠点かつ集落利用として活用するための総合的な戦略を作り出してください。単に方針を立てるだけではなく、モデルとなるような活用事例を考え、実際に来客を招いて課題を聞き取ったり、実際にPRに行い効果を検証するなど、効果的に広報するための具体的で有効な手法を探り出してください。

project❸
棚田資源の
ブランディング

【プロジェクトの目的】
上勝町の棚田は、「日本の棚田百選（農林水産省）」「重要文化的景観（文化庁）」「重要里地・里山（環境省）」に選ばれるなど、文化・景観・生物多様性等の観点からその価値が高く評価されています。しかしながら、現在、棚田資源の活用やＰＲは十分とはいえません。そこで、棚田資源のブランディングを行い、効果的なＰＲ活動を検討・実施することで、①「棚田訪問者を増加させる」、②「棚田のオーナーになりたい人を増やす」、③「棚田の新たなファンを作る」の三点の課題に取り組みます。

ミッション①「棚田訪問者を増加させる」

【具体的な活動】
上勝町内の棚田を巡り、保全活用活動に取り組む関係者などへ聞き取り調査を行い、発信すべき魅力についての情報収集と整理を行います。並行して、情報を発信する対象や、適切な媒体の検討（SNSや観光アプリ等、広報媒体情報の整理）を行います。以上の調査結果をもとに、ブランディングの方針を検討し、適切な情報発信を行います。

【求められる成果】
実際に広報媒体を使って、棚田のPRを行ってもらいます。PRについては、閲覧数や訪問者の増加など、広報効果の事後評価の方法まで含めて検討してもらいます。

ミッション②「棚田のオーナーになりたい人を増やす」

【具体的な活動】
高齢化や後継者不足により増加する棚田の耕作放棄地。棚田オーナー制はそんな状況を打開するために、上勝町では、2005年より始められました。棚田オーナー制度は、主に都市住民に会費制のオーナーになってもらい、一定の田・畑・果樹を割り当てて、収穫物等をオーナーに持ち帰ってもらうものです。現在年間30組程の応募がありますが、まだまだオーナーを募集している棚田があります。そこで、棚田オーナーを増やすための手法を検討するために、棚田の視察や運営関係者、現在のオーナーの方々への聞き取り調査を行います。調査した情報をもとに、効果的なＰＲの仕組みを考え、実際にＰＲ活動まで行ってもらいます。

【求められる成果】
取り組みの結果、棚田オーナーは増えるでしょうか。PRした情報から問い合わせがあった件数、オーナーになった件数については、後日みなさんにお知らせします。大きな成果が出る方法を考え出してください。

ミッション③「棚田の新たなファンを作る」

【具体的な活動】
「五感で感じる棚田」。視覚としての「景観」、触覚・味覚としての「オーナー制」に加え、「棚田を流れる水の音」という聴覚に訴える「サウンドスケープ」の観点から新たな資源のブランディング化を行います。そのためにまず、集落内の棚田を巡り、水音や情景のデータを収集します。次に集めたデータをもとに、音資源のある場所を地図上にプロットした「サウンドスケープマップ」を編集します。最後に、まとめた情報をリーフレット、ＳＮＳ、動画サイトなどを通じて発信します。

【求められる成果】
棚田の音風景が、離れた地域の方にも伝わるような写真・動画・イラストなどのPR媒体を作成していただきます。実際に現地を体験した上で、最も良い方法を考え出してください。

挑戦する学生へのメッセージ

上勝学舎客員教授
澤田俊明

四国で最も人口が少ない町、上勝町は、さまざまな魅力ある活動が展開されており、国内、海外からも注目されている魅力ある町です。しかしながら、持続可能な地域づくり・集落づくりには、まだ多くの課題に直面しています。

今回のプロジェクトのフィールドは、上勝町の棚田です。現地を訪れると日本の原風景ともいえる300年前の江戸時代の風景が、眼前に広がります。この棚田風景を守りそして活用したい。学生の皆さんの積極的な参加をお待ちしています。

サテライトワーク先進地域で行う インターンシップを企画する

あたらしい働き方を知ることができるインターンシップを
徳大生みんなで考えて創り出そう。

インターンシップ 番外編

徳島大学COC+推進本部
あたらしい暮らし方働き方開発ラボ

どのような事業を行っている企業（組織）ですか？

徳島大学のCOCプラス事業は、徳島にとってこれから課題となる分野、これから成長が見込まれる分野について、学生が学ぶ環境を、徳島の企業や自治体とも連携しながら創り上げていくことを目的に活動しています。具体的には、「LED・自動車・ロボット等の次世代技術」「地域医療・福祉」「6次産業化」「地域づくり・観光・ICT」分野において、徳島の具体的な課題とともに学び、実際の地域社会において活躍できる能力を学生に身につけてもらうための大学や、地域社会のあり方を模索しています。

「あたらしい暮らし方働き方開発ラボ」（愛称「あたらぼ」）は徳島大学がCOCプラス事業を進める中で、実際に徳大生がどのような働き方を望んでいるのか、学生の生の声を聞きながら事業を進めるために、協力してくれる学生に集まってもらうことからスタートしました。現在10名程度の徳大生に手伝ってもらい、ワークショップの形式で仕事に対する思いや、将来の働き方について意見交換しながら、学生にとって必要なプログラムの検討を進めています。

どのような課題にこれから取り組んでいきますか？

今後徳島大学は、今回のような実践力養成型のインターンシップを学生に提供できる機会を増やしていきたいと考えています。その中で、できるだけ多くの徳大生の声を聞き、徳大生が自分のキャリアのために身につけたい能力が鍛えられるプログラムを開発していくことが課題であると考えています。

参加者の声を反映させた優れたサービスを開発するための手法として、「インクルーシブデザイン」という考え方があります。これは、サービスの設計や開発の初期段階からサービスの受け手を積極的に巻き込み（Include）、対話や観察から得た気づきをもとに、受け手にとって使いやすく、魅力的なサービスを生み出すデザイン手法です。

教員や企業の側からインターンシップを開発するだけではなく、学生にも企画者として参加してもらいながら、学生に成長が実感してもらえる、また成長の可能性がプログラムから伝わるインターンシップのカタチを作り出すことはできないでしょうか。

挑戦するプロジェクトについて

今回のインターンシップフェアでは、8つの企業（組織）に学生が実社会での課題に取り組みながら将来の働き方を考えるためのプログラムを提示してもらいました。みなさんの考えるキャリアに対する学びとなるプログラムは見つかりましたか。大学生活において、自分の将来のためにどのように学ぶかを考えることは大切です。提供されたプログラムの中に自分の希望する学びが見つからない場合は、自分で探す、作ることにも挑戦してみてはどうでしょう。

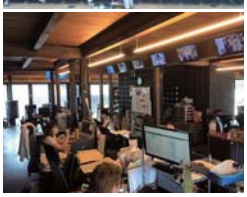
今回、番外編としてみなさんが自分たちでインターンシップを企画するプロジェクトを用意しました。対象となる地域は、サテライトワーク（大都市から離れた地域にオフィスを設け、インターネット環境を活用して大都市にいるのと同じように仕事を進める業務形態）の先進地域として着目されている徳島県の神山町です。これからの時代を先取りした、新しい暮らし方働き方を体験するインターンシップを、自分たちで企画してみませんか。

【番外編】project サテライトワークを体験するプログラムを企画しよう

【プロジェクトの目的】
情報通信技術の発展を受け、特にITなどの分野において場所や時間に拘束されず、柔軟に働くことが可能になりました。クラウドによる情報共有や勤怠管理が日常化したIT企業にとって、都会のオフィスに社員全員を集める雇用形態はもはや必須ではありません。自宅を利用したテレワークの他に、大都市から離れた地域にオフィスを設けることで、賃料を抑えつつ、豊かな自然の中で「職住接近」の働き方を実現する、サテライトワークも注目を浴びています。徳島県神山町は、徹底したITインフラ整備と豊かな自然環境で、サテライトオフィスを設ける企業の誘致に成功した地域です。

神山町にある「えんがわオフィス」は、株式会社プラットイーズのサテライトオフィスのニックネームです。本社は東京・恵比寿にあり、そちらでは約80名が働いています。えんがわオフィスでは2013年7月から業務を開始しており、現在では約20名がTV放送に関する業務や映像のアーカイブ業務を行っています。働いているのは全員徳島県民で、半分の10名ほどが神山町民です。築90年の古民家を改修した建物で屋内は最新設備、外観は全面ガラス張りの古民家に大きな緑側が付いているオフィスです。

プロジェクトでは現地の企業の方々の協力を得て、神山町におけるサテライトワークの、あたらしい暮らし方働き方を実感できるインターンシップのプログラムを考えます。



【具体的な活動】
えんがわオフィスをはじめとした、神山町の幾つかのサテライトオフィスで働く方、特に都市部から移住してきた方の動機や、暮らし方の変化も着目しながらヒアリングを行い、神山町での暮らし方働き方の特徴を調べます。調査結果をもとに、神山町での働き方を伝えるのに適したインターンシップを企画します。

【求められる成果】
神山町におけるサテライトワークの暮らし方、働き方の特徴と、その魅力が伝わるインターンシッププログラムを企画してください。さらに、企画したプログラムについて、企業の方へのプレゼンテーションや交渉を通して、実現できる案へとブラッシュアップしてください。

挑戦する学生へのメッセージ

徳島大学COC+推進本部 特別准教授
川崎克寛

物質的に豊かになった社会は、一方で複雑化していますが、「幸せになる道」を社会が教えてくれるわけではありません。自分自身で見つける力が求められています。現代社会において、何のために働くのか、どう生きるのかを、あらためて見つめ直すことが必要です。

小さな行動の積み重ねが自分を深めることになります。まずは、触れてみる、出会うための一歩を踏み出すことから挑戦してください。必ず、見たことのない自分に出会うことができるでしょう。

今回の様々なプロジェクトを通して、自らの選択で行動し、本当に大切にしたいことを大切にして、ポジティブに未来をつくる人が一人でも増えて欲しいと願っています。

実践力養成型インターンシップ中間報告会

（1）主旨・目的

実践力養成型インターンシップにおける、プロジェクトの進捗の中間段階において、これまでの取り組み状況の振り返りを行い自己評価すると共に、各プロジェクトに取り組む受入団体、学生間での情報交換を行い、目標達成に向けた課題の整理や今後必要となる取り組みの確認、意識の共有を図ることを目的として中間報告会を開催した。

（2）日時

平成 28 年 10 月 26 日（水）13：00～17：00

（3）場所

徳島大学地域創生・国際交流会館 5 階　フューチャーセンター

（4）参加者数（括弧内は情報交換会の参加者）

受入団体担当者	12 名
インターンシップ生	15 名
その他企業、団体（見学）	11 名
本学教員等	6 名
計	44 名

（5）プログラムの流れ

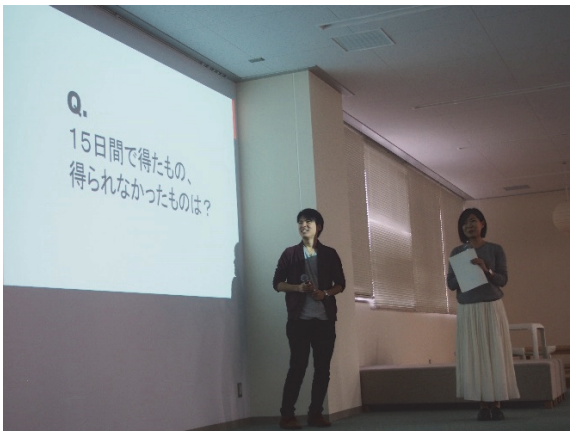
プログラム	時間	担当者	内容
開会	13：00 ～13：05	玉　真之介 （COC+推進本部推進監）	インターンシップフェア開会挨拶 COC+事業について
概要説明	13：05 ～13：20	川崎　克寛 (コーディネーター)	実践力養成型インターンシップの現状について
受入団体紹介	13：20 ～13：35	宮本　紀子(アソシエイトコーディネーター)	受入れ企業・団体の概要・プロジェクト概要等の紹介
プロジェクト 進捗報告	13：35 ～15：00	各受入担当者 +インターンシップ生	各プロジェクト進捗状況の発表
ワークショップ ①	15：15 ～16：00		受入れ担当者とインターンシップ生を入り交えての情報交換
ワークショップ ②	16：15 ～16：45		受入れ先担当者とインターンシップ生で今後の方針、ゴールとそこまでのプロセスを再確認。
決意表明	16：45 ～17：10	インターンシップ生 受入担当者	プロジェクト完遂に向けての意気込み発表

（６）プログラムの内容

ｉ）プロジェクト進捗報告

主に下記 3 点に関して受入団体の担当者とインターンシップ生から、各プロジェクト 10 分程度の進捗報告を行った。

1. これまでの取り組み内容と今後の展開について
2. 参加前（受入前）に期待していた効果・成果に対するレビュー
3. プロジェクトに参加して（受入を行って）の振り返りと気づき・学びについて



■進捗報告の様子

上勝学舎インターンシップ生（左）　㈱あわわインターンシップ生と担当者様（右）

■会場の様子

■別プロジェクトの報告を聞くインターンシップ関係者

ⅱ）ワークショップ①

複数プロジェクトの受入団体担当者とインターンシップ生を交えて、実践力養成型インターンシップを実施していく上での課題や壁、それに対する解決策・取り組み姿勢などの情報交換を行うためのディスカッションを行った。通常のインターンシップであれば 1 度のインターンシップにつき 1 社（1 人）の事例と課題・学びしか得られないが、実践力養成型インターンシップは現在 7 つの企業・団体で施行されており、他企業のインターンシップ生や受入企業同士の交流を通して、7 社の事例、受入担当者 15 名とインターンシップ生 35 名分の失敗や課題、学びを共有した。

■㈱あわわ担当者と別企業のインターンシップ生

■㈱QLiP 担当者と別企業のインターンシップ生

ⅲ）ワークショップ②

インターンシップ生は自分達が取り組んでいるプロジェクトの担当者がいるテーブルに集まり、先のワークショップで得られた成果をチームで共有した。その上で改めてプロジェクトのゴールを確認し、目標達成のためのプロセス整理、今後の動き方や方針についてチームで共有した。

■今後の進め方について確認しあう各プロジェクトチームの様子

㈱あわわ担当者とインターンシップ生（左）/ 大塚テクノ㈱担当者とインターンシップ生（右）

実践力養成型インターンシップ最終報告会

（1）主旨・目的

受入団体担当者、事業協働機関担当者、徳島大学学生及び教職員等を招き、インターンシップへの取り組み内容、成果、得られた学びを報告する最終報告会を実施した。取り組みと成果だけではなく、インターンシップでのつまずき、苦労などの振り返りと、そこで行なった工夫を報告することで、得られた学びを自覚する効果を図った。

（2）日時

平成 29 年 1 月 21 日（土）13：00～16：30

（3）場所

徳島大学常三島キャンパス　地域連携プラザ 2 階　けやきホール

（4）参加者数

受入団体（報告者）：10 名
インターンシップ生（報告者）：30 名
企業、行政関係者：37 名
大学生：24 名
その他一般参加者：4 名
徳島大学職員：25 名
計：141 名

（5）プログラムの流れ

各企業・団体ごとに、インターンシップ生と受入担当者より、各プロジェクト 15 分間の成果報告を行った。インターンシップ生からは①取り組んだミッションの内容、②インターンシップに参加した目的、③プロジェクトのプロセスと得られた学びや気づき、④成果の 4 点を報告、受入団体からは、インターンシップ実施の結果社内や社員に起こった変化と、全体を通してのレビューをいただいた。

プログラム	時間	担当者	内容・プロジェクト
開会	13：00～13：05	吉田　和文 （理事・副学長）	開会挨拶
事業説明	13：05～13：20	玉　真之介 （COC+推進本部推進監）	COC+事業について 実践力養成型インターンシップについて
プロジェクト報告①	13：20～13：40	(株)QLiP プロジェクトチーム	①プログラミング教育認知拡大イベントの企画運営 ②新規プログラミング教育の授業カリキュラムを提案

プロジェクト報告②	13：40～14：00	(SC)上勝学舎 プロジェクトチーム	①新規棚田オーナー獲得のための営業ツールを作成 ②かやぶき民家の有効的な利活用法を提案
プロジェクト報告③	14：00～14：20	(社)徳島新聞社 プロジェクトチーム	①若者が新聞を手に取るための仕組みを提案 ②徳島新聞ヤング面(ニチヤン)の企画/取材/執筆
プロジェクト報告④	14：35～14：55	(株)あわわ プロジェクトチーム	取材やイベントを通し 30 日間で 1000 人と繋がる
プロジェクト報告⑤	14：55～15：15	(NPO)マチトソラ プロジェクトチーム	メイン事業「うだつマルシェ」のリピーター率と客単価を上げる方策を提案
プロジェクト報告⑥	15：15～15：35	(有)樫山農園 プロジェクトチーム	経営理念を反映した HP のグランドデザインを提案
プロジェクト報告⑦	15：35～15：55	大塚テクノ(株) プロジェクトチーム	経営戦略に基づいた人材採用のための効果的なツールの作成
講評	15：55～16：10	山中　英生 （COC+推進本部推進監）	各プロジェクト報告に対する講評
閉会	16：10～16：15	高石　善久 （理事・副学長）	閉会挨拶

（６）報告会の様子

■COC+事業の説明をする玉推進監

■㈱QLiP インターンシップ生の成果報告の様子

■会場の様子

（7）個別プロジェクトの報告概要

【株式会社 QLiP】

プロジェクト① 世界のプログラミング教育をリサーチせよ！

■プロジェクトの内容

海外のプログラミング教育の事例をリサーチし、それをもとにカリキュラムを作成。QLiP が行っている小中学生向けのプログラミング講座でそれを実践する。

■取り組みのスケジュール

8 月	• 海外のプログラミング教育における先進事例を調査した。
9 月	• 調査をもとにインターン生が各々授業カリキュラムを考案し、担当者の前で模擬授業を行なった。
10 月	• スクールに通う子供たちに対し 2 回にわたって授業を実施した。
11 月	• 企業内にて報告会を行い、授業を行っての反省と改善点を踏まえたカリキュラムを提案した。

■プロジェクトメンバー

氏　名	学　部	学　年	備　考
北藤　恵莉	工学部	3 年生	リーダー
井上　拓磨	工学部	2 年生	
松田　悠希	理工学部	1 年生	

プロジェクト② こどもに発信！プログラミングは面白い

■プロジェクトの内容

近隣の小中学校にプログラミングについてのアンケートを実施し、そこから「ゲームは好きだがプログラミング（自分から作り上げること）に興味のない」学生のニーズを推測する。それらの学生がプログラミングに興味を持てるようなイベントを企画し実践することでさらなる普及拡大のヒントを見出す。

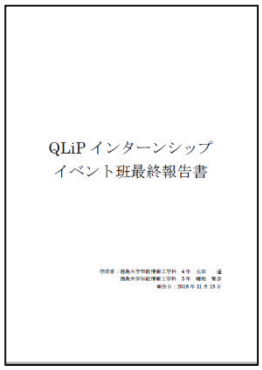
■取り組みのスケジュール

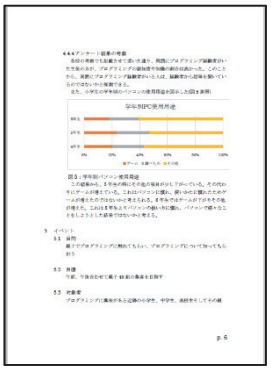
8 月	• QLiP 主催のプログラミングイベントに講師補佐として参加し、普段のイベントの様子や改善部分を観察した。
9 月	• 近隣の小中学校にアポイントメントを取り、生徒にプログラミングの認知度を調査するためのアンケートを作成した。
10 月	• アンケート結果を元に「親子参加型」のプログラミングイベントを企画した。イベント開催に向けた広報活動ならびにイベント準備を行った。
11 月	• イベントを実施し、参加者から集めたアンケートの集計などを行い、イベントの提案書として報告書をまとめて提出した。

■プロジェクトメンバー

氏　名	学　部	学　年	備　考
元田　遥	工学部	4 年生	リーダー
幡地　智彦	工学部	3 年生	

■活動の様子





■インターンシップ生コメント

- メンバー全員が自分のことで手一杯で他メンバーの活動まで考えられず、チームプレーができなかったという反省点が挙げられる。もっと情報共有をこまめに行い、お互いに意見を出し合うなどできていれば改善されていたのではないかと思う。
- 事例調査とカリキュラム考案を別々の作業として捉えており、先進事例の調査結果を授業内容に充分に活かせなかった。それぞれの作業の「目的」を頭にいれておけばこのようなことにならなかっただろうと思う。
- 実際の仕事を行うことで自分の将来像を具体的にイメージすることができた。
- 大学での専攻分野（教育工学）との関係や、プログラミングを実際の仕事として活かしていきたいとの思いからこのインターンに参加したが、実際に働いてみると思ったよりも事務作業が多かった。仕事は自分の興味があることばかりではないということを知り、やりたいことだけでなく、やらなければならないこともきちんと納得してやっていけるようにならないといけないと感じた。

■受入団体担当者コメント

- 本来の業務ではないインターンシップに時間をとられて、本業の方がおろそかになってしまうのではないかという懸念があったため、対策として、①目的を明確にして決して変更しないこと、②納期を設定することの 2 点を事前にしっかりと決めておいた。本来の業務ではないという意識から優先順位が下がり、後へ後へと時期をずらして、結果的にコストが膨大になってしまう、というリスクを回避するためのものであった。
- 子供達にとって歳の近い大学生は良いメンターと成りうるのではないかという期待に対して期待以上の効果があった。子供はもちろん、保護者からも大学生講師の評判は高かった。
- 学生ならではの観点で面白いイベントや授業ができるのではないかという期待に対しては、期待以上にはならなかった。ガントチャートでタスクをガチガチに縛ってしまったが故に、学生の自由度を奪ってしまったのではないかという反省もある。
- 社内の新人教育体制を確立させたいという期待に対しては点数をつけるなら 50 点であった。新人の教育に関してどのようなフォローが必要かは洗い出せたものの、仕事に対するモチベーションややる気の低下が起きたときのフォローアップの仕方といったところまでは踏み込めなかったのが残念であった。
- インターンシップを通しての目的として、一人でも多くの子供たちにプログラミングに触れてほしい、ということを掲げていた。インターン生の満足度、企業の達成度で言えば 100%とは言えないもののこの 1 番の目的に対しては達成できたと自負している。

【徳島大学地域創生センター　上勝学舎（サテライトキャンパス)】

プロジェクト①　新規棚田オーナー獲得のための営業ツールを作成せよ！（樫原地区）

■プロジェクトの内容

棚田の持ち主（地元住民）および棚田オーナー、オーナー制の運営主体である NPO 法人にヒアリングを行い、棚田紹介パンフレットを作成する。

■取り組みのスケジュール

8 月	• 本格的な調査の前に現地を事前視察するため、第 1 回現地調査を行った。
9 月	• 棚田オーナー制や文化的景観に関して地元住民にヒアリングを行うため、第 2 回現地調査を実施した。
10 月	• 引き続き地元住民へヒアリング調査（第 3 回/第 4 回現地調査）を行う中で、棚田資源を文化的景観として誇りに思いつつも、文化的景観に指定されたことによる様々な制約が地元住民の生活を圧迫しているという事実に直面した。
11 月	• 受入先と協議の結果、インターンの目的を地元住民と運営主体である NPO 法人を交えて「オーナー制のこれまでとこれから」を話し合う座談会を開催することへと変更した。
12 月～2 月	• 座談会の企画ならびに、座談会で使用する資料として、①地元住民からのヒアリング内容と新規オーナー獲得のための提案をまとめた報告書　②棚田紹介パンフレットを作成した。

■プロジェクトメンバー

氏　名	学　部	学　年	備　考
中谷　篤人	総合科学部	1 年生	
表原　宏樹	総合科学部	2 年生	

※八重地地区（プロジェクト②）のメンバーと協同でプロジェクトを進める。

プロジェクト② かやぶき民家の利活用を考える！（八重地地区）

■プロジェクトの内容

八重地集落に住む住民へのヒアリング調査などを通して、集落にあるかやぶき民家の有効的な活用方法を提案する。

■取り組みのスケジュール

8 月	• 本格的な調査の前に現地を事前視察するため、現地調査を行った。
9 月	• かやぶき民家の有効的な活用方法を探るため、地元住民へのヒアリングを行った。
10 月	• 地元住民へのヒアリングを行う中で、「集落の課題を解決するための古民家のあり方」を考察するためには、まず「集落の複雑なコミュニティと 1 人 1 人の多様なニーズを把握する」必要があることに気づく。
11 月	• 受入先と協議の結果、インターンの目的を地元住民の交友関係（コミュニティ）と 1 人 1 人の困り事を調査し、地域化偉大の解決・古民家の活用に向けた基礎調査をすることへと変更した。 • 全住民へのヒアリング調査を完遂するため、サークルの部会でプレゼンするなどして 9 名の調査協力者を集め、協力者に対し、上勝町基礎知識やヒアリングノウハウを教える講習会を企画して実施した。
12 月	• インターン生および協力者で集落の全住民一斉ヒアリング調査を実施した。
1 月～3 月	• ヒアリング調査の結果をもとに困り事をまとめるとともに交友関係をエクセル相関図としてまとめ、提出した。

■プロジェクトメンバー

氏　名	学　部	学　年	備　考
久保　文乃	工学部	3 年生	リーダー
篠原　諒子	総合科学部	3 年生	補佐
清水　杏咲	総合科学部	2 年生	

※樫原地区（プロジェクト①）のメンバーと協同でプロジェクトを進める。

■活動の様子

■インターンシップ生コメント

- 地域に入るということを実際の現場で体験できたことが大きな学びであったと同時に、個人のスキルの未熟さを痛感した。
- 地域で働くという選択肢が今までなかったが、そういう選択肢もあるということが分かり、職業選択の幅が広がった。
- ミーティングの中で、インターン生がお互いに助けられたことや備えるとよいことを意見し合う機会があった。半年間という長期間、引くに引けない現場でチームとして取り組んできたからこそ見えてきたそれぞれの個性があった。他者から客観的に見た「自分」を教えてもらうことで、今まで向き合うことのなかった「自分」というもの向き合う機会となった。

■受入団体担当者コメント

- インターンシップ受入にあたり、インターン生を「学生」ではなく上勝学舎の「社員」として扱ってほしいということを聞かされていたが、自分自身も地域おこし協力隊として社会に出たばかりで、上司としての自覚やスキルが備わっていない状況であった。
- 何度も事業の目的を見失うこともあり、学生にも不安な想いをさせてしまったことと思う。しかし、そんな中でも学生たちが頑張り、自分１人では集められないような自分には話してくれないような地元集落の人たちの声を集めることができたのはよかったと思う。
- 人の上に立つことの難しさを知り、その分自分自身も成長できたと思う。
- 今回のインターンシップでは本当に様々な視点から多様な意見が出てきた。意見が多様化することで、インターンの目的が最初のものからどんどん変わっていってしまうこともあった。似たようなことは学舎がテーマの１つとしている『持続可能な集落再生』を行っていく中でも出てくる。多様な立場、考え方の人間が共同で集落再生に取り組む際、直面する問題に今回のインターン生たちがぶつかってしまった。
- 地域に入って活動していきたいと言う学生たちにとっても、大きな成長になったのではないかと思う。

【一般社団法人徳島新聞社】

プロジェクト　Wants から始める新聞作り

■プロジェクトの内容

Wants から始める新聞作り

■取り組みのスケジュール

9 月	• 若者に手にとってもらう為の要素として①共感性があること、②タテ（教師や親）でもヨコ（友達）でもないナナメの関係（自分の一歩先を行くロールモデルとなる人）があること、③読者と取材相手がつながる紙面であること、④インターネットのように双方向性があることの 4 つを掲げ、記事テーマ「サーフィン」　の執筆に向けた打合せを行なった。
10 月	• 県内在住のプロサーファーやサーフィン部などに対して行った取材に基づき記事を執筆した。（10 月 30 日徳島新聞朝刊に掲載）
11 月	• 第 2 弾の記事テーマ策定のための打合せを行なった結果、テーマを「夢・進路」に決定した。 • 大学生 100 人アンケートの実施や、県内在住の夢を追う若者を取材した。
12 月	• 取材に基づき記事を執筆した。（12 月 11 日徳島新聞朝刊掲載）
1～3 月	• 徳島市内の高校に通う高校生 1300 人を対象に「新聞に対する意識ならびに高校生の嗜好」を調査するアンケートを実施し、若者が手に取る新聞に関する提案をまとめプレゼンテーションを行った。

■プロジェクトメンバー

氏　名	学　部	学　年	備　考
片倉悠暉	工学部	3 年生	リーダー
大住歩	総合科学部	3 年生	補佐
松田春菜	総合科学部	3 年生	
末菅悠人	総合科学部	3 年生	
西村香穂	総合科学部	3 年生	
高江真由子	総合科学部	1 年生	

■活動の様子

■インターンシップ生コメント

- メンバー間での情報共有不足がモチベーションを低下させる要因になっていた。自分達は情報共有の本質を理解していなかった。伝える側は「決まったことを伝えればそれでいいだろう」と LINE の文面だけで終わらせていたし、聞く側も読むだけで終わらせていた。伝える側は相手の理解度を確認しながら話をするべきだし、聞く側も相手の言葉をかみくだき疑問点を確認しながら聞くべきであった。
- メンバーがミーティングに来なくなるという問題が起こった時、自分達はそのメンバーへの怒りや「なぜそんなことをしたのか」ということを考えるのにエネルギーを割いてしまった。これは徳島新聞社から「期間限定の契約社員」として扱われていることの認識が不足しており、学生気分でいたことが招いたのだと思う。社員であれば問題があっても職務の遂行を第一に考え行動するだろう。メンバーが欠けたらまずは残りのメンバー全員でそれをカバーし、成果を残すことにエネルギーを割くべきだった。

■受入団体担当者コメント

- 学生＝読者に近い年齢層の記者ということで、若者のニーズを反映した紙面ができたこと、特に夢をテーマにした 2 回目の新聞記事は社内での評価も高かった。
- 自分の担当している紙面は毎回同じチーム・同じ人間でやるわけではないので、都度メンバーは変わる。インターンということを利用して、今まで組んだことのないような人に声をかけてチームを組んでみたり、新しいことを始めてみたりできたのは社内にとっても良い効果だった。
- インターンシップの期間が、もともと長期であったのが、様々な要因もあり、かなり長期になってしまった。そんな中で、授業・アルバイト・部活動などの他の活動とのスケジュール調整が難しく、インターンシップの優先順位が下がることもあった。
- モチベーションが低下しているなと感じたときのフォローの仕方に課題を残した。

【株式会社あわわ】

プロジェクト　あわわ★繋がるプロジェクト

■プロジェクトの内容

- 『あわわ』の様々な業務を通じて街と繋がることを体感してもらう。
- 新しい店や特集記事の取材、街頭アンケートやインタビューを通じて、30 日間で 1000 人と繋がることを数字目標として取り組んでもらう。
- 繋がる中でインターン生自身が地域の課題を見つけ、解決するための企画立案を行う。

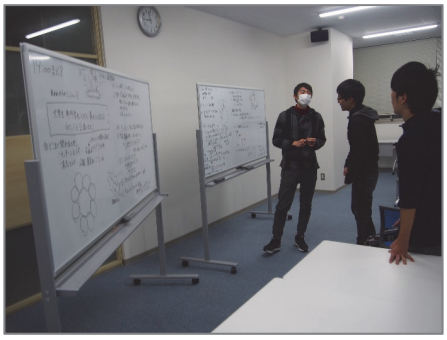
■取り組みのスケジュール

8 月～11 月	• 1000 人と繋がることを数値目標に、店頭での読者調査、街頭アンケート、取材同行などを行い、8 月から 12 月までで 810 人の人と繋がった。その中で「徳島県民は地元への愛着が強くイベントも多数開催されているが、若者（特に大学生）が地域に出ていない」という徳島の課題を発見する。
12 月	• 若者（大学生）が街に出るようになれば徳島は元気になるのではないかと考え、大学生対象のイベント「おやこん」を企画した。『お酒がなくても楽しめるおやつコンパ』がコンセプトのこの企画は、初対面の人と話すのが苦手な人、合コンに参加する勇気がない人などでも参加しやすいようにと考えられた。総勢 50 名近くの大学生が参加した。
1 月	• 「おやこん」の広報・集客、運営を行う。参加者へのヒアリングやアンケートの結果から『徳島の若者は遊びたくないわけではなく、きっかけを探している』ということが分かり、大学生と街をマッチングさせる機会の創出ができれば徳島をもっと元気にできるのではないかと提案した。

■プロジェクトメンバー

氏　名	学　部	学　年	備　考
小湊湧二郎	総合科学部	3 年生	リーダー
森岩晃平	工学部	3 年生	
前川壱成	工学部	2 年生	

■活動の様子



■インターンシップ生コメント

- あわわで働く社員の姿勢を間近で見ることで、仕事に対するモチベーションの保ち方を考える機会になった。
- 自分のモチベーションの上がり下がりは「何のためにその仕事をするのか」という仕事の意義を常に持てているかどうかであるということが分かった。
- 「おやこん」はほぼ自分達に企画運営を任せてもらえた。インターン生にここまで任せてくれる、やりたいと言ったことにチャレンジさせてくれたあわわ様に感謝。

■受入団体担当者コメント

- 受入担当だけでなく、社員全員がインターン生のことを後輩だと思って取り組めたことがよかった。
- 若手社員のモチベーションが上がったということが、社内における 1 番の成果だと思う。
- 受入側としてインターン生のサポートが不十分だった。
- 夏休み期間中はインターン生がそろって出社することができたが、授業が始まると予定をあわせるのが難しく、バラバラで活動することが多くなった。受入側としてそのあたりも予見してスケジュールを組んでいればよかった。
- 現場の色々な仕事をやってもらったため、優先順位のつけ方で学生は混乱してしまった。自分達にとっては経験則で分かるものでも、学生にとってはそうではなく、まずはそこを丁寧に教えていればよかったというのが反省点としてある。
- 1 つの成果として「おやこん」という彼らが自ら考えた企画を広報・集客して運営まで成功させたというのがある。ほぼインターン生だけで行った企画。
- 初めは積極性が足りないと思っていたインターン生だが、『任せる』ことで自発的に動くようになり、積極性も生まれたことが受け入れ側の企業としても勉強になった。
- 我々では思いつかないような学生目線の新しいアプローチに刺激を受けた。

【NPO 法人マチトソラ】

プロジェクト　調査！うだつマルシェ

■プロジェクトの内容

NPO 法人マチトソラのメイン事業である「うだつマルシェ」の実態を調査し、客単価とリピーター率向上のための提案を行う。

・うだつマルシェの現地事前調査（7 月上旬）

・うだつマルシェ当日・会場にてアンケート調査を実施（7 月 30 日）

・報告と提案（9 月下旬）

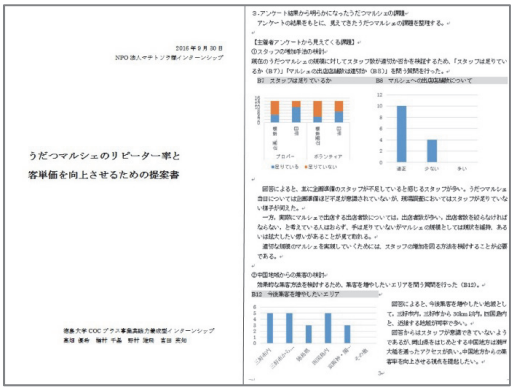
■取り組みのスケジュール

7 月	• 客単価とリピーター率向上のための提案を行うため①うだつマルシェの主催者、②うだつマルシェへの出展者、③来場者（一般客）の 3 者に対してアンケート調査を実施した。
8 月	• アンケートを集計し、うだつマルシェの課題や改善案等をまとめた提案書を作成した。
9 月	• 提案書を元にスライドを作成し、受入団体にて成果報告プレゼンテーションを実施した。
10 月～11 月	• 報告会に参加できなかった方々にも閲覧してもらえるよう、成果報告会の様子を撮影した動画を編集し web 上の動画サイトに投稿した。

■プロジェクトメンバー

氏　名	学　部	学　年	備　考
髙畑優希	総合科学部	3 年生	リーダー
楢村千晶	総合科学部	3 年生	補佐
宮田英知	総合科学部	3 年生	
野村雄飛	総合科学部	4 年生	

■活動の様子



■インターンシップ生コメント

- 街づくりを行うための経験値やマーケティングの手法を学ぶことができた。
- それ以上に、今後仕事をしていく中で、チームとしてプロジェクトを達成するためにはどんなことが必要か、というのが実体験を伴ってわかったことが最も大きな学びである。スケジュール管理の甘さや情報共有不足によるチームワークの乱れ、話し合いを進めるに連れて最初の目的は何だったかを見失ったことによる提案（成果物）のズレなど、今回の反省は大きく活きると思う。チームで何かを成し遂げることの難しさを学んだ。

■受入団体担当者コメント

- 「まちづくり」という不透明なものに対して、プロジェクトを達成させるためには何が必要なのか、というのに気づかされた面があった。
- マチトソラと事務局側との事前打合せが足りなかったと思う。責任の配分や学生にどこまで担ってもらうかなど、しっかりすり合わせを行うべきであった。

【有限会社樫山農園】

プロジェクト　あぐりビジネス　ももりこプロジェクト

■プロジェクトの内容

企業理念を反映したホームページのグランドデザインを行う。
・HP にどんな要素を盛り込むかを検討（コンテンツの洗い出し）
・農園の取材、職員へのインタビュー等を実施（HP に反映）
・ページの作りこみ（イラストレーターなどを使用）

■取り組みのスケジュール

8 月	• 調査を行うマーケティングチームと実際に HP デザインを起こしていくデザインチームに分かれて作業を進めた。 • 樫山農園の企業理念を理解するためにヒアリングおよび農場・設備見学を実施し、HP 掲載コンテンツの洗い出しを行った。
9 月	• ヒアリングや施設見学を元に HP のベース案を 5 案作成した。 • 樫山専務にプレゼンテーションを実施し、HP のベースとなるデザインが決定する。
10 月～12 月	• 従業員へのヒアリングや HP の素材写真の撮影などを行い、HP のグランドデザインが完成するも、第三者から「経営理念を全面に推しすぎて消費者を意識したデザインではなくなっている」、「チーム制で進めたために別ページと内容の重複がある」等の指摘を受けて、構成から検討し直すことを決定する。
1 月	• 第三者の指摘を元に構成し直し、完成版のデザイン案を受け入れ先に提出した。

■プロジェクトメンバー

氏　名	学　部	学　年	備　考
藤井悠司	工学部	3 年生	デザインチームリーダー
向井麻美	工学部	3 年生	補佐
松本拓真	工学部	3 年生	
岡田佳奈	工学部	3 年生	
清水佑真	工学部	3 年生	
若木宏樹	工学部	3 年生	
久島春香	総合科学部	2 年生	
小林楓	総合科学部	1 年生	

■活動の様子

■インターンシップ生コメント

- HP 作成の専門家がいないため、これで正しいのかと手探り状態で進めたことと、人数が多く仕事を適正に割り振れなかったことで、次第にメンバー内で仕事量やモチベーション、打合せでの発言量に差が出始めてしまった。そこからチーム全体でのコミュニケーションが不足し、メンバー内で不信感が生まれてしまった時期もあった。
- モチベーションに差が在ると感じたとき「自分はやるべきことをやっている」、「自分がやらなくても誰かがやってくれる」といった『自分のこと』を考えるのではなく、目標達成のために『チーム全体として何ができるか』を考えていくことが大事であると学んだ。
- 樫山専務から言われた、「自分が変われば環境が変わる」という言葉が印象に残っている。
- モチベーションの差を認識したときに、もっと自分をよくする行動をとって周りを変えていくべきだったと感じた。これは樫山専務の言っていたことをまさに体言したもので、『自分』というものを試されていた瞬間だと思う。
- 社会に出た時に同じような状況になったとき、この言葉と今回の経験を思い出し、指針としていきたいと思う。

■受入団体担当者コメント

- 徳島大学というのは今まですごく遠い存在だった。それが今回このような機会を得られて素晴らしい学生との出会いがあったのは本当に嬉しかった。
- 1 番の反省点は、インターン生の人数が多いということの大変さを認識していなかったこと。（樫山農園様は受入企業中最多の 8 名受入）
- 農業という職の性質的なものもあり QLiP さんのようにガントチャートでスケジュールをしっかり管理するということもできておらず、その場しのぎの対応になってしまったことが反省点。
- 組織化を図るにあたって社員とも理念の共有が必要になるが、インターンシップを進める中で学生に企業理念を伝える機会があり、本当の意味で「理念を共有する」ということの難しさも痛感した。その一方で、関わり続けていくことで必ず伝わるということも気づかされた。
- 社内への効果としては、作成途中のＨＰなどを起点に社員の意識が高まったことが挙げられる。社員から「専務が自由に飛べるように僕は現場をしっかり責任もってまわします」というような声も聞こえ、来年はそう言ってくれた社員をインターンに関わらせようかと考えている。

【大塚テクノ株式会社】

プロジェクト　テクノな未来を考える

■プロジェクトの内容

- 経営戦略に基づいた人材確保のためのツールを作成する。
- 具体的には①2018 年度採用に向けたパンフレットの作成、②就職・企業説明会で使用するスライドの作成の 2 点を成果物として活動してもらう。

☆進めていくための手段・手法☆

- 社内インタビュー、業界リサーチ、内定者インタビューなどを行い、仮説を立て社内の承認後、成果物の作成を行う。

■取り組みのスケジュール

8 月	• 他社の企業紹介パンフレットを取り寄せ、それぞれからパンフレットづくりに活かせる点・改良点などの洗い出しを行った。
9 月	就活生の求める情報は何か学生目線で考えた結果「企業の優れた技術や製品情報」ではなく、「自分がその企業で働く際のイメージが持てるか」であるとの観点から、働く人の声や、1 日のスケジュール、余暇の過ごし方などに焦点をあて、製品情報についてもそれをつくる「人」と関連付けて紹介するよう工夫した。 • 働く人の声を集める為に社内各部署でのインタビューや写真撮影を行い、完成したパンフレット案の印刷にあたっては業者の選定・コスト計算までを行った。
10 月	• リクルート用の企業紹介パンフレットおよび企業説明会用スライドが完成し、役員前成果報告会を実施するとともに、完成物を提出した。

■プロジェクトメンバー

氏　名	学　部	学　年	備　考
納多里奈	総合科学部	3 年生	リーダー
青山晃奈	総合科学部	2 年生	補佐
谷和紀	総合科学部	3 年生	
吉川直弥	工学部	3 年生	

■活動の様子

■インターンシップ生コメント

- スライドの案を提出した時に「学生独自のアイデアが反映されていない」、「改善はされているが根本的・革新的な改革はできていない」とやり直しを指示され、悔しさや「このままではプロジェクトが成功しない」という追いつめられた気持ちになった。そこで 1 日リフレッシュ期間をおき、メンバー各々が今後どうするかを考えてくるようにした結果、意地でも認められるスライドを作ってやる、という風に気持ちに変化が生じた。
- 個々人にタスクを持たせ、責任感を持たせて仕事を行ったので、スムーズに作業が進んだ。具体的には①全員で方針を考える、②次のミーティングまでに必要なタスクを洗い出し分担する、③各自作業を行ってくる、④ミーティングの場で全員がアイデアを共有・改善する、という流れである。全員で集まれる貴重なミーティングの場をいかに有意義なものにできるかが大事だったと思う。

■受入団体担当者コメント

- 単なるインターンでは業務の負担になり、当初は受入を断ろうと思っていたが、学生を「お客様」ではなく「課題解決の戦力」として扱ってほしいと事務局から話があり、受入に踏み切った。
- 学生から出てきた「学生目線」の成果物により、今まで我々が自己満足的に採用活動をしていたと気づかされた。
- インターンで実施した社員インタビューで「仕事のやりがい」などを聞かれることによって、社員が初心に立ち返り、改めて仕事への取り組み姿勢を考える機会となった。
- インターン生のフレッシュさ、熱さをみて、入社当時の気持ちを思い出す社員もいた。
- 限られた期間の中でプロジェクトリーダーとしてゴールまでたどりつかないといけないという経験をして、受入担当者である若手社員の成長になった。

（８）アンケート回答まとめ

① ご意見・ご感想について（自由記述欄より）

学生の取り組み姿勢・成長について

- 学生の成長という点ではどのプロジェクトも有効であったと思う。（企業）
- 長い社会人生活で一番ありがちな、挫折や目標を見失ったりすることを、全員で体験したと思われる上勝学舎のような PJ をもっと増やしてもいいように思う。（しっかりとフォローする必要があるが）（企業）
- 学生の取り組む姿勢を見ることができた。（企業）
- 学生のうちにいろいろ体験できてこういう体験こそ必要だと思った。（企業）
- 学生の皆さんの璐力する姿に刺激をいただいた。（企業）
- 必ずしも結果を優先するということではなく、企業の既存社員では発想できないような視点を持った学生の取り組みが理想的だと思われる。（企業）
- チームワーク、グループワークの経験が少ない中、思いの外内容の濃いプレゼン及び PJ 結果（成果）になっているように思う。学生の皆さんは自らのインターンシップを誇りに思ってよいと考える。（大学関係者）
- 学生は授業があり、経済的理由から学費も自分のアルバイトから出しているという環境の中、多くの時間を使ってインターンシップをよくぞここまで終えることができたなと思う。（大学関係者）
- この発表の目的が後輩に向けて反省点や失敗点を発表することであるとどなたかが述べていましたが、素直に反省点を発表している点は好感が持てた。（大学関係者）
- 積極的な学生が意外に多いことにも感心した。（大学関係者）

実践力養成型インターンシップの主旨・狙いについて

- 従来の「仕事を体験する」インターンシップとは違い、実践力養成型インターンシップということで、新鮮な気持ちで楽しく聴かせていただいた。（企業）
- 課題を与え、それを解決していく問題解決力のある人材を徳島に！という目的でこのインターンシップが実施されていると知り、仕事をしていく上で本当に必要なのはその力であると改めて感じた。（企業）
- 長期間ということで企業負担が大きいイメージだったが、学生の持ち味と企業の困りごとをマッチングさせ、目的を共有することができればお互いにとって大きなメリットになるのだと感じた。（企業）
- 「戦力」という言葉が出たが、それなら企業としても受入を検討しやすいと感じた。（企業）
- 数ヶ月という長期といえども短期間の中で成果や貴重な体験が生まれている。企業や団体のスタッフの支援もあると思うが、非常に成功している取り組みだと感心した。（大学関係者）
- 学生が甘やかされずに扱われたことは大変良かった。（大学関係者）
- お客様扱いしないという方針が良かったと感じた。受け入れ先の社員教育にもなっているように感じた。（大学関係者）
- ミッションがあることで、インターンシップの目的がぶれないのだと感じた。（大学関係者）

- 長期間のメリットを活かし、軌道修正を加えて学生の気付きなどできていたことは内容以上の成果が得られたのではないか。（大学関係者）

実践力養成型インターンシップの進め方について

- インターンシップに取り組む中で振り返りをどのように行うかが大切でかつ難しい問題であると感じた。（大学関係者）
- 学生へのマネジメントをどこまでやるかは難しい課題であると感じた。（大学関係者）
- 初年度のため試行錯誤に苦労された点も多々あったようだが、いずれのチームの報告も正直にそれを見つめ、反省の中に成長を感じさせる印象深いものだった。半年足らずという短い期間にできることの限界があったと思うが、この経験をぜひ次年度以降の取り組みにつなげて欲しいと思う。（大学関係者）
- 学生の実施結果、企業側の実施結果に対する PDCA が確立され、自企業へも応用できることを明確化していたこと。結集として双方が win-win だと感じられた。（大学関係者）

インターンシップ開始前の準備段階について

- 多くの報告においては、学生だから未熟であったという部分が反省点として挙げられていたが、準備段階での企業及びメンバー間でのレベルと方向性を合わせるという点が不足していたように感じられた。（企業）
- インターン生の話していた失敗点の中で「情報共有不足」、「インターン生としての自覚のなさ」が挙げられていたが、受け入れ企業としても受け入れを行う以上、何か得るものがあってインターンを完了させたいと考えているのだろう。インターン生が自覚と責任を持って参加できるように運営側がサポートを厚くしてみてはどうか。（企業）

報告会のスタイルについて

- 学生さんのスライドを使ったプレゼンは、もっと基本的な作法を尊重した方がよいと思う。（大学関係者）
- 座席指定は誰のための報告会かを意識された結果でしょうか？よいとは思わない。（大学関係者）
- 報告会ではタイムテーブルを重視、質問者数を制限すべき。（大学関係者）
- インターンに取り組む学生のモチベーションについて報告（分析）していたので大変参考になった。（大学関係者）
- 報告の方では課題を達成できたか否かと合わせて、自分たちのモチベーションを客観的に分析し、モチベーション維持の方法についても触れていたので興味深かった。（企業）
- 課題解決に対する解答が出せたのかどうかがはっきりしなかったものもあったので知りたかった。（当初の目標に対してどこまで達成できたのかを知りたかった）（大学関係者）

プロジェクトの内容について

- 企業が関わる以上はある程度の成果物を残す必要があると考える。（企業）
- 企業によって取り組み姿勢・内容に大きな差があると感じた。（企業）

- チームによってミッションの理解に差があるように感じ、改めて受け入れ側企業の苦労が見られた。（企業）
- あまりハードルを上げるとインターンシップに参加する学生が集まりにくくなるので難しい問題だと思う。（企業）

その他

- 学生の仕事に対するイメージを決める大切な取り組みなので、しっかり参考にして、当社のインターンシップに生かしたい。（企業）
- 発表を聴きながら自社の若手と重なることもあり、勉強になった。（企業）
- 企業が大学と、学生とどのように関わっていくべきなのかもっと話を聞きたかったので、企業側のスライドも見てみたい。（企業）
- 創業期の企業での受け入れも興味がある。（企業）
- 学生が大切にしている点、見落としがちな点など参考にすることができた。（企業）
- 学生側が求めていたこと、描いていたこと、またそのギャップなど学生のモチベーションを知ることができる好機となった。（企業）
- 企業の協力姿勢に驚いた。企業にとってもこの事業は目に見える利益以外のものが大きいのだろうか。（大学関係者）

② 次年度の実践力養成型インターンシップについての改善点（大学関係者自由記述欄より）

- 学生は「授業」のイメージを持っているはずなので、主体的に自ら動くプロジェクトワークの意識を始めから持たせる仕組みが大切である。
- 学生はチーム（グループ）ワークの経験がない。事前トレーニングが必要になるだろう。
- 正課になるということなので、学習上の目的、到達目標との関係でどこまで出来たのかを知りたい。
- 非常に難しい点だが、各々の取り組みの定量的評価と合わせてすべての取り組みに対しての評価手法を検討する必要があるのではないか。
- 教室や受け入れ先の学生へのサポート（マネジメント）をどこまでやるのかをはっきりさせ、またその結果を知りたい。
- 受け入れ先との調整の難しさがあると思うが、理工系や医療系学生にふさわしいインターンシップの事例があればよい。
- 受け入れ側の企業の方々の協力と労力に見合うベネフィットの確保をしっかりし、参加学生にも意識させなければ継続できないおそれがある。

③ 実践力養成型インターンシップを実施することの効果（大学関係者自由記述欄より）

- 事前の受け入れ側との講習会の取り組みなど、今後のインターンシップのロールモデルになるものと思われる。
- 学生にとっては就業体験を通じた社会勉強、大学と地元企業間では連携強化に役立つと思う。地域の活性化に役立つことを願う。
- グループワークの基本やコミュニケーションの大切さを理解している学生が増えるの、①卒

業研究と修士論文のレベルが上昇する、②社会に出た後の評価が上がる。

- 社会人として不足している点を理解しているので、外の学生へその点を伝えてくれることで学生の全体的なレベルアップにつながる。
- 学生が地域の企業を知ることができる。企業にとっては PR にもなるだろう。
- 学生の成長に大きく貢献する他、地域の事業所、コミュニティの活性化に貢献するだろう。

実践力養成型インターンシップ　修了生振り返り会

（1）主旨・目的

平成 28 年度実践力養成型インターンシップに参加した学生を対象に、インターンシップを通して得られた学びや気づき、参加前後での意識の変化等について振り返り、これをもとに今後の学生生活の課題を展望するための振り返り会を実施した。

（2）日時

平成 29 年 2 月 16 日（木）12：00～14：00

（3）場所

徳島大学地域創生・国際交流会館 5 階　フューチャーセンター

（4）参加者数（括弧内は情報交換会の参加者）

実践力養成型インターンシップ修了生　　20 名

（5）プログラムの流れ

プログラム	時間	担当者	内容
ワークショップⅠ	12：15 ～ 12：45	川崎　修良 (コーディネーター)	インターンシップ中のどのような経験が意識の変化に影響を及ぼしたのかを振り返る。
ワークショップⅡ	12：45 ～ 13：15	宮本　紀子 (サブコーディネーター)	インターンシップ中の印象に残っている経験とそのときの自分の行動や精神面を振り返る。
全体共有	13：15 ～ 13：25	宮本　紀子 (サブコーディネーター)	各グループのワーク内容を全体で共有する。
レビュー・まとめ	13：25 ～ 13：40	山中　英生 (COC+推進本部推進監)	学生のインターンシップに対する取り組みについてのレビュー。
学生感想	13：40 ～ 13：50	インターンシップ修了生	インターンシップへの取り組みやレビューを聞いての感想を全員が一言ずつ発表する。
アンケート記入	13：50 ～ 14：00	インターンシップ修了生	アンケート記入

（6）プログラムの内容

ⅰ）ワークショップⅠ　～意識の変化のきっかけを考える～

修了生に対し、インターンシップの開始時と終了時に「働き方や暮らし方に関する意識」や、「地域

で活躍するための能力についての自己評価」を調査するためのアンケートを実施した。インターンシップ前後の各自の回答の変化を参考資料として配布し、インターンシップ中のどのような経験が、働き方・暮らし方に対する意識や自己評価に影響したかを振り返り、どのような経験が意識の変化に影響を与えるきっかけとなるのかを考えるワークショップを行なった。

（学生の意見）

- インターンシップを通して、何事もその仕事を知るということは重要であると思ったので、企業で学んでから、自分で何かを創り上げていきたいと思うようになった。
- 漠然と「将来は何か仕事をしているだろう」と思っていたが、インターンシップに参加し具体的な仕事内容に触れることで「仕事をしている状態」がイメージしやすくなった。
- 地域に密着し、県外にすら出ないと思っていた職業（農業）の人も、海外で活躍していると知り、グローバルな仕事に興味が湧いた。
- インターンシップ先が耕作放棄地などの課題解決に取り組んでいたことから、地域の課題に興味をもった。
- 就職時の専門能力よりもコミュニケーション力ややる気の方が大事であると人事の方や現場の方からの声を聞けた。また企業での仕事の内容は様々であり、自分の専門分野だけの仕事をする訳ではないと気づいた。
- 徳島だけでなく、自分がどこまで社会に通用する人間なのか知りたい、視野を広げたいと思った。
- 大都市ではなくとも、人にもまれ成長することができる。いい出会いがあると分かり、地方の方が魅力的になった。
- 大都市圏にこだわる理由が、仕事ではなく都会への漠然とした憧れであったと気づいた。
- 農業についての取り組み方や想いを聞いて、実家の農業を受け継ぐことの大切さを知り、また、大都市圏で就職してたくさんのスキルを身につけ、そのスキルを活かした農業ができるのではないかと感じた。
- インターンシップで新しい考えを生み出す大変さと喜びを知り、起業に興味が湧いた。
- 徳島をより好きになり、何かしたいと思うようになった。
- インターンシップに参加して、まだ自分のスキルが新しいことを生み出すことまでは至っていないことを知った。
- インターンシップ先に出向くにも、汽車の時間やそこから現地まで送ってもらうよう相談するなど、交通の便の悪さを感じ、都心で働きたいと思うようになった。

ⅱ）ワークショップⅡ　自己評価への影響を考える

地域で活躍するための能力についての自己評価を図る下記 6 つの項目（10 段階評価）の回答結果について、自分の回答を見直し、インターンシップ前後の自己評価の変化にどのような経験が影響したか考えるワークショップを行った。

（学生の意見）

- インターンシップ先の働き方や仕事に対する想いを見たり聞いたりすることで、農業の素晴らしさや可能性を感じることができた。

- インターン先で実際に社員と同じような動きをすることで、自分が働く中で大事にしたい条件やこだわりがわかった。
- 自己のスキルが社会課題解決に取り組むまでに足りていないと気づいたので、まずはそこまで自己を成長させたい。

■ワークショップの様子

■グループ内で共有

ⅲ）ワークショップⅢ　どのような経験が変化をもたらしたのか

ワークショップ①およびワークショップ②で得られた結果をグループで話し合い、全体共有を行った。意識や自己評価に影響を及ぼす経験について、主に下記 3 点にまとめられた。

① 人との出会い
インターン生（仲間）や、働く人々（受入担当者・受入先の社員）、価値観が違う人、仕事の顧客など、新たな人々との出会いから刺激をもらい、意識が変化する。

② 挑戦する場・機会
興味のないことや自分のやったことがないことに挑戦するときに変化がある。

③ チームでミッションに取り組む
チームでミッションを解決するという経験を通して意識が変化する。
またミッション失敗に終わっても、何も残せなかったという悔しさからの意識の変化がある。

ⅳ）ワークショップⅣ　～印象に残る経験とそのときの行動・精神～

インターンシップ中のどのような経験や出来事が印象に残っており、その時に行なった行動や、その行動に臨んだ際の気持ちを振り返り、グループメンバーから「そのときの自分に対するアドバイス」を受けるワークショップを実施した。他者の意見から解釈の幅や捉え方の広がりを発見し、取り組みの中の苦労や工夫について、他者からの承認を受けると同時に他者への共感を持ってもらうことを狙いとした。

（ワークショップの流れ）

1. 修了生生各々がワークシートにモチベーショングラフを記入する。
2. 期間中、印象深かった期間を 3 つまで選び、その時何があったのかをワークシートに書きこむ。

3. ②で選んだ期間の経験や出来事について、そのときどういう行動をとっていたか、また、そのときどういう気持ちで臨んでいたかを記入する。
4. 結果をグループで共有し、メンバーから「その状態のときの自分」に対してアドバイスを受ける。

（学生の声）

どのような時にモチベーションが下がりやすいか

- 目的を見失い、どうして良いかわからない状態になったとき
- 考え方や作成物に対して大人からダメだしされたり、今までやってきたことがひっくり返ったとき
- 受入先担当者との関わりが薄いとき
- メンバー間でのコミュニケーションがうまくとれなくなったとき
- 授業やアルバイトが忙しいとき

どのような時にモチベーションが上がるか

- 目的が明確になったとき
- 自分の果たすべき役割・すべきことが分かったとき
- メンバーや受入先担当者としっかり向き合い話しができたとき

（7）インターンシップを振り返っての感想

最後に、学生からインターンシップを振り返っての感想の発表を行った。以下に意見の一部を記す。

- 終了後に活動を振り返ることで、インターンシップで得られたものは何かを明確にできた。また、今まで話すことのなかったインターン先のメンバーと話をしてアドバイスを頂き、自分のインターンの学びをより深めることができた。（樫山農園　インターンシップ修了生）
- 自分の学びはある程度認識していたが、違うプロジェクトチームの人たちと話し合う機会を持ったことで、他の人の学びも自分の学びとして吸収できた事柄がたくさんあり、各個人の学びが全体の学びとなった。自分達のチームでは人間関係は良好だったが、人数の多いチームで壁にぶつかった際に自分がどのような行動をとっていくかが大事だと気づいた。（大塚テクノ　インターンシップ修了生）
- 「インターンシップを通して得られたもの」を改めて認識しただけでなく、“反省点”が“得られたもの”に変わっていたことに気づくことができた。（マチトソラ　インターンシップ修了生）
- 講評に出てきた話で、“時間がないことの発見”という話が印象的だった。確かに自分のチームのプロジェクトも時間にひたすら追われていた。これはあまりよくないことだと思っていたが、これは良い経験なのだと考え方を変えることができた。また、時間がない中でプロジェクトを達成させるには、人を頼ること、チームでプロジェクトを達成させる、という意識が必要不可欠なのだと思った。（上勝学舎　インターンシップ修了生）
- 自分では、苦労した、大変だったという「頑張ったんだ」という主観的になっていたインターンの経験を、グラフであったり気持ちの変化であったりとスポットを当てて振り返ることで客観的にこのインターンがどうだったのかということを考えることができた。また、違う会社、プロジェクトでも根本的な部分で大変だった事というのはどこも同じだったのだということを知ることができた。（樫山農園　インターンシップ修了生）

実践力養成型インターンシップ受入団体振り返り会

（1）主旨・目的

受入団体が、インターンシップの振り返りをもとに知見を共有し、次年度のインターンシップ事業の課題について協議するための振り返り会を開催した。今年度の受入団体と次年度の受入を検討するCOC+事業関連団体が参加し、インターンシップ実施のメリットを共有すると共に、負担となった点・問題点の整理と対応作を協議した。

（2）日時

【第一部】　平成 29 年 3 月 10 日（金）16：00～18：00　振り返り座談会

【第二部】　平成 29 年 3 月 10 日（金）18：00～20：00　情報交換会

（3）場所

【第一部】　徳島大学地域創生・国際交流会館 5 階　フューチャーセンター

【第二部】　徳島大学地域創生・国際交流会館 1 階　生協食堂「Kirara」

（4）平成 28 年度インターンシップ受入企業　参加者

樫山　直樹氏（有限会社樫山農園 専務取締役）

江本　大輔氏（株式会社 QLiP 情報責任者）

門田　誠氏（一般社団法人徳島新聞社 編集委員）

阿部　真哉氏（徳島大学地域創生センター上勝学舎　上勝町地域おこし協力隊）

（5）参加者数（括弧内は情報交換会の参加者）

受入団体担当者	4 名（2 名）
平成 29 年度検討団体	7 名（6 名）
徳島大学教員	4 名（2 名）
徳島大学職員	4 名（3 名）
インターンシップ生	0 名（6 名）
計	19 名（19 名）

（6）プログラムの流れ

プログラム	時間	担当者	内容
経緯説明	16:30~16:45（15 分）	川崎　克寛(コーディネーター)	平成 28 年度実践力養成型インターンシップの流れを写真スライドを元に振り返る
本日の流れ説明	16:45~16:50（5 分）	宮本　紀子(サブコーディネーター)	本日のイベントの流れを説明

受入団体レビュー	16:50~17:05 （15 分）	受入団体 担当者	平成 28 年度受入企業担当者から、レビューをもらう。 ①受け入れたことによる効果やメリット ②受け入れにあたっての負担点
ワークショップⅠ	17:05~17:30 （25 分）	川崎　克寛 (コーディネーター)	受入に際しての課題や問題点について、今後のインターンシップをよりよくしていくためにどうすればよいのかを座談会形式で協議する。
ワークショップの取りまとめ	17:30~17:35 （5 分）	玉有　朋子氏	ワークショップⅠの内容をファシリテーショングラフィック※1 を見ながら振り返る。 ※1　「何について、どのように話しているか」参加者の認識を一致させ、発言を記録・図式化したもの。
ワークショップⅡ	17:35~18:00 （25 分）	川崎　克寛 (コーディネーター)	今回の教訓を活かし、今後インターンシップを受け入れるとして、それまでに備えておくべきことは何かペアワークを行う。
Q＆A	18:00~18:15 (15 分)	川崎　克寛 (コーディネーター)	次年度受入候補企業から今年度受入企業へのQ＆A。
レビュー	18:15~18:20 （5 分）	日下　一也 講師	日下講師より、本日のレビュー。
（情報交換会）	18:30~20:00 （90 分）		希望者のみ

（7）プログラムの内容

ⅰ）受入団体レビュー

■江本　大輔氏（株式会社 QLiP 情報責任者）

（インターンシップ受入のメリット）

- 我々では気づかないような学生ならではの視点を与えてくれたこと。
- プログラミングイベントに来てくれた親御さんと子供、双方から大学生メンターへの評価が非常に高かったこと。

（インターンシップ受入の課題）

- ガントチャートで行程管理を行ったものの、学生の授業などとの調整で思ったよりも時間がかかってしまったこと。

■門田　誠氏（一般社団法人徳島新聞社 編集委員）

（インターンシップ受入のメリット）

- 自分達もやったことのないようなことを学生自らが発案して取り組んでくれたこと。（例）高校生 1000 人アンケート

（インターンシップ受入の課題）

- 6 人受け入れて、紙面化する（商品をお客様にお出しする）という作業に負担は感じた。
- 6 人のうち 2 人が挫折し来られなくなった。その際に頭を悩ませた。

■樫山　直樹氏（有限会社樫山農園 専務取締役）

（インターンシップ受入のメリット）

- 参加してくれたインターン生から「農業のイメージがガラリと変わった」との声をもらい、これからの農業界が変わるかもしれないという期待が生まれた。

（インターンシップ受入の課題）

- 人数が多かったことで全員のスケジュールを合わせるのが大変だった。

■阿部　真哉氏（徳島大学地域創生センター上勝学舎　上勝町地域おこし協力隊）

（インターンシップ受入のメリット）

- 学生の機動力を活かした「集落内全件ヒアリング」や、「利害関係のない大学生」だからこそできる質問とその回答の収集など、自分達ではできない、「学生だからこそ」できたことがあった点。

（インターンシップ受入の課題）

- 上勝町と徳島大学の物理的な距離の問題があり、往復 4 時間かかってしまうのは時間的に負担であった。
- 時間も労力も多く割いたが、それを上回る効果があったと思う。

ⅱ）ワークショップⅠ（平成 28 年度受入企業担当者による座談会）

事前に受入団体担当者に対し行ったアンケートから出てきた次の 3 つの課題について、座談会形式で意見交換を行なった。

① スケジュールの管理と調整について
② 学生の扱い、モチベーションの低下への対応
③ プロジェクトの組み立て（インターンシップの目的設定）

意見交換要旨①：スケジュールの管理と調整について	
発言者	発　言　内　容
江本	スケジュール管理の仕方として、弊社では「ガントチャート」というものを使用しました。 この日までに工程①を終わらせる、この日までに工程②終わらせる、という形でスケジュール管理をしてはいたのですが、うまくいきませんでした。
川崎	それは何故ですか？
江本	学生の夏休みが終わって授業が始まったタイミング（10 月）で一気に学生とのスケジュール調整ができなくなってしまったんです。
川崎	学生もインターンだけではなく、授業も出なくちゃいけない、バイトもしないといけない、という状況だと思います。学生がよく「優先順位のつけ方が分からない」と言うのですが、これは優先順位の問題ではなく、『学生自身のマネジメントの問題』なのだと思います。自分が持っている力量と限られた時間の中でどれだけインターンにコミットできるか、なんですよね。
樫山	学業とバイトとインターンと様々ですが、どれも学生さんにとっては大事な活動だと思いますの

	で、きちんと両立するということもしっかりと学んでほしいと思います。実際社会に出ても似たような状況になりますよね。仕事もあるしプライベートの問題だってあるし、それを調整しながら前に進んでいかないといけないと思うので、それを学生の間に身につけるというのはすごく価値があると思います。
川崎	そうですね。僕たちもいくつもの仕事を同時並行で進めていますからね。そこは企業さんが学生に教えてあげてほしいところですね。

意見交換要旨②：学生の扱い、モチベーションの低下への対応	
発言者	発　言　内　容
川崎	配付資料の中に『インターンシップ開始後の状況別対処法』をまとめたものがあるのですが、皆さんがインターンを進めていく中で、同じような状況になったものはありますか？
樫山	リーダーの子は『目的を見失う』というのが最後までありました。こちらの与えたミッション・課題が理解できていなかったですね。僕も伝えようとしたのですが、うまく伝わらなくて・・・。
江本	うちは『主体性がなくなる』というところで、リーダーの子が自信を喪失して自分の業務範囲や成長に制限をかけてしまった、ということがありました。 2 つ動いているプロジェクトの全体リーダーだったので、バラバラに動いているメンバーをどうまとめるか、というところでかなり落ち込んで苦労しているようでした。
川崎	学生がそういう状況に陥ったとき、江本さんは何かされたりしたのですか。
江本	学生らの業務負担量が多いときの手助けなどはしていました。時間的に間に合わない、というギリギリの所で入るようにしていました。
川崎	学生から、任されたイベントのチラシ作成がどうしても間に合わないというギリギリの時に江本さんがチームメンバーに入ってくれて、すごくモチベーションが上がったという話を聞きました。これまではいつも上から自分たちを見守ってくれている、高いところにいる遠い存在だけど、その時はスッと隣まで降りてきてくれた、チームメンバーに入ってくれたように感じたと言っていましたよ。樫山さんのところはどうですか。
樫山	僕のところは、まず学生を連れて飲みにいきました。皆で言いたい事を言い合いました。僕が思う生き方の話とかもしたんですが、そこから火がついた学生もいたし、結果的にはやってよかったかなと思います。
川崎	きっかけ、という意味ですごく良かったですね。それからは樫山さんも学生と一緒になって考え

	てくれるようになって、学生の皆の顔が明らかに変わりましたよね。 徳島新聞さんも同じでした。受け入れ担当の橋本さんと一緒に取材に出ているときの学生のイキイキした顔が見ていてすごいなと思っていました。 阿部さんのところも同じで、上勝町内を一緒に歩いて 1 軒 1 軒民家を訪問しました。そのときの学生の様子を見るに、やはり受け入れ担当者と『一緒に』というところがキーポイントじゃないかと思います。 『期間限定の契約社員』として受け入れてくださいとお伝えしていましたが、もう少し深いところまで落としこめるといいですね。
樫山	そうですね。どうしても『学生さん』というイメージが抜けなかったのでどこまで言っていいか分からなかったですし、川崎さんが学生に言っているのを聞きながら、ああここまで言っていいんだなというのが体験的に分かってきた、というのがあります。単純に、社員に対してだったらすることを学生さんにもすればよかったのかなと思います。
川崎	皆さんしてくださった「入校式」というのも 1 つ大きかったのではないかと思います。今日からは社員であり、プロジェクトを共にするチームであるという自覚が芽生えるポイントになるのではないでしょうか。

意見交換要旨③：プロジェクトの組み立て（インターンシップの目的設定）	
発言者	発　言　内　容
川崎	皆さんのお話にもあったように、学生は必ず迷い、壁にぶちあたります。その時僕が学生によく言うのは、『原点に立ち返れ』　ということです。「原点って何だった？」「何のためにやっているの？」それは必ず今を突破する力になるから、と･･･。 ここで大事になってくるのが、インターンシップの原点、つまり課題と目的ですね。 課題と言っても色んな切り口のものがあると思うんですが、実践力養成型インターンシップで取り組むなら、緊急性は低いけれど重要度の高いもの、つまり経営課題や、普段やろうと思っているけれどやれていないこと、チャレンジしたいことなどといった部分から目的を定め、プロジェクトを考えていくと組みやすいです。
樫山	樫山農園の例でいうと、ちょうど家業から企業への転換期でもあり、『組織化』というのが 1 つの大きな経営課題になっていましたので、そこでプロジェクトを考えていきました。でも学生さんに「組織化してくれ」と言ってもできないですよね。だから「組織化する」という課題を学生ができるレベルまで切り出していきました。 今まで樫山農園になかった部門を作れば、そこに担当者を置いて 1 つの部署ができます。1 つできてしまえば後は水平展開で他の部署も作っていけます。そこで目をつけたのがホームページでした。

川崎	つまり、経営課題という大きなものから学生ができるものにどう切り出していくかということがポイントだったということですね。
樫山	はい。でもうちは、経営課題が分かっていたのに、プロジェクトを進める中でそれを忘れてしまっていました。ブランドデザインや理念を、と言ってしまって、経営課題を学生の前ではあまり言えなくて・・・。それでリーダーは何のためにこのホームページを作っているのか分からない、というのが最初はあったと思います。
川崎	大塚テクノさんの例を出すと、テクノさんは、これができたら私達の会社はこれができるようになる、1 つの成果物を仕上げることによって会社のネクストステップはこういう展開になる、というのをよく学生に言ってくれていました。自分たちが今日どこまで進んだのかということの確認と、ゴールまであとどれくらい、というところを見せてくれていました。

■座談会の様子

■座談会の様子

ⅲ）ワークショップⅡ（ペアワーク）

ワークショップⅠにおいて、インターンが生み出す価値や効果について受入団体からいただいた意見を元に、インターンシップの効果をより高めていくために必要な課題の整理を行ない、以下の５点を抽出した。

① プロジェクトを組む際に経営課題から抽出すること
② 抽出された課題を学生ができるレベルまで細分化しプロジェクトを組成すること
③ 社内体制やインターン生受入の体制をつくること
④ インターンシップのスケジューリングをしっかりすること
⑤ インターンシップの評価・効果を測定する指標を持つこと

この結果を踏まえ、インターンシップをより効果的に実施し、経営に資するための機会として活用するために必要な課題や工夫について、ファシリテーショングラフィックを参照しながら、参加者同士でペアになりディスカッションを行なった。

（ペアワークで出てきた意見）

■門田　誠氏（一般社団法人徳島新聞社 編集委員）

- インターンの効果や成果を明確に社内に示すことが今後に向けての最大の課題だと思っている。今年は受け入れ担当だけがインターンに関わっているような状況だったが、成果を社内に示すことが、インターンを続けていくために、あるいは充実させていくためには欠かせない要素だろうと思っている。

■阿部　真哉氏（徳島大学地域創生センター上勝学舎　上勝町地域おこし協力隊）

- 最初の受入の前にしっかり体制を整えておくべきだったと思っている。インターン生を任されたものの会社（上司）から具体的な指示は特になく、自分の判断に任されていた。COC+事務局に相談する中で、やはりここは違うな、と思って軌道修正しようとしても、すでに学生は動き出しているので全てが後手に回ってしまった。

■江本　大輔氏（株式会社 QLiP 情報責任者）

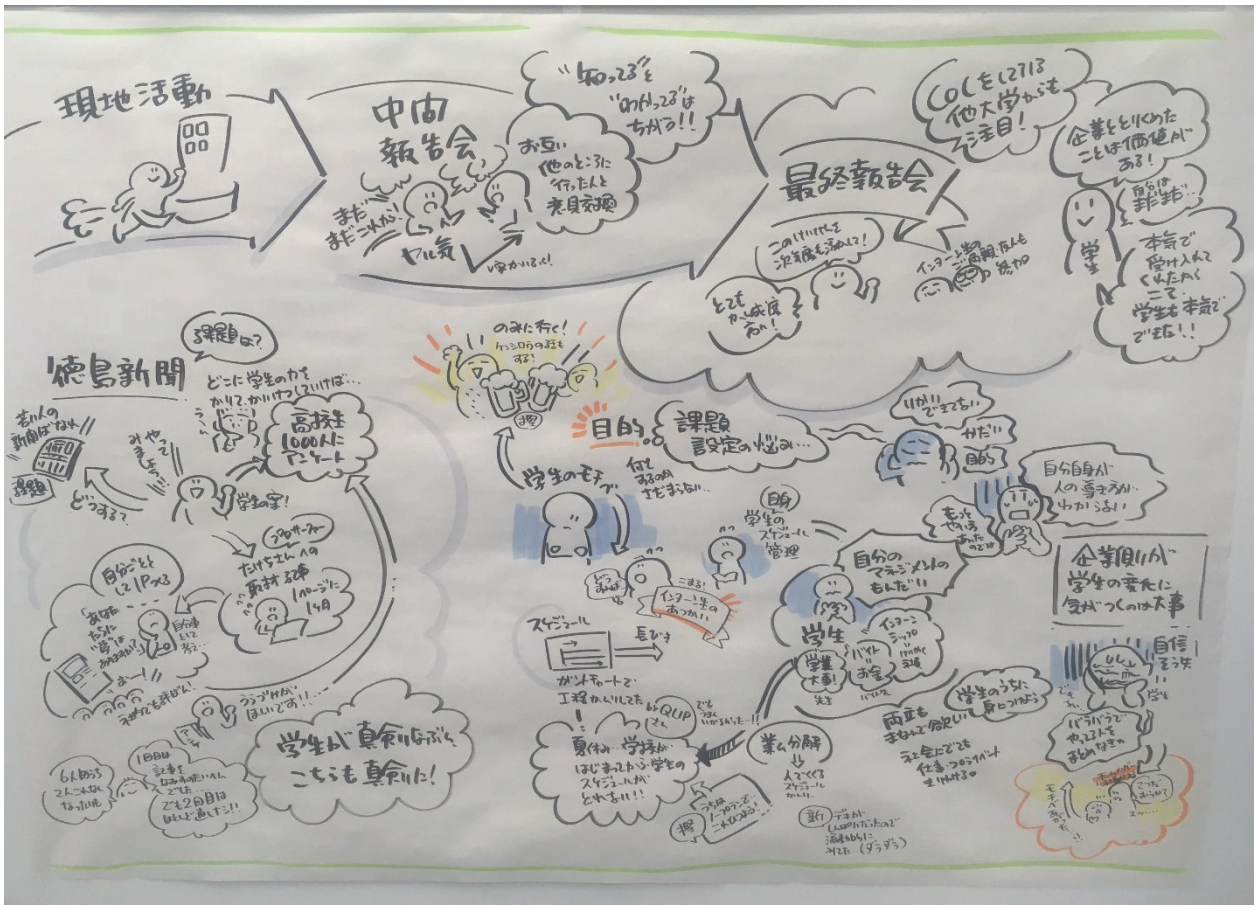
- インターン生受入の体制づくりということで、ガントチャートについて、皆さんから評価していただいたが、やった側としてはこれでよかったのか？と疑問に思う部分もある。こちらが計画してレールを敷いてしまったので、学生の独自性などが活かしきれず企業側の予測を超えなかったのではと思う。

- 樫山さんのチームが大変だったという話を聞く度に、羨ましいなと思う。カオスになった方が学生にとっても学ぶべきことが多いのではないか、と思う。カオスになる経験があれば、受け入れ側の社員教育にもつながったであろうし、新入社員が入ってきたときに起こりうる問題のテストケースになったと思う。

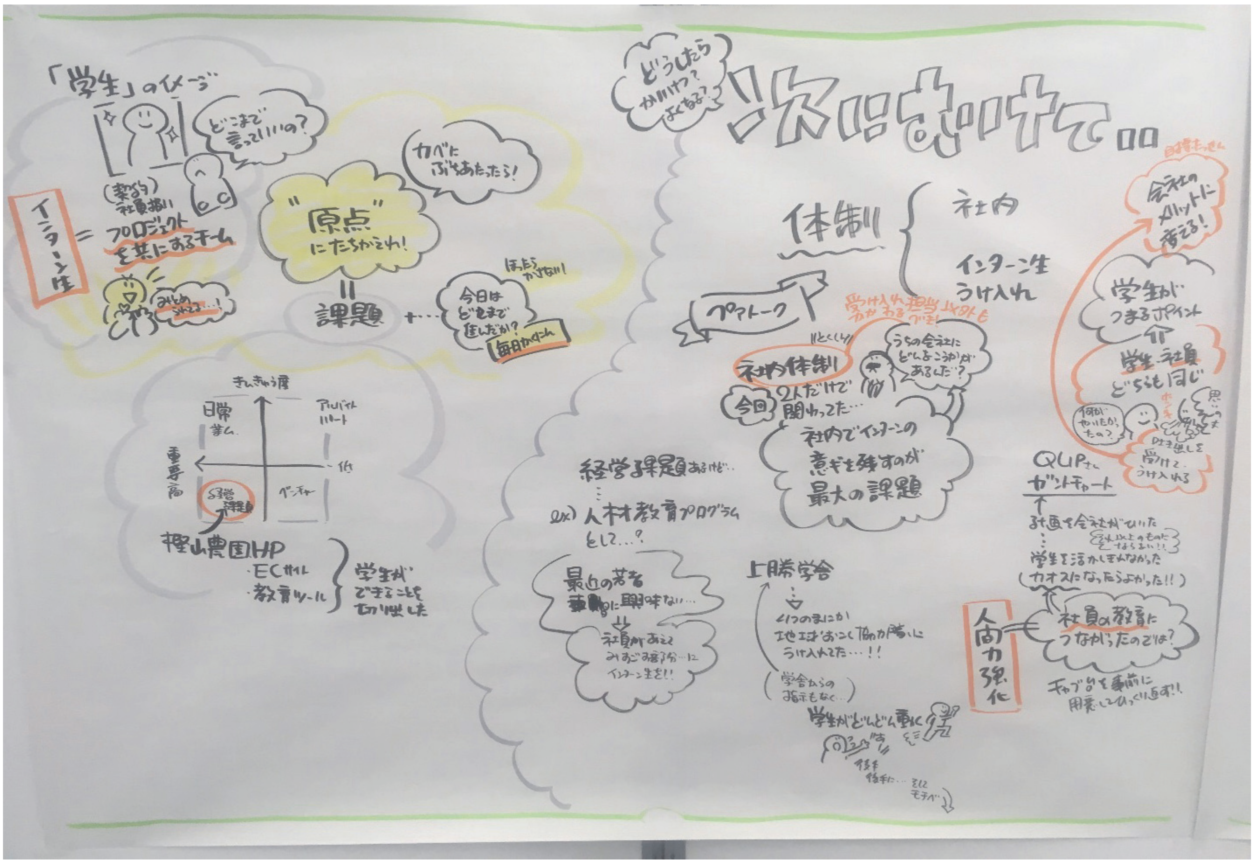
■平成 29 年度受入検討企業の方の意見

- インターン受入の際には若手スタッフを担当者としてつけたいと考えている。若手社員の教育にもなるし、プロジェクトを進める中で若手社員も必ず悩むと思う。それに対して中堅社員がアドバイスすることで中堅の教育にもつながる。学生さんが悩んだり落ち込んだりする中で、管理職の者にはその対処法を学んでほしい。
- 企業が抱えている課題に対してインターンで取り組むということなので、いわば受け入れ側も答えをもっていない状態。
- カオスになるのは当たり前かなと思う。カオスになってモチベーションが下がってしまうのも当たり前。そこを乗り越えてジャンプアップした時に課題解決につながるのではないかと思う。

（参考）作成されたファシリテーショングラフィック



解決法がみつかるな!!
カオスになってあたりまえ!!
よかった!!
変化する課題解決法
自分たちとはちがう世代
対処法
若手・中けん所の育成になる…!!
価値のある結果
社内負担軽減?
コスト増えるけどもっといいことある!!
カオスになっても
共有体制
社内でどういう位置づけでやるか
価値あるよね
人材採用のため
業務改善
新規事業開拓
社員教育
社内環境改善
CSRの一環のため
PR
インターン
就業力をきたえる!!
長期
よかった
企業
関係する人が皆マンゾクできるものを!!
動機は?
上勝
地域の課題をいっしょにかいけつしよう!
インターン
就職希望先(ミスマッチをふせぐ!!)
会社として地域・社会に貢献
QUP
大学生
メンターとしてのマッチング
ここまで負担する
方向てしか…



「学生」のイメージ
どこまで言っていいの?
(要するに)社員と一緒に
プロジェクトを共にするチーム
インターン生
カベにぶちあたったら!
"原点"にたちかえれ!
=課題
今日はどこまで進んだか?
毎日かくにん
次回に向けて…
どうしたらかけつできる?
体制
社内
インターン生うけ入れ
プチトーク
社内体制
今回2人だけで関わった…
社内でインターンの意ぎを残すのが最大の課題
会社のメリットを考える!
学生がつまるポイント
学生・社員どちらも同じ
QUPとガントチャート
経営課題あるけど…
ex)人材教育プログラムとして…?
最近の若者動向に興味ない…
上勝学舎
人間力強化
社員の教育につながったのでは?
樫山農園HP
・ECサイト
・教育ツール

四国大学・四国大学短期大学部の取り組みについて

1　概要

四国大学･四国大学短期大学部では COC+事業の一環として平成 28 年度に次の取り組みを行った。

（1）　ビジネスサークル「とくしまサイコー塾」

（2）　ビジネスプランコンテスト「とくしま学生ビジネスプラン道場」

（3）　社長の秘書体験「社長のかばんもち」

（4）　その他

2　ビジネスサークル「とくしまサイコー塾」

（1）　定例会

平成 28 年 6 月 4 日（土)、ビジネスサークル「とくしまサイコー塾」のキックオフセミナーを開催して以降、毎月第 2 木曜日（8、9、3 月を除く）に定例会を開催した。

定例会では、毎回、徳島県内の経済団体から 2 名の起業家を講師として紹介していただき、同講師による講演と参加学生によるグループディスカッションを行った。

平成 28 年度　ビジネスサークル　「とくしまサイコー塾」

	日時	場所	講師	参加	グループワークテーマ
キックオフ 第 1 回定例会	6 月 4 日 (土)	グランヴィリオホテル	社会起業家大学 学長　田中　勇一	72 名	情熱（やりたいこと・やるべきこと） お役立ち（稼ぐ力）強み（自分らしさ）
第 2 回定例会	7 月 14 日 (木)	四国大学	**阿波女あきんど塾より** 大岩　明代氏、植田　貴世子氏	23 名	女性の特徴を活かした創業のメリット・デメリット
第 3 回定例会	10 月 13 日(木)	徳島大学	**徳島県倫理法人会より** 元木　康浩氏、橋本　隆子氏	20 名	働くとは？！なんのために働く？
第 4 回定例会	11 月 10 日(木)	徳島文理大学	**徳島県中小企業家同友会より** 阿部　茂且氏、森　活也氏	32 名	企業が求める人材とは？
第 5 回定例会	12 月 8 日 (木)	四国大学	**ファイナンシャルプランナーより** 小林　多賀子	14 名	ライフプランニング
第 6 回定例会	1 月 12 日 (木)	徳島大学	**徳島青年会議所より** 近藤　洋祐氏、岡田　元一氏	60 名	学生時代に学んでおくべきこと
第 7 回定例会	2 月 9 日 (木)	徳島文理大学	**徳島商工会議所より** 杉原　正伸氏、清　浩子氏	11 名	ビジネスで大切なこと
第 8 回定例会	2 月 25 日 (土)	グランヴィリオホテル	近藤宏章氏、小林多賀子氏 玉有朋子氏、前畑ほなみ氏	24 名	未来のカタチを語ろう フューチャーセッション

（２）　フューチャーセッション（ビジネスサークル「とくしまサイコー塾」第８回定例会）

　平成 29 年２月 25 日（土）、フューチャーセッションを開催した。この催しは、ビジネスサークル「とくしまサイコー塾」の第 8 回定例会として開催した。若者が将来設計を考え、夢を叶えるためにどのような考動をすれば良いかをフューチャーセッションを通じて気づきを得た。

（３）　ビジネス教育

　平成 28 年９月８日（木）、ビジネス教育「イベントに人が集まりやすいチラシの作り方」を、同年 11 月 18 日（金）、同「イベントに人が集まりやすいチラシの配り方」をそれぞれ実施した。

　いずれも、本学のマチアソビ関連イベント『シコダイアソビ』関連のイベントであり、ビジネスサークル「とくしまサイコー塾」の派生事業として位置づけたものである。

3　ビジネスプランコンテスト「とくしま学生ビジネスプラン道場」

　夢を事業計画というカタチにして、夢をプレゼンテーションすることを学ぶ道場として開催。82 チーム／169 名の応募数から、1 次審査、2 次審査を得て、最終審査に 6 チームが選出され、プレゼンテーションを実施した。最終審査に臨んだ学生からは、「何度もあきらめかけたが最後はたくさんの方から良い評価を受けて、あきらめずに取り組んで良かった。夢をカタチにして語ることの楽しさや難しさを経験でき、将来野の活動に活かしていきたい」と感想をいただいた。

ビジネスプランコンテスト「とくしま学生ビジネスプラン道場」スケジュール

平成 28 年　7 月 17 日（日）	キックオフセミナー
平成 28 年 11 月　9 日（水）	一次審査
平成 28 年 11 月 27 日（日）	ブラッシュアップセミナー
平成 28 年 12 月 21 日（水）	二次審査
平成 29 年　1 月 13 日（金）	最終審査直前セミナー
平成 29 年　1 月 22 日（日）	最終審査

4　社長の秘書体験「社長のかばんもち」

平成 28 年 8～9 月（第 1 期）及び平成 29 年 2～3 月（第 2 期）、社長の秘書体験「社長のかばんもち」を実施した。地元の小規模事業者であっても地域で活躍する社長や企業があることを知ってもらい、社長の仕事の考えた方スピード感を一番近くで体験してもらうプログラムです。

学生からは、「雲の上のような存在だった社長が身近に感じられたし、やっぱりすごい人だなと改めて尊敬した。」「社長さんって怒ってばっかりなのかと想像していたけど、携帯電話を忘れたり社員の方に逆に怒られたりとイメージと違った人間味がある部分が垣間見えた。」「自分の会社の利益だけでなく地域のことも考えていて、自分もなれるならなってみたいと思った。」など感想がよせられた。

（1）　平成 28 年 8～9 月（第 1 期）

7 名の学生が徳島県内の小規模企業 4 社で社長秘書を体験した。

㈱パッケージ松浦	代表取締役　松浦　陽司	学生 2 名
ミッド・インターナショナル㈱	代表取締役　森田　孝夫	学生 2 名
吉野川タクシー／㈱電脳交通	代表取締役　近藤　洋祐	学生 2 名
徳島炭市場	代表　渡辺　一弘	学生 1 名

（2）　社長のかばんもち報告会

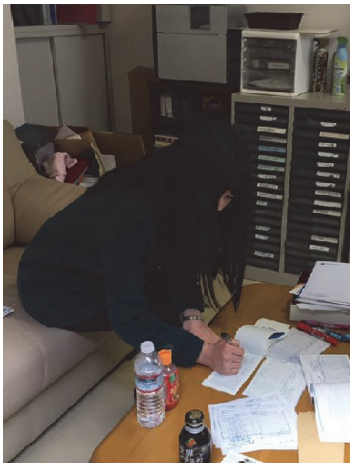
平成 28 年 10 月 25 日（火）　　四国大学経営情報館

「社長のかばんもち」の報告会が開催され、「社長のかばんもち」を行った学生の所属する疋田ゼミの学生と学生受入企業の関係者 5 名が集まった。同報告会では、学生による成果報告の後、学生受入企業 4 社の社長がコメンテーターとして学生の仕事ぶりや人柄に関して感想を述べたうえで、「社長のかばんもち」について学生と社長 4 名との間で意見交換が行われた。

（３）　平成 29 年 2～3 月（第 2 期）

3 名の学生が徳島県内の小規模企業 3 社で社長秘書を体験した。

びざん大学／チュチュチュロスカフェ	代表理事　長谷川　晋理	学生 1 名
日本茸師の会　高野キノコプラント	代表取締役　高野　康弘	学生 1 名
㈱農家ソムリエーず　藤原農園	代表取締役　藤原　俊茂	学生 1 名



5　その他活動

（１）　創業セミナーを実施

創業支援クリエーターとして、学生たちに「仕事は与えられるものでなく、仕事は創り出すこと」を伝え、自ら創造し、考動する大切さを伝えるためのセミナー「創業セミナー（地域ビジネスのすすめ)」「キャリア・プランニング」の講義を連携する高等教育機関で行った。

5 月 20 日	徳島大学　生物資源産業学部　1 年	101 名
5 月 25 日	阿南工業高等専門学校　1 年	100 名
6 月 29 日	つるぎ高校　2 年	24 名
10 月　7 日	四国大学　生活科学部　3 年	12 名
11 月　2 日	つるぎ高校　2 年	24 名
11 月 14 日	四国大学　生活科学部　1 年	76 名
11 月 30 日	四国大学　生活科学部　3 年	80 名
12 月 16 日	四国大学　生活科学部　3 年	38 名
12 月 21 日	四国大学短期大学 ビジネスコミュニケーション学部　1 年	29 名

（２）　他団体のビジネスコンテストに参加

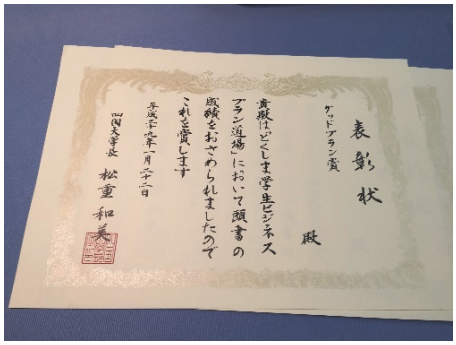
７月７日「Keio SFC-TOMODACHI Entrepreneurship Seminar」の徳島セミナーを四国大学で実施。

慶応義塾大学日吉キャンパスで開催された合宿セミナーに徳島県から２チーム４名の学生が選出され、３泊４日のビジネス合宿に参加した。優秀２チームに選出されれば、シリコンバレーへの短期留学などが経験できるが、残念ながら徳島からの２チームは選出されなかったが、全国から集まった約 80 名の学生との合宿の経験は得るものが多かった。

（３）　学生による制作物の支援

四国大学・四国大学短期大学部の COC+事業では、イベント等で使用するチラシ及びポスターのデザイン制作、表彰状への揮毫等を、本学の学生が手がけた。

制作物



（４）　COC+事業のＰＲ活動について

COC+事業の認知と理解を広めるための広報活動も様々な場所で行った。

10 月 13 日　マスコミ向けパネル展示

1 月 25 日～2 月 3 日　四国大学内　N館パネル展示

3 月 6 日～7 日　COC／COC+全国シンポジウム（高知）ポスターセッション

徳島文理大学の取り組みについて

徳島文理大学では、平成 28 年度における COC+事業の一環として次のような取り組みを行った。

1　徳島文理大学実施事業

（1）集客交流産業論（徳島文理大学公開授業）の開催

実績：「とくしまの魅力を再発見し、磨きをかけ人を呼び込むこと」をねらいとして、地域最前線で活躍中の方々から地域活性化の「鍵」を学び、地方創生を担う人材育成を目的として講師による講義や対談、質疑応答を基本に授業を進め、「成功の論理」を探った。後期授業として平成 28 年 9 月 21 日～平成 29 年 2 月 1 日の間に 15 回行われた。

成果：地方創生を担う人材育成を目的とした正課授業である。徳島文理大学学生のほか、地域活性化に取り組む社会人にも無料で開放し、講師による講義や対談、質疑応答を通じて、本学学生が、将来地域活性化に貢献するための仕事を選択するなど、地域志向の動機づけができ、大きな学習効果をもたらした。

（2）フィールドワークの実施

①　人間生活学部・建築デザイン学科

実績：人間生活学部建築デザイン学科の教員・ゼミ学生が海部郡美波町にある「徳島文理大学・美波町サテライトオフィス」において、地域住民、美波町役場担当者参加の「住宅間取り設計相談（ワークショップ）」、「古民家（空き家）改修計画の発表」（5 件）、「建築模型制作」を実施、教職員 4 名・学生 18 名が参加した。

成果：「住宅間取り設計相談」では、地域の特性などを考慮した間取りの提案など、今回のインターシップ型フィールドワークの実施を通して、建築学科での学修成果が、学生にとって将来、徳島県での就職に活かせることが認識できる機会となった。

②　文学部文化財学科（地理学）

実績：COC＋事業の一環として、徳島県那賀町木頭地区において、山村振興策や若者定住にむけた担当者との協議、住民意識調査とフィールドワークを実施した。教員 1 名が参加。

成果：山村地域の現状と課題を把握し、今後、フィールドワーク実施計画を作成し、学生が地域を認識できる教育の手法開発につなげていく。

（3）先進事例調査の実施

実績：一般総合科目「地域学」の授業プログラム開発の参考にするため、岩手県立大学を訪問。実情調査および担当者との協議等を実施。担当者 4 名が参加した。

成果：岩手県立大学では、副専門コースとして「地域学」を開講。1 年目は本学の「文理学」と

同様の全学必修科目「地域学入門」があり、400 名以上の学生を対象に、担当教員がアクティブな手法による授業を展開。その後、学生に副専門コースの選択を考えさせ、選択者は所属学科の枠を超えた地域学指定の諸科目の単位を修得し、最終の仕上げとなる授業の単位修得後、地域についての専門家であることを証明する大学独自の資格を授与している。本学の「地域学」は、初年次で修了するため、今後、専門科目との連携を図り、充実させていくことが課題である。

（４）先進事例成果発表会に出席

実績：いわてキボウスター開拓塾最終報告会（岩手県立大学）に 2 名が参加。

成果：岩手における起業家人材育成をめざした取り組みで、学生が「食」「観光」「商品開発」などをテーマに、地元企業の現場での実践を中心にした地域課題に取り組んだ 5 チームの成果発表及び講評、講演、トークセッションが行われた。本学の「地域学」のプログラム開発に参考となる事例であった。

（５）徳島文理大学地域連携センター主催：現地視察

① 徳島県上板町視察

実績：徳島県上板町との連携を進めるため 2 名が出席。上板町の担当者と協議し現地視察を行った。

成果：本学で実施している「遍路ウォーク」や地域産業体験（藍染）等の実績を踏まえ、さらに実学的な教育を実践するための協力関係を構築するための協議を行い、今後調整しながら、学生が体験授業やワークショップを行う機会を設けることとした。

② 徳島県勝浦町視察

実績：徳島県勝浦町の現状および将来展望と本学の教育を結びつけるために協議した。本学からは 9 名の教職員と勝浦町副町長、担当職員が出席。勝浦町役場での説明会と、坂本地区の現地視察を行った。

成果：現在、短期大学部食物専攻と宿泊施設「さかもと」とは既に協力関係にあり、大学の各学部・学科にも協力関係を発展させ、今後、フィールドワークを実施していく中で、「ビックひな祭り」や「鶴林寺」などの地域資源や農業を中心とする産業を学生の教育の場として活用していくための検討を行っている。

③ 徳島県神山町視察

実績：COC＋事業の一環として、徳島での新しい働き方を知るために企業のサテライトオフィスを視察。教職員 9 名が参加。神山町進出企業のサテライトオフィスを訪問、実情調査と聞き取りを行った。

成果：今回の視察を通して、地域との連携を深め、学生の教育を行う上でフィールドワークを実施する意義や地域の課題が明らかとなった。

2　協働事業

（1）「ボランティア・パスポート」の活用

実績：平成 28 年 4 月から「ボランティア」を授業科目として導入し、一般総合科目の選択科目「総合科目（ボランティア）」で、「ボランティア・パスポート」を活用した授業や取り組みを行った。

成果：シラバス・評価基準などの検討・作成を行い、また、外部講師の選定や「お試しボランティア」の実施要領等を作成し、実施した。「ボランティア・パスポート」の導入により、学生主体の積極的なボランティア活動を行う大きな動機づけとなった。

（2）COC＋高等教育プログラムに参加

実績：徳島大学主催の行事で熊本大学の視察、実情調査に 2 名が参加した。

成果：熊本大学の COC＋事業では、「地域学」関連の授業を複数のステップからなるコースとして構成しており、コース履修の学生には「熊本大学プレマイスター」の称号と海外インターンシップの特典を与えている。一般教育の再編と同じタイミングでコースを導入し、専門課程のほかに一種の副専門課程を設けて学生に付加価値を付与している。本学にける「地域学」の充実と発展的な取り組みの参考にしたい。

（3）保護者向け企業ガイダンス「徳島の魅力、徳島で働く～企業ガイダンス編～」に参加

実績：徳島大学常三島キャンパスで開催。香川キャンパス学生 8 名・理工学部教員 2 名が参加。パネルディスカッション、基調講演、企業講演、個別企業相談会を実施。

成果：県内企業の魅力や将来ビジョン、徳島県で働く・暮らすことについて学生へ周知ができた。とくに、保護者に向けた説明は企業名や規模だけではなく、業務内容のほかワークスタイル等の観点から就職先を選ぶ視点等に触れており、徳島の企業の魅力が伝達でき、県内就職の増加につながることが期待できる。

3　他機関で開催された事業

（1）「2016 徳島ビジネスチャレンジメッセ」への出展

実績：徳島市アスティ徳島で開催。理工学部および人間生活学部食物栄養学科がブースを設け、地域関連の取り組み事例を展示・紹介した。教職員・学生が参加。

成果：このメッセでは産学官が協力して、展示会をはじめ多彩なセミナーやワークショップが開催され、ビジネスに関する多くの情報やアイデアを収集、就職先を研究する学生にとって地元企業について知る場となり、刺激となった。

（2）「全国ネットワーク化事業平成 28 年度 COC／COC+全国シンポジウム」に出席

実績：高知大学で開催された COC+全国シンポジウムに 1 名が出席した。

基調講演「日本の課題－デフレ脱却と地方創生－」、基調討論「先進技術と地方創生」、ならびに事例報告が行われた。

成果：「COC＋事業」の推進担当機関が抱える課題や、課題への対応方法について示唆に富んだ多くの事例報告があり、また、全国の他地域の COC＋事業担当者との意見・情報交換ができ、事業推進の参考となった。

（３）日本経済新聞社主催・内閣府共催の「地域創生フォーラム」（日経ホール）に出席

実績：日本経済新聞社主催、内閣府共催のプログラム「官民連携・地域連携で地方の活性化を実現」に１名が出席。

成果：3 つの指定都市がめざす地方創生の取り組み事例からは、官民そして人材を送り出す大学の果たす役割が大きく、将来、地方活性化を担う学生の教育（まちづくり、ものづくり、防災面の強化、子育て・歴史文化等の面で）の重要性が再確認できた。

（４）学位授与機構シンポジウム（一橋講堂）に出席

実績：学位授与機構主催の大学改革支援・学位授与機構シンポジウム「先導的取組を通して大学改革の成果と課題を考える」に１名が出席。

成果：とくに「地方創生と大学改革」に関する、愛媛大学と四国中央市の取り組み・研究成果に関して、ものづくり技術の開発、情報発信と収集、地方自治体との連携をめざした「大学院設置」「イノベーションセンター開設」「新学部設置」の動きの中で、大学が地域活性化に大きく寄与できる事例であることを再認識した。

阿南工業高等専門学校の取り組みについて

1　概要

阿南工業高等専門学校では COC+事業の一環として、事業期間中、企業との連携事業を計画し、平成 28 年度は次の取り組みを行った。

（１）連携企業の開拓
（２）共同教育の実施
（３）OB 講話
（４）企業説明会

2　内容

（１）　連携企業の開拓

4 月～7 月　インターンシップ協力企業開拓・進路相談を行った。284 機関から受け入れ意志の表明があった。

9 月～3 月　長期インターンシップ協力企業開拓を行った。また、徳島県内に積極的に進出している企業を訪問し、サテライトオフィスや U ターン・I ターンについて意見交換を行った。

（２）　共同教育の実施

長期インターンシップの実施により、学生と企業と結びつきを強化した。

3 年次の夏期休暇 3 週間、春休み 2 週間、4 年次の夏期休暇 3 週間、春休み 2 週間、5 年次の卒業研究で共同研究を実施することによって企業との結びつきの強化をはかった。

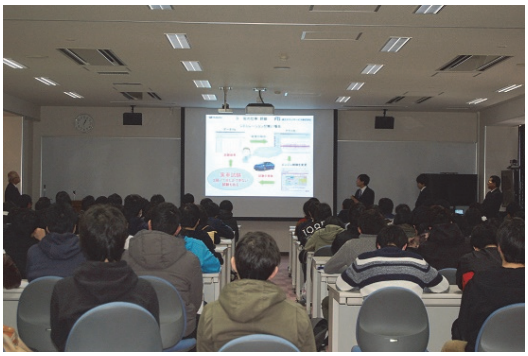
3 年次および 4 年次の夏期休暇終了後、企業関係者を招いて成果発表会（パネルセッション）および企業担当者との懇談会を実施し、意見交換を行った。長期インターンシップに 20 名の学生が参加し、5 年生は 14 名が企業と共同研究を実施した。

コーオプ教育成果発表会(パネルセッション)

（３）　OB 講話

４年生対象に、卒業生を招いてキャリアプランやライフプランについて体験談を紹介した。研究者を目指している卒業生や企業で活躍している卒業生がそれぞれの経験を通して得たものや、在学中に何をすべきかなどを紹介した。26 機関から参加があった。

また、１年生～3 年生対象にキャリア教育を４回実施し、３年生には OB 講話を実施した。



キャリア教育(OB 講話)

（４）　企業説明会

（１）で開拓した企業（インターンシップを受けていただいた企業・学生が就職した企業を含む）を招いて企業説明会を実施した。176 社の参加があった。

企業説明会

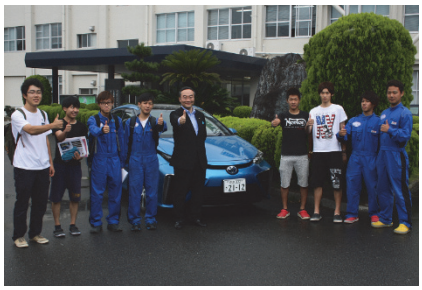
徳島工業短期大学の取り組みについて

徳島工業短期大学では、以下のような観点から、技術講演会、技術講習会及び進学説明会を開催してきた。

1　講演会の開催

就職活動を始める前の学生に対し、藤崎電機（株）創業者の藤崎稔氏を招いて県内企業の先進的かつ将来性に満ちた取り組みについての講演をしていただいた。また、これを支える県の取り組みについて徳島県知事にも講演を行っていただいた。これらは県内就職への意識を醸成するために有効であったと思われる。

一部保護者に対しても開放した企業の講演会を実施し、就職そのものに対する理解を深めて側面から支援していただけるよう努めた。



「徳島県知事講演会」後、知事と学生

「藤崎電機㈱創業者藤崎稔氏による学生向け進路講演会（四国大学との共同企画）」

「企業研究会」

2　企業による技術講習会・インターンシップ等への参加

県内企業への就職が決まっている学生には、企業の行う技術講習会やインターンシップに参加を促し、実際の自動車整備や他の業務を体験することによって、就職することへの自覚を促し、自信を持たせて意欲を高めた。

（1）[会　場・開催日]　香川いすゞ自動車㈱　平成 28 日 8 月 23 日～25 日
㈱徳島ダイハツモータース　平成 28 年 8 月 5 日～9 日（8 日は休日）
ネッツトヨタ徳島㈱　平成 28 年 8 月 6 日～10 日（8 日は休日）
ニチユＭＨＩ四国㈱　平成 28 年 8 月 22 日～26 日
兵庫トヨタ自動車㈱　平成 28 年 8 月 6 日～9 日（8 日は休日）
徳島トヨペット㈱　平成 28 年 8 月 5 日～8 日

[参加者]　就職内々定者　各 1 名受講

[内　容]　各社の社員による社会人としての基本、接客対応の基礎、自動車整備についての技術講習会、技術講演会（インターンシップ）を実施。就職予定企業の取り組みや求められるマナー、技能を知ることで企業への理解を深め、就業に対する不安感を払拭し、就職することへの意識を高めた。

（2）[会場・開催日]　徳島工業短期大学　300 教室　平成 28 年 12 月 13 日

[参加者]　徳島県内企業就職内定者　31 名受講

[内　容]　徳島県内での自動車関係企業就職希望者に対して、徳島工業短期大学の学内教員による、企業で求められるマナーについての技術講演会を実施。地元企業の取り組み

や社員に求めるマナーを知ることで、地元企業への理解を深め、就業に対する不安感を払拭した。

（3）[会場・開催日]　　徳島工業短期大学　専攻科自動車工学専攻実習室　平成 29 年 1 月 10 日
[参加者]　就職希望者　　3 名受講
[内　容]　徳島県内自動車関係企業就職希望者を対象に、徳島工業短期大学の学内教員による点検の仕方、工具の使い方など実務についての技術講習会、技術講演会を実施。実際の作業を知ることで地元企業への理解を深め、就業に対する不安を払拭し県内で就職することへの意識を高めた。

3　就業体験・オープンキャンパス等の開催

地域に根差す短期大学として、小・中・高校生に自動車技術を実感できる機会を提供した。これらの取り組みにより、自動車への関心を高め、進路の一つとして意識を持たせることで進学に繋げ、ひいては地元への定着が促されると考える。

「夏休み自由研究」

「中学生就業体験」

「オープンキャンパス」

協働事業

［協働事業］COC プラス特別セミナー「徳島の魅力、徳島で働く」の実施報告

平成 28 年 11 月 23 日に COC プラス特別セミナー「徳島の魅力、徳島で働く」を開催した。本セミナーは、平成 29 年度に実施予定のサテライト配信講義（とくしま高等教育コンソーシアムによる講座）の試行として実施した。このため、四国大学交流プラザをメイン会場、徳島大学、徳島文理大学をサテライト会場とし、セミナーの様子を映像で配信すると同時に、サテライト会場からの質問を受け付けた。

（１）実施内容

13:00　：主催者挨拶（COC+推進本部推進監 玉　真之介、四国大学学長 松重　和美）
13:10-14:40　：第一部　講演「徳島の魅力」（徳島経済研究所所長　田村　耕一氏）
14:55-16:25　：第二部　徳島で働く OB・OG によるディスカッション「徳島で働く」
瀬尾　千恵（稲次整形外科　看護師／徳島文理大学OG）
助道　永次（徳島工業短期大学　講師／徳島工業短期大学 OB）
湯浅　剛（（有）丸浅苑／徳島大学 OB）
河野　知里（（株）和コンサルタント／阿南高等専門学校 OG）
16:25　：閉会挨拶（徳島大学理事 吉田　和文）

田村氏による講演の様子

メイン会場の様子

パネルディスカッションの様子

（２）来訪者数

メイン会場（四国大学交流プラザ）　：45 名
サテライト会場①（徳島大学常三島キャンパス）　：18 名
サテライト会場②（徳島文理大学）　：　7 名

（３）来場者の意見（アンケートより抜粋）

- メイン会場に講演者が集まるのではなく、各会場に別れて講演すればいいのではないか。サテライト会場で参加したが、会場同士で積極的に討論する空気ではなかった。（徳島大学会場）
- 他の大学の方たちと意見交換ができるようなプログラムがあれば良い。（徳島大学会場）
- 徳島に来て 3 年目だが、初めて知る情報の方が多かった。まだまだ自分の知らない徳島の魅力がわかったが、市内以外のところが多く移動手段が大変だと思った。（文理大学会場）
- 卒業生の方の働いている状況を聞くことで、今後自分がどんなところで働きたいか、何を目標にすべきか学ぶことができた。他職種の話はめったに聞くことはできないので、全然違う職種の話を聞けてよかった。（文理大学会場）
- 話者のマイクを通した声を流すように改善してほしい。カメラで録音をしているからなのか教室で響いている音も拾っており、話者の声が大変聞き取りづらかった。（徳島大学会場）

（４）平成 29 年度コンソーシアム開講科目について

特別セミナーの成果を踏まえて、平成 29 年度は協働校によるコンソーシアム科目「徳島の魅力、徳島で働く」を開講する。次項に徳島大学のシラバスを示す。

平成 29 年度コンソーシアム開講科目シラバス（徳島大学版）

【授業日程】　夏休み集中講義（2017 年 8 月 21 日～24 日）

【授業題目名】　「徳島の魅力、徳島で働く」

【授業の目的】　徳島県の産業面から見た将来ビジョンと地元で働くやりがいや暮らしの楽しさ、メリットなどについて、地域の識者から学び、考え、話し合うことで、将来、就職先としての徳島県の魅力について理解を深める。

【授業の概要】　徳島県内の第一線で活躍するリーダーや県内高等教育機関の OB・OG を講師に迎えて、経験の中から生まれた確信や考え方を語ってもらうと共に、ディスカッションを行って、主体的に考える。

【キーワード】　徳島県　将来ビジョン　やりがい　暮らし

【到達目標】　①徳島の地域文化を理解し、徳島における暮らしの魅力を説明することができる。
②徳島の成長力がある産業を理解し、大学での自分の学びとつなげて考えることができる。

【授業の計画】

8/21　[午前（9:30～12:30）]導入（会場：徳島大学創成スタジオ）
第 1 回：授業の構成と講演テーマの紹介
第 2 回：「徳島県の将来ビジョン」講演者：飯泉嘉門徳島県知事（予定）
[午後（13:30～16:30）]（会場：徳島大学創成スタジオ）
第 3 回：徳島の未来を語る①：「徳島県の強みと成長産業」
第 4 回：徳島で働く①：「徳島県の雇用と徳島で活躍できる人材」

8/22　[午前（9:30～12:30）]（サテライト授業）
第 5 回：徳島の未来を語る②：「地域づくりと観光産業」
第 6 回：徳島で働く②：「地域づくりと観光産業」
[午後（13:30～16:30）]（サテライト授業）
第 7 回：徳島の未来を語る③：「地域医療と福祉の仕事」
第 8 回：徳島で働く③：「地域医療と福祉の仕事」

8/23　[午前（9:30～12:30）]（サテライト授業）
第 9 回：徳島の未来を語る④：「次世代技術関連産業の展望」
第１０回：徳島で働く④：「次世代技術関連産業の展望」
[午後（13:30～16:30）]（サテライト授業）
第 11 回：徳島の未来を語る⑤：「ICT と地域産業」
第 12 回：徳島で働く⑤：「ICT と地域産業」

8/24　[午前（9:30～12:30）]（サテライト授業）
第 13 回：徳島の未来を語る⑥：「６次産業化の取り組みと農林水産業の展望」
第 14 回：徳島で働く⑥：「６次産業化分野の取り組みと農林水産業の展望」
[午後（13:30～15:00）]総括（サテライト授業）
第 15 回：総括、グループワーク

【教科書・参考書】『徳島が好きになる本』

【成績評価方法・基準】　各回講義の終わりに実施するグループワークを踏まえて執筆する小レポートと最終レポートで評価する。

【再試験】　なし

【備考】　8 月 21 日の授業は徳島大学常三島キャンパスで実施します。各大学からの送迎バスを用意します。8 月 22、23、24 日の授業は、それぞれ別の会場で講演を行いますが、サテライト授業として所属している大学でも受講できます。

（５）広報リーフレット

大学生をはじめ、多くの若者が徳島の産業の将来や
魅力についてほとんど知らないのが現実です。
また、現状の「就活」には、企業の初任給や休日といった
雇用条件が重視され、生活していく地域との関わりや
働きがい、そして暮らし方についての情報収集が不足しています。
本セミナーは、第1部では「徳島の魅力」を、
第2部では「徳島で働く」をテーマに講演と
ディスカッションを行います。
内容
●13:00－13:10
主催者あいさつ
●13:10－14:40
第1部「徳島県の魅力を語る」
講師：田村耕一さん（徳島経済研究所 専務理事）
MC：玉真之介（徳島大学生物資源産業学部）
●14:40－14:55 休憩
●14:55－16:25
第2部「徳島で働く」
講師：勘道永次さん（徳島工業短期大学 講師（徳島工業短期大学OB））
瀬尾千恵さん（脳次整形外科 看護部（徳島文理大学OG））
湯浅 剛さん（有丸浅商（徳島大学OB））
河野智恵さん（㈱和コンサルタント（阿南工業高等専門学校OB））
MC：井上裕斗（三好市地域おこし協力隊）
●16:25－16:30 閉会あいさつ
とくしま元気印イノベーション人材育成協議会
COCプラス特別セミナー
徳島の魅力、
徳島で働く
対象：県内の大学生・高校生 参加費：無料
日時
11月23日（水・祝）13:00-16:30
場所
［メイン会場］ 四国大学交流プラザ
［サテライト会場］ 徳島大学常三島キャンパス
徳島文理大学
メイン会場での講演をサテライト会場にも配信し意見交換を行います。
参加申込先
徳島大学COCプラス推進本部事務局
（研究・社会連携部地域創生課内）
徳島市南常三島町1丁目1番地（地域創生・連携交流会館2F）
電話：088-656-9919 FAX：088-656-9880
e-mail：coc-plus@ml.tokushima-u.ac.jp
文部科学省
地(知)の拠点
講師
田村耕一
tamura koichi

［協働事業］保護者向け企業ガイダンスの実施報告

平成 28 年 12 月 18 日に保護者向けガイダンス「徳島の魅力、徳島で働く～企業ガイダンス編」を開催した。本ガイダンスは、県内大学、高専の学生・保護者を対象に、県内企業の魅力や将来ビジョン、また、 徳島県で働く・暮らすことについて周知を図り、県内就職の増加につなげることを目的とし、特に、保護者に向けて企業名や規模ではなく、業務内容やワークスタイル等の様々な観点から就職先を選ぶ視点を含めて、徳島の企業の魅力を伝達した。

（１）企画名

「徳島の魅力、徳島で働く～企業ガイダンス編」

（２）実施内容

13:00　　：主催者挨拶

13:10-13:40：[第一部]パネルディスカッション『インターンシップ生が語る企業の見方調べ方』

13:40-14:10：[第二部]基調講演『データから見る徳島の企業の強み』

14:15-15:15：[第三部]企業講演　『実は○○！徳島の企業の意外な魅力』

テーマ：①「最先端の仕事と田舎暮らしは両立できる！」（(株）プラットイーズ）

②「次世代技術関連企業では多様な人材が活躍している！」（(株）大塚テクノ）

③「農業は総合力が求められるベンチャー企業！」（(有）樫山農園）

④「地域包括ケアシステムにおける多様な薬剤師の役割」（(株)）グローバル・アシスト）

15:20-16:20：[第四部]個別企業相談会

[第一部]パネルディスカッションの様子

[第三部]企業講演の様子

[第四部]個別相談会の様子

[第四部]キャリア支援室ブースの様子

（3）来訪者数

120 人（学生 45 人、保護者 26 人、関係者 31 人、出展者 18 人）

（4）アンケート回答の抜粋

① 学校別参加者数（有効回答数：学生 44 人、保護者 16 人）

	徳島大	徳島文理大	四国大	阿南高専	県内その他	県外大学
学生	33	6	1	3	0	1（高知大）
保護者	16	0	0	0	0	0

- 学生については、徳島大学生が中心。徳島文理大、阿南高専、四国大からの参加も見られた。
- 高知大学の既卒学生（徳島在住）が 1 名参加。近隣県の大学生にもニーズがあるのではないか。
- 保護者については回答者全員が徳島大学生の保護者であると回答。

② 学部別参加者数（徳島大学のみ。有効回答数：学生 33 人、保護者 16 人）

	総合科学	医	歯	薬	理工（工）	生物資源	大学院
学生	6	0	0	7	19	1	2
保護者	2	1	0	0	13	0	0

- 学生については、理工（工）、薬、総合科学の在学生が中心。一部大学院生も見られた。
- 保護者についてはほとんどが理工（工）在学生の保護者であると回答。

③ 学年別参加者数（有効回答数：学生 44 人、保護者 16 人）

	1 年	2 年	3 年	4 年	大学院	既卒
学生	11	9	16	5	2	1
保護者	1	4	9	2	0	0

- 学生については、各学年からの広い参加が見られた。
- 保護者については 3 年生の保護者であるとの回答が半数。

④ 県内企業への関心（有効回答数：学生 34 人、保護者 19 人）

	学生	保護者
ガイダンスの参加以前より、徳島県内へ就職を考えていた。	16	2
ガイダンスの参加以前より、就職先として選択肢に考えていた。	12	12
ガイダンスに参加して、就職先として選択肢に考えるようになった。	3	5
就職先としてはあまり考えていない。	3	0

- 参加者の大半は、以前より徳島県内の就職を視野に入れている。
- ガイダンスに参加したことで県内企業を就職先として選択肢に考えるようになったとの回答が 8 件（学生 3、保護者 5）見られる。プログラムの内容として一定の効果があったと考えられる。

関連する参加者の声（自由回答項目より抜粋）

- 具体的な資料やデータなどから、徳島の今を知ることが出来た。（学生／阿南高専機械工学科 4 年生）
- データの観点から徳島を考察した話を初めて聞いたため、非常に良かった。大塚グループ、日亜化学以外にも頑張っている企業（ものづくりの企業）が色々と存在することを知れて良かった。内容が充実していた。（保護者／徳島大学総合科学部社会創生学科 4 年生）

⑤　プログラムへの満足度（有効回答数：学生 38 人、保護者 18 人）

	学生	保護者
期待通りの情報が得られて満足している。	20	13
期待していた情報は得られたが、不十分である。	9	0
期待していた情報は得られなかったが、本ガイダンスには満足している。	8	4
期待していた情報は得られず、不満である。	1	1
• 総じてプログラム参加者の満足度は高い。 • 学生については、プログラムで得られる情報について、さらなる情報を求める声が見られる。		
関連する参加者の声（自由回答項目より抜粋）		
• 目指している業種とは違った職種あるいは会社の方のお話が聞けてよかった。特にプラットイーズさんは技術面以外でも魅力がある会社と思った。（学生／阿南高専機械工学科 4 年生） • もう少し長い時間で、詳しい話を聞きたい。（学生／徳島大学生物資源産業学部生物資源産業学科 1 年生）		

⑥　自由記述

【導入企画】

良かった点

- 実際に企業に入ってみないと分からないことが多いことが分かった。（学生／徳島大学総合科学部社会創生学科 3 年生）
- 企業のイメージと実際に行ってみて感じたことに差があることが分かった。本当の中身というのは中に入ってみないと分からないことが多い。（保護者／徳島大学工学部知能情報工学科 3 年生）

改善してほしい点

- もう少し時間が長くてもよい。（学生／徳島大学総合科学部社会総合科学科 1 年生）
- 就職先を選ぶときに企業のどういった点を見ることが大事なのか、もう少し詳しく教えてほしかった。（学生／徳島大学総合科学部社会創生学科 3 年生）

【基調講演】

良かった点

- 大企業だけが全てではない点が参考になった。（学生／徳島大学工学部電気電子工学科 3 年生）
- 徳島の強みを知ることで関心を持つ人が増えるのではないかと感じた。（学生／徳島大学総合科学部社会総合科学科 1 年生）
- データの観点から徳島を考察した話を初めて聞いたため、非常に良かった。大塚グループ、日亜化学以外にも頑張っている企業（ものづくりの企業）が色々と存在することを知ることができ、良かった。内容が充実していた。（保護者／徳島大学総合科学部社会創生学科 4 年生）
- 徳島の強み及び現状を知ることで、自分の強みを深く理解するきっかけになった。（出展企業）

改善してほしい点

- もう少し時間をとり、より詳細に紹介してもいいかと思う。（学生／不明）

【企業講演】

良かった点

- 1 年生として、企業について考えていく上での知識としてよかった。（学生／徳島大学総合科

学部社会総合科学科 1 年生）
- 今までにはなかった職業（自分たちがが就活していた頃）や新しい職業、時代と共に変わってきた職業について知ることができた。（保護者／不明）
- あらゆる業種の可能性が理解できた。（出展企業）
- 各社のさまざまな取り組みを知ることが出来、参考になった。（出展企業）

改善してほしい点
- 徳島の企業だからこその魅力をもっと感じられるといいと思った。（学生／徳島大学工学部電気電子工学科 3 年生）
- もっと聞きたい、時間が足りない。（保護者／徳島大学工学部生物工学科 3 年生）

【個別企業相談会】

良かった点
- 実際に企業の方と話すことで、自分が考えていくべきことや企業の目指す方向性についても知ることができる機会となった。（学生／不明）
- 各社のさまざまな取り組みを知ることが出来、参考になった。（出展企業）
- 企業が常に先を見て取り組んでいることに改めて驚かされた。（保護者／不明）

改善してほしい点
- 時間が非常に少なく、充分に企業を回ることができなかった。企業側の負担も増えるかとは思うが、できればもう少し時間がほしかった。（学生／高知大学理学部応用理学科）
- もっと多くの企業の出展をお願いしたい（保護者／徳島大学工学部生物工学科 4 年生）
- 就活に関する意識受けが事前にあった方がスムーズに入れると感じた。（時期的に難しい判断とは存じますが。）（出展企業）

（5）総評

今回の企画は就活に臨む学生及びその保護者を対象に地域における経済・産業の動向や業種・業態毎の企業の取り組みやその可能性について認識を得るための機会として催した。アンケートの集計結果を見ると、全体のプログラムの作りとしては満足度が高いと言える。アンケート結果からも分かるようにニーズは想定以上に(特に保護者)あることが把握できた。アンケート及び、運営の現場から浮かび上がる課題としては、以下の 3 点が挙げられる。

① 開催時期と頻度についての再考

今回の開催は就活開始の 3 ヶ月前としたが、より早い時期の開催を望む声や、年 2 回程度の開催を望む声が 3 割程度あった。

② 情報提供の内容設定について

2 割強の参加者が、事前に期待していた内容とガイダンスの内容が異なると回答している。ガイダンス自体への満足度は高いため、当事業の主旨・目的を明確に伝え、理解賛同を得るための提示方法について考察する必要がある。

今回のガイダンスは「徳島の魅力、徳島で働く～企業ガイダンス編」として催したが、企業ガイダンスではなく、例えば業界検索、業態リサーチなど就職先を定める上で必要な業界または業態の違いについて知ることができる場であることを明確に示し、就活とは異なる“ガイダンス”としての位置付けをアピールする必要がある。

また、本ガイダンスの狙いが参加者に的確に伝わるよう、講演内容のテーマを絞る等の工夫が必要となる。

③ 出展者(開催側・情報提供者側)の構成について

今回のガイダンスは主に企業の人事課の担当者にご参加いただいたが、人事課と言う部署の特性上、人材登用に関連する相談会の色が強く出てしまい、ガイダンスの趣旨との違いに出展者・参加者を困惑させてしまった点が運営上の課題として指摘できる。

プログラムの趣旨上、企業戦略やビジョンについてのガイダンスがあることが望ましく、今後の開催においては経営者や企画部局の担当者の出席も依頼していくことが必要となる。

これらの課題を踏まえ、来年度開催に向けての方針を検討するワーキンググループの立ち上げを検討したい。

（6）広報リーフレット

文部科学省COC+事業 とくしま元気印イノベーション人材育成プログラム

徳島の魅力、徳島で働く

～企業ガイダンス編～

学生＋保護者 見る、聞く、知る。

県内大学・短大・高専・高校・中学の学生・生徒とその保護者を対象に、県内企業の魅力や将来ビジョンに加え、企業名や規模ではなく、業務内容やワークスタイル等、様々な観点から就職先を選ぶ視点を徳島の企業の講演やインターンシップ生のレポートを交えてお伝えします。

日時　平成28年 **12月18日**［日］13:00 -16:30 **参加費：無料**

場所　**徳島大学 常三島キャンパス**
理工学部内 共通講義棟6F・創成学習スタジオ

主催　とくしま元気印イノベーション人材育成協議会

参加申込先（電話・FAX・eメール）｜しめ切り‥‥12月15日［木］｜

徳島大学COCプラス推進本部事務局（研究・社会連携部地域創生課内）
徳島市南常三島町1丁目1番地（地域創生・国際交流会館3F）
電話：088-656-9888　FAX：088-656-9880　e-mail：coc-plus@ml.tokushima-u.ac.jp

対象　県内大学、短期大学、高等専門学校の学生とその保護者
- 徳島県に就職するための情報が欲しい方
- 徳島の企業の強みや、可能性を知りたい方
- 就職先に迷っており、選択肢を増やしたい方 など

県内大学等への進学を希望する高校生・中学生とその保護者
県内への進学及びその後の県内就職を考えている方
※学生や生徒のみ、保護者のみでも参加できます。

◎本ガイダンスは、企業との面談、面接の場ではありませんので、カジュアルな服装でお越しください。

文部科学省 地（知）の拠点

［協働事業］平成 28 年度 FD 地域人材育成フェスタの実施報告

COC+事業の一環として、インターンシップなど、事業において進める連携団体との協働の課題とノウハウを共有するための FD 地域人材育成フェスタを、2 月 19 日に徳島グランヴィリオホテルにて開催した。その詳細について報告する。

（1）実施の目的

1. インターンシップ教育をはじめとした、地域、特に企業や各種団体との連携による教育プログラム（以下「地域連携」）について、取り組みの成果を報告する。
2. これまでに進めてきた地域連携における工夫やノウハウを、教職員及び連携団体担当者等、ステークホルダーの間で共有する。
3. 現在進めている地域連携における課題を、教員及び連携団体担当者等、ステークホルダーの間で共有し、今後の進め方について協議する。

（2）参加人数

事業参加校教職員	：56 名
県内企業、団体等	：27 名
徳島県関係者	： 5 名
県外大学教職員	： 2 名
計	：90 名

（3）プログラム概要

【第一部】インターンシップ教育の成果と定着に向けた課題

COC+事業の趣旨説明及び、事業の一環として徳島大学が実施している「実践力養成型インターンシップ」、四国大学が実施している「創業支援事業」について、取り組み、課題、プログラムを受講した学生の体験談を紹介した。

① COC+事業の趣旨と取り組みの概説（10 分）
② 報告①：「創業支援事業の取り組み」（四国大学）（30 分）
③ 報告②：「実践力養成型インターンシップ」（徳島大学）（60 分）

【第二部】教育における地域との連携

COC+事業参加校が、地域企業・団体との連携によって実現している教育について、教員及び連携先の担当者が登壇し、成果とノウハウを紹介した。（15 分×4 事例）

① 報告①：「ボランティア・パスポートの取組み」（徳島大学、徳島文理大学）
② 報告②：地域企業と連携したプロジェクトマネジメント教育（徳島大学）
③ 報告③：「県内企業・農家との連携による新規事業モデルの検討を通したイノベーション教育の実践」（徳島大学）
④ 報告④：「食物栄養専攻における地域連携の取り組み」（四国大学短期大学部）

【第三部】情報交換会

参加教員及び参加企業・団体との間で情報交換を行った。

（４）事例報告の概要

【第一部】インターンシップ教育の成果と定着に向けた課題

報告①「創業支援事業の取り組み」（四国大学）
報告者：里見和彦（四国大学創業支援クリエーター）

- 四国大学が COC+事業で実施している創業支援事業「社長のかばんもち」「とくしまサイコー塾」「チャレンジショップ」「ビジネスプラン道場」について、事業内容及び成果の報告を行った。
- 「ビジネスプラン道場」については、実施したビジネスプランのコンペティションの優秀賞団体の学生グループから、受賞案について成果発表を行った。

報告②「実践力養成型インターンシップ」（徳島大学）
報告者：川崎克寛（徳島大学 COC+推進コーディネーター）、樫山直樹（（有）樫山農園）、千葉雄介（（株）大塚テクノ）

- 徳島大学が導入を進めているプロジェクト型のインターンシップ（寺子屋式インターンシップ）について、趣旨及び平成 28 年度の取り組み報告を行った。
- インターンシップに取り組んだ学生のうち 2 組（3 名）が登壇し、インターンシップの成果及び、取り組みを終えての思いについて発表を行った。
- インターンシップ受入先企業の樫山農園より、受け入れ担当者が登壇し、学生を受け入れる際の留意点や、企業側のメリットについて報告を行った。

【第二部】教育における地域との連携

報告①「ボランティア・パスポートの取組み」（徳島大学、徳島文理大学）
報告者：玉　真之介（徳島大学 COC+推進監）、岡山　千賀子（徳島文理大学准教授）、花野　賀胤（徳島市観光協会事務局長）

- 学生のボランティア活動参加を促し、評価する仕組みであるボランティア・パスポートの趣旨と概要を説明した。
- ボランティア受入先団体からプログラムに対する評価と今後への期待を報告いただいた。

報告②：地域企業と連携したプロジェクトマネジメント教育
報告者：日下　一也（徳島大学講師）、鵜飼　昭仁（（株）四国化工機）

- 理工学部の専門教育として開講している授業「プロジェクトマネジメント基礎」の趣旨と成果、大人数の学生をチームに分けて地域課題の解決手法を学ぶ工夫を紹介した。
- 連携先担当者から、学生の取り組みに対する評価と今後の連携への期待を報告いただいた。

報告③：「県内企業・農家との連携による新規事業モデルの検討を通したイノベーション教育の実践」
報告者：　北岡　和義（徳島大学講師）、岡部　慎司（（株）アプロサイエンス）

- 化粧品会社と連携した 6 次化産業の新規商品開発に取り組むイノベーション教育の事例を紹介した。
- 連携先担当者から 6 次産業化の課題の中での今回の取り組みの意義を報告いただいた。

報告④：「食物栄養専攻における地域連携の取り組み」（四国大学短期大学部）
報告者：植田　和美（四国大学短期大学部教授）

- 食物栄養を専攻する学生が、地域団体と連携し特産品を用いた商品開発を行った事例を紹介し、成果、大学・地域双方のメリット、継続実施にあたっての課題について報告を行った。

（５）アンケート回答の取りまとめ

【報告に対する評価（第一部）】

- 発表した学生の報告内容については、インターンシップの取組や達成度、コミュニケーションのあり方について、よくまとめられていた。（徳島大学教員）
- 取り組みの成果ではなく、協調性だけが強調されていた感がある。どういった点で「ダメ出し」されたのか、自分たちの取組のポイントなどについての説明も欲しかった。（徳島大学教員）
- 以前からインターンシップについては就職活動の一環としての活動と思っていたが、今回の学生の発表などは主体的で社会性もありおどろいた。（参加企業等）
- 実際に取り組んだ学生、企業の声こそがわかりやすい成果だと感じた。（参加企業等）

【報告についての評価（第二部）】

- 実施なさったことの報告よりは、実際に取り組まれた学生さんの生の声を伺いたかった。（参加企業等）
- 地域人材養成との関わりが、少しわかりにくい報告もあった。（徳島大学教員）
- 各大学ともに、様々な地域人材養成の取組をしていると考えられるので、そうした取組についての報告があってもよいのではないか。（徳島大学教員）
- 教育を地域に今回の報告を聞いて、地域課題に促したプログラムの充実が伝わった。（参加企業等）
- 様々な事例を聞くことで、今後の連携の可能性を考えるきっかけになった。（参加企業等）

【インターンシップ教育のメリット】

- 学生を戦力として捉え、社内の課題解決に結び付ける内容であれば、双方に取って大変有意義であることが理解できた。（参加企業等）
- 学問分野の中にはフィールド・ワークが鍵となる分野が少なからずあるが、今回の報告内容は高等教育のあらゆる分野の「フィールド・ワーク」と位置づけられるのではないか。（無記名）
- 参加、体験のみでなく、win-win になるカタチの実践的教育の試みをリアルに感じた。（参加企業等）
- 社内の人材育成となるインターンシップというキーワードが心にとまった。社内の仕組み作りはハードルが高いが、チャレンジしたい。（参加企業等）
- 学生のインターンシップ教育による成長は非常に興味深く、意義深い内容であった。地域現場での実践に勝る教育はないと実感できた。（徳島大学教員）
- 各大学、すでにインターンシップでの仕組みがある中で、今回の取り組みは新しい人材育成の手法開発として大きな意義がある。（四国大学教員）

【インターンシップ教育の課題】

- 実施にあたっては最初に計画をしっかり策定することが重要であると感じた。（参加企業等）
- 学生、企業それぞれについて何ができ何ができていないかを把握していくことが重要である。（参加企業等）
- 従来通りの座学で体系的な学びも重要性であり、日頃から骨組となる教育と、血・肉となるインターンシップ等での学びの間で学生１人１人の将来をみすえて、どれが今最優先をすべきか考えは揺れ動いている。（無記名）
- インターンシップ教育は、学生の思いを聞き、受け入れる企業にも十分理解していただき一つの方向性、ストーリーがあってこそ成立すると強く思う。今回のように、企業さん側の意見をもっと聞く、ディスカッションする場も欲しい。（参加企業等）
- どれだけ実際の就活につながるか、やや疑問・問題も残り結果を見守りたい。（徳島大学教員）

【地域連携教育の課題】
- 教育+地域においてもやはりキーマンは地域の地元人。報告の事例は地元人の熱い力ある連携と感じた。（参加企業等）
- 未だに社会へ出る前に学生が社会へ出て、その活動や業務の一端を経験することが大学教育のあるべき姿なのか迷っている。ただ、若者の持つ潜在的な力を気づかせ、能動的に人生を過ごせる様に方向付けることは教育の最重要課題であることは間違いない。（無記名）
- COC+プログラムで得られたノウハウを、専門教育の実践教育にも活かしたく、そうした意味で、COC+プログラムと専門教育のより接点が必要である。（徳島大学教員）
- 医療の場においても潜在的可能性は大いにあるため、取組事例を提示する機会を設けるなどして若手の教育者のモチベーションを上昇させることが重要だろう。（徳島大学教員）
- 地域連携を進めていくにあたって、地元人の活用がポイントである。地域課題抽出や、プログラム作成時から、学生と共に地元人を入れて行うのも一つの方向ではないか。（参加企業等）

【地域連携教育の可能性】
- クラウドファンディングを使用して資金作りをするなど、新しい形でのストーリーが魅力的で可能性を感じた。（参加企業等）
- 地域振興や企業の活動の中で教育というシステムで活動することは、学生にとっても役立つだろう。今後も、大学、地域企業、行政等が連携して教育システムの構築、充実を図ることが必要と考えられる。（参加企業等）
- 将来の事業化、収益化を見据えた教育としての産学連携は一層推進すべきである。（徳島大学教員）
- ボランティアで運営に参加することで、学生に当事者意識を持って頂けるのではないかと期待している。（参加企業等）
- 労働力不足を補うためのボランティアではなく、そこから、当事者意識・主体性を持ってもらう人材育成ツールとなりうる。（参加企業等）

【企業への期待・要望】
- 大塚テクノ様、樫山農園様のように、明確な受入方針と親身な対応をしてくれる企業の存在は非常に心強いです。（徳島大学教員）

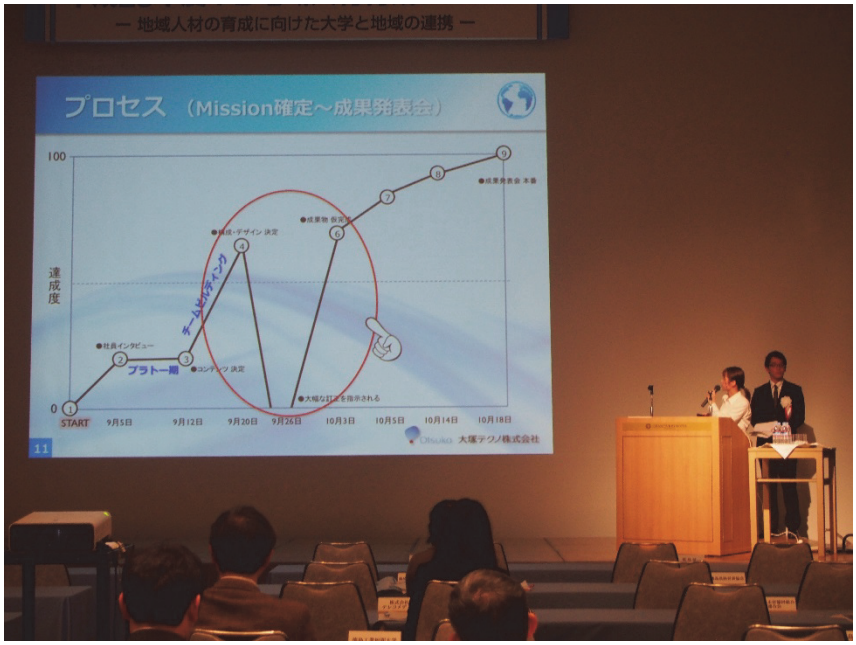
【運営についての課題】
- 各大学既存のインターンシップ担当者、企業の人事担当者にもっと聞いてもらえた方がよかった。もったいない。学内外で成果、意義の発信がもっと必要と感じました。（四国大学教員）
- 各大学関与している教職員が少ない。関与していない人の無関心をどうするか。（四国大学教員）

（6）広報リーフレット

文部科学省 地(知)の拠点
文部科学省COC+事業
とくしま元気印イノベーション人材育成プログラム
平成28年度
FD地域人材育成フェスタ
地域人材の育成に向けた大学と地域の連携
日時 平成29年2月19日[日] 14:00-17:30
場所 徳島グランヴィリオホテル 1階 グランヴィリオホール
〒770-0941 徳島県徳島市万代町3-5-1
14:00 主催者挨拶 野地澄晴(徳島大学学長)
【第一部】 インターンシップ教育の成果と定着に向けた課題
14:05 COCプラス事業の趣旨と取り組みの概説
玉真之介(徳島大学生物資源産業学部教授)
14:15 報告①:「創業支援事業の取り組み」
里見和彦(四国大学創業支援クリエーター)
14:45 報告②:「実践力養成型インターンシップ」
川崎克寛(徳島大学COCプラス推進コーディネーター)
15:45 休憩(15分)
【第二部】 教育における地域との連携
16:00 地域との連携事例の報告
17:20 閉会挨拶 吉田和文(徳島大学理事)
【第三部】 情報交換会
※第二部終了後同会場にて開催
[要事前申し込み／参加費4,000円]
主催: とくしま元気印イノベーション人材育成協議会
共催: 徳島大学FD委員会 ※このイベントは全学対象のFDを兼ねています。

（７）会場の様子

地(知)の拠点
平成28年度
FD地域人材育成フェスタ
地域人材の育成に向けた大学と地域の連携


― 地域人材の育成に向けた大学と地域の連携 ―
プロセス （Mission確定～成果発表会）
100
0
達成度
START
9月5日
9月12日
9月20日
9月26日
10月3日
10月5日
10月14日
10月18日
チームビルディング
プラトー期
大塚テクノ株式会社

参考資料

とくしま元気印 イノベーション人材育成プログラム ニュースレター

Innovation Tokushima COC Center of Community

Vol.1
2016.11

CONTENTS

●ご挨拶／COC プラス事業の概要
●事業推進コーディネーターの紹介
●会議と協働事業の報告
●【四国大学】社長のかばんもち事業の取り組み
●【徳島大学】実践力養成型インターンシップの取り組み
●教育上の取り組み／今後予定の事業

【徳島大学】インターンシップフェアの様子

ご挨拶 とくしま元気印イノベーション人材育成協議会 会長 野地澄晴（徳島大学長）

日本が直面する最重要課題である地方の人口減少問題を克服するには、地方に雇用を創出して地方への人の流れを作り、「東京一極集中」の是正に取り組む必要があります。地方の高等教育機関は、産官学の力を結集した地域の産業振興や、地域が求める人材育成の中核としての使命を果たさなければなりません。

徳島大学は平成 27 年度、徳島県や県内の高等教育機関、企業、NPO、経済団体などと連携し、学部卒業生の地域就職率増を目標とする文部科学省 COC+事業に「とくしま元気印イノベーション人材育成プログラム」が採択（平成 27 年度から 5 年間）され、次世代技術、地域医療･福祉、6 次産業化、地域づくり･観光･ICT の 4 つの分野において、地域人材の育成に向けた教育カリキュラム改革や新しいインターンシップの創設、創業支援事業など、事業目標の達成に向けた様々な事業を展開しております。

徳島大学は、本事業の申請大学といたしまして、事業協働機関の皆様とともに全学を挙げて事業を推進してまいりますので、今後とも、更なるご尽力をお願いいたします。

COC プラス事業の概要　徳島大学 COC プラス事業推進監　玉真之介（生物資源産業学部 教授）

本事業では、県内の高等教育機関における県内就職率を平成 31 年度までの 5 年間で 10%増加させることを目指しています。そのために県内の主要な企業、ＮＰＯ、関連団体との間で「とくしま元気印イノベーション人材育成協議会」を組織し、徳島県において雇用創出と学生の就職率向上が期待できる分野、具体的には①次世代技術関連分野、②地域医療・福祉関連分野、③６次産業関連分野、④地域づくり・観光・ICT 関連分野を設定しました。

その 4 分野に合わせて、(1)徳島大学におけるインターンシップを柱とした産学官連携による教育カリキュラム改革、(2)事業協働機関による地域就職率向上に向けた協働事業、(3)徳島県の策定による「vs 東京『とくしま回帰』総合戦略」による 4 分野での雇用創出の 3 つの事業に取り組んでいます。今後、本ニュースレターで、事業の進捗と各参加校における特色ある取組をご紹介して参ります。

事業推進コーディネーターの紹介

川崎克寛（特別准教授）

平成 28 年 2 月に着任いたしました。徳島大学で導入する新しいインターンシップの開発及び、大学・企業･学生の関係を構築するコーディネートに取り組んでいます。

川崎修良（特別講師）

平成 28 年 4 月に着任いたしました。徳島大学における、新しい教育カリキュラムの編成、教育効果の評価手法の開発、協働事業の企画・調整に取り組んでいます。

会議と協働事業の報告

平成 28 年　2 月　9 日	とくしま元気印イノベーション人材育成協議会（於徳島グランヴィリオホテル）
平成 28 年　3 月　8 日	キックオフシンポジウム（於徳島グランヴィリオホテル）
平成 28 年　5 月 16 日	とくしま元気印イノベーション人材育成協議会（於徳島グランヴィリオホテル）
平成 28 年　8 月 24 日	平成 27 年度事業外部評価委員会の開催（於徳島大学常三島キャンパス）
平成 28 年　8 月 25 日	第一回協働事業ワーキンググループ（於徳島大学常三島キャンパス）
平成 28 年　9 月 30 日	【徳島大学】プログラム教員会議（於徳島大学常三島キャンパス）
平成 28 年 10 月 12 日	第二回協働事業ワーキンググループ（於徳島大学常三島キャンパス）
平成 28 年 11 月　9 日	第三回協働事業ワーキンググループ（於徳島大学常三島キャンパス）
平成 28 年 11 月 23 日	特別セミナー「徳島の魅力、徳島で働く」（於四国大学交流プラザ 他）

【協働】とくしま元気印イノベーション人材育成協議会

平成 28 年 5 月に今年度第 1 回目の協議会を開催し、昨年度の総括と今年度の事業計画について審議しました。

【協働】協働事業実施委員会（ワーキンググループ）

参加校から選出された委員でワーキンググループを構成し、今年度の協働事業の具体的実施案について協議しました。

【徳島大学】プログラム教員会議

ＣＯＣプラスで開設する教育プログラムについて、科目担当教員の間で理解を深め、今後の取組について協議しました。

【協働】特別セミナー「徳島の魅力、徳島で働く」

e-learning 授業の試行として、サテライト環境を活用し、複数会場で聴講できるセミナーを実施しました。県内の大学生や高校生等を対象とし、徳島の魅力や産業の可能性に関する講演を配信しました。

【徳島大学・徳島文理大学】ボランティア・パスポート

学生が主体的に地域と関わり、地域の課題に挑戦する仕組みとして、ボランティア活動を記録する「ボランティア・パスポート」を導入しました。40 時間従事する毎に色が変化し、学生の活動を動機付けます。

【四国大学】社長の秘書体験「社長のかばんもち」事業の取り組み

四国大学では平成 28 年 8 月から 9 月にかけて、徳島県信用保証協会の協力をいただいて、社長の秘書体験を行う「社長のかばんもち」事業を実施しました。本事業はＣＯＣ＋事業に係る創業支援事業の一環となります。

事業では経営情報学部疋田ゼミの学生 11 名が、県内の従業員 10 名以下の小規模企業 5 社に応募しました。学生の希望と企業側の希望をマッチングした結果、7 名の学生の 4 社への受け入れが決まり、経営者の秘書業務を 1～2 日間体験しました。

10 月 25 日には、四国大学キャンパスにて報告会を開催しました。疋田ゼミの学生 11 名と受入先企業の経営者等 5 名が集まる中、学生による成果報告、企業から参加学生についての講評が行われた後、事業全体について参加者間で意見交換を行いました。

今後は、報告会での意見交換の結果等を反映させながら、引き続き「社長のかばんもち」事業を実施していきます。

【徳島大学】実践力養成型インターンシップの取り組み

徳島大学教育カリキュラム改革の１つとして、寺子屋式インターンシップの開発を進めています。寺子屋式インターンシップとは、インターンシップを受け入れ先任せにせず、教員が“ドン”となって少人数の学生を担当し、受け入れ先の“メンター”とも連携して事前学習からインターンシップ、事後の振り返りまで「課題・レポート・ディスカッション」を繰り返す方式の教育プログラムです。

本年度は、寺子屋式インターンシップの開発に向けた試行として、実践力養成型インターンシップと題し、学生が１ヶ月間企業や各種団体等の課題に取り組むプロジェクト型のインターンシップを実施しました。現在、7 つの企業・団体で 35 名の学生が実践力養成型インターンシップに取り組んでいます。

[実践力養成型インターンシップの位置づけと実施体制]

一般的なインターンシップは、仕事理解型、採用直結型、業務補助型、課題協働型、事業参画型５つのタイプに分類されます（図１）。「職業人意識とコミュニケーション力を育成する」ことが目標である実践力養成型インターンシップは、企業の業務に実際に参加する、後者３つのタイプとして位置づけました。

企業・団体側が学生を「お客様」ではなく、共に課題解決に取り組む「期間限定の社員」として捉えた上で、企業・団体が抱える課題を解決するためのプロジェクト、もしくは企業・団体が描くビジョンを達成するために挑戦したいプロジェクトを組み立てました。現在、受入先企業・団体と COC プラス推進本部が連携しながら取り組む学生の支援を行なっています。（図 2）

[実践力養成型インターンシップの流れ]

①企業とのつながりの構築（平成 28 年 3 月～4 月）

インターンシップの受入企業を開拓するため、企業・団体合わせて 27 社を訪問しました。また、企業人と学生の交流イベント「一歩踏み出した学生たちによるトークライブ&ワールドカフェ IPPO」を開催し、企業と学生それぞれの課題意識を抽出しました。

②プロジェクトの組み立て（平成 28 年 5 月～6 月）

インターンシップの受入企業の担当者と共に、企業の抱える課題の洗い出しを行い、インターンシップとして取り組むことが可能なプロジェクトを組み立てました。また、企業側の担当者が学生にプロジェクトを紹介する「インターンシップフェア」（参加学生数 69 名）を開催しました。

③学生のマッチングと事前学習（平成 28 年 6 月～8 月）

プロジェクトに対する学生のマッチングを行い、選考及び参加の意思を確認しました。マッチング後はインターンシップに先駆けた事前研修を参加学生及び企業側担当者に対して実施しました。

④プロジェクトへの取り組み（平成 28 年 8 月～12 月）

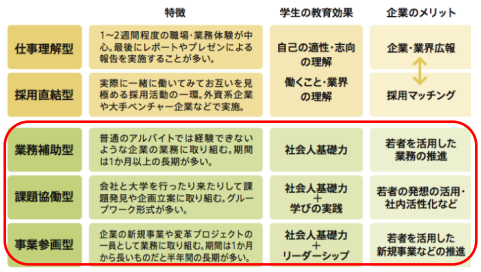
現在、7 つの企業・団体のプロジェクトに 35 名の学生が取り組んでいます。10 月には中間報告会を開催し、各プロジェクトの企業側担当者とインターン生が進捗報告と今後の目標を発表しました。12 月中には全てのプロジェクトの取り組みが完了します。

⑤最終報告会（平成 29 年 1 月）

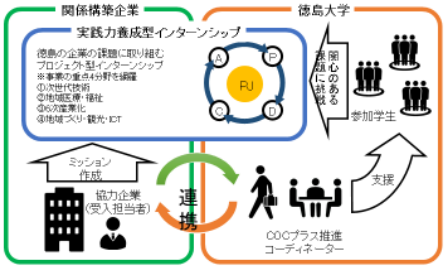
受入先企業担当者の他、事業協働機関、連携大学等教員等を招待して、成果の最終報告を実施します。

⑥来年度のインターンシップの準備と検討（平成 29 年 1 月～3 月）

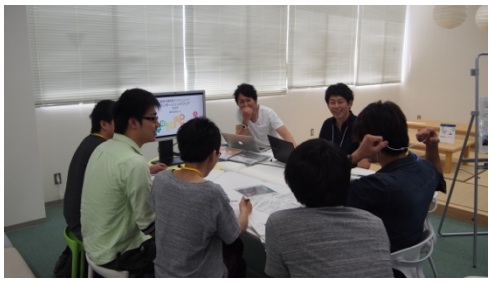
受入先を拡大するために企業訪問を行うと同時に、来年度の実施体制、教員（ドン）の役割について、各学部の担当教員を交えて検討をします。



（図 1）インターンシップの分類



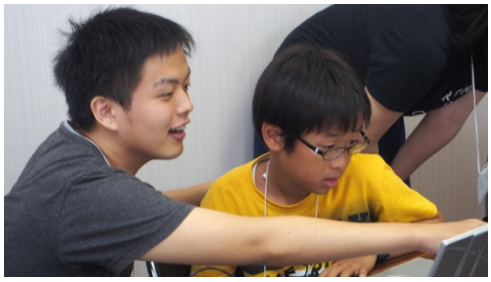
（図 2）インターンシップの実施体制



個別企業によるプロジェクト紹介の様子

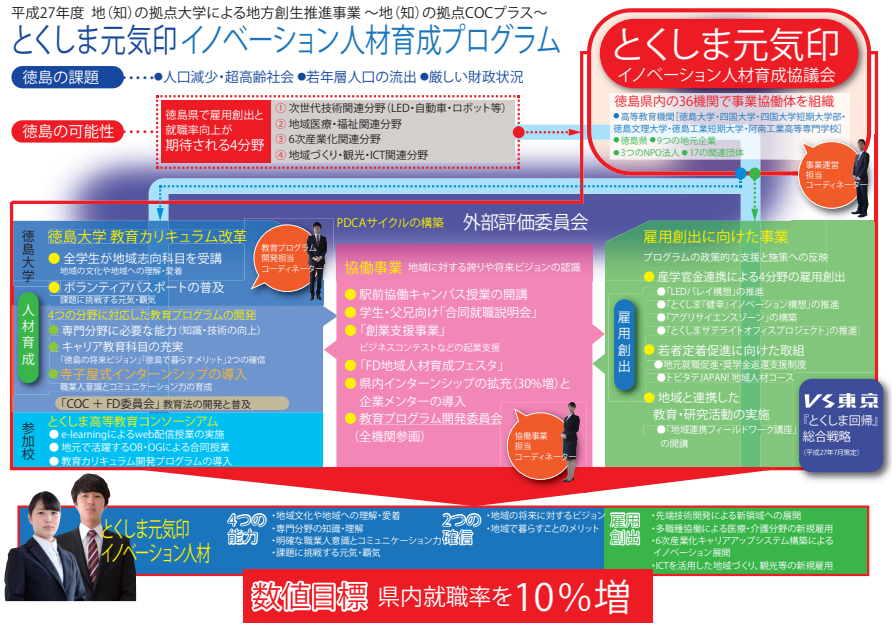
中間報告会の様子

インターンシップの様子（(有）樫山農園）



インターンシップの様子（(株）QLiP）

教育カリキュラム改革の取り組み



本事業では、とくしま元気印イノベーション人材育成プログラムと題し、徳島の未来にビジョンを持ってイノベーションに意欲と専門知識を持って参画する学生を育成するなど、県内就職率の増加につながる取り組みを進めています。

徳島大学では徳島の成長の可能性が見込まれる４つの分野に対応した教育プログラムの導入や、職業人意識とコミュニケーション力を育むためのインターンシップの開発など、教育カリキュラム改革に取り組んでいます。

さらに、地元で活躍する OG・OB を講師とした合同授業の実施など、県内６つの教育機関で協働したカリキュラム開発を進めています。

今後の事業予定

【協働】保護者向け就職ガイダンス（平成 28 年 12 月 18 日（日）／徳島大学創成学習スタジオ）

県内大学、高専の学生・保護者を対象に、県内企業の魅力や将来ビジョンと、徳島県で働く・暮らすことについて周知を図るためのガイダンスを実施します。特に、保護者に向けては企業名や規模ではなく、業務内容やワークスタイル等の 様々な観点から就職先を選ぶ視点を含めて、徳島の企業の魅力を伝達することを目指します。

【徳島大学】実践力養成型インターンシップ最終報告会（平成 29 年１月 21 日（土）／徳島大学けやきホール）

現在、徳島大学生 35 名が企業等７つの団体で、組織の課題解決に取り組むプロジェクト型のインターンシップを行なっています。プロジェクトを終えた学生の成果報告会を１月 21 日に実施致します。

【四国大学】「とくしま学生ビジネスプラン道場」最終審査会（平成 29 年１月 22 日（日）／徳島グランヴィリオホテル）

現在、四国大学でビジネスプランコンテスト「とくしま学生ビジネスプラン道場」を進めています。その最終審査会を実施します。最終審査には、二次審査を通過した６チーム（個人を含む）が挑みます。同時に、高校生によるビジネスアイデアに関するプレゼンテーションも行います。

【協働】FD 地域人材フェスタ（平成 29 年２月 19 日（日）／徳島グランヴィリオホテル）

平成 27 年度、平成 28 年度の COC プラス事業で得られた成果と、事業を進める中で明らかになった教育上の課題を、県内外の高等教育機関、自治体、企業、NPO 等の間で共有するためのシンポジウムを開催します。

事務局だより

COC プラス推進本部事務局は COC プラス推進コーディネーター２名、アソシエイト・コーディネーター２名の計４名で構成されています。日々、さまざまな業務に取り組み奔走しています。このニュースレターを読まれて COC プラス事業に興味をもたれた方はぜひ、常三島キャンパスの地域創生・国際交流会館３階の地域創生課内にある事務局にお気軽にお越しください。スタッフ一同お待ちしております。

徳島大学 COC プラス推進本部事務局（研究・社会連携部地域創生課内）
徳島市南常三島町１丁目１番地(地域創生・国際交流会館 3F)
電話:088-656-9910 FAX:088-656-9880
e-mail:coc-plus@ml.tokushima-u.ac.jp